

大月市埋蔵文化財調査報告書

うしろばやし わだいら しばくさ こうどう
後林・上平・柴草・孝道遺跡

花咲カントリー倶楽部建設予定地内における
発掘調査報告書

2018

大月市教育委員会

大月市遺跡調査会

例 言

- 1 本書は、大月市大月町花咲に所在する後林遺跡・上平遺跡・柴草遺跡・孝道遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社花咲カントリー倶楽部が計画したゴルフ場の建設計画に伴うもので、大月市遺跡調査会が株式会社花咲カントリー倶楽部の委託を受けて実施した。
- 3 調査は、平成2年6月10日から平成2年12月25日まで実施した。
- 4 調査の主体は大月市遺跡調査会である。
- 5 発掘調査参加者は次のとおりである。

調査主任	杉本 正文	(大月市教育委員会社会教育課)			
調査員補	土橋 美和	萬谷 さつき	(都留文科大学)		
作業員	(あいうえお順)				
青柳 和広	安彦 八代恵	天野 国吉	飯島 芳郎	井上 明利	
井上 修一	井上 皓造	井上 安利	小俣 晶	加藤 たけ子	
小林 栄	小林 節子	小林 嘉英	小宮 さよ子	嵯峨 和子	
塩沢 古四郎	鈴木 俊	高山 好巳	林 正二郎	平井 貞重	
平井 輝安	藤本 篤子	堀江 一枝	堀江 広一	堀内 信利	
堀江 美枝	堀江 みどり	三輪 旭	山口 義男	渡辺 和子	
- 6 遺物整理および報告書作成に係る実測、図面作成作業は、大月市埋蔵文化財整理室および大月市郷土資料館において、平成3年度および10年度、17年度、23年度、24年度、29年度、30年度に行った。
- 7 遺物整理作業参加者は次のとおりである。

杉本 正文	福田 正人	稲垣 自由	(大月市教育委員会社会教育課)		
作業員					
安彦 八代恵	奥野 久代	並木 はま子	矢野 春代	久保田美弥子	
佐藤 裕美	佐藤 美千代	佐藤 裕介	中山 京子	坂本 康次郎	
- 8 本報告書に係る出土品および図面、写真は、大月市教育委員会が保管している。
- 9 自然科学分析については、傾斜地形における火山灰土層の層位的な位置づけを確認するため、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告を第Ⅲ章第2節に掲載した。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏、諸機関より多大なる御教示、御協力をいただいた。

(敬称略・順不同)

坂本 美夫	奈良 泰史	小西 直樹
-------	-------	-------

山梨県埋蔵文化財センター
- 11 発掘調査から報告書の刊行までの間、株式会社花咲カントリー倶楽部には調査に対するご理解と絶大なご協力をいただき、感謝する次第である。

目次

例言	-----	i
目次	-----	ii
凡例	-----	vii
第1章 調査に至る経過	-----	1
第1節 事前協議	-----	1
第2節 確認調査の経緯	-----	1
第II章 地理的環境と歴史的環境	-----	7
第1節 遺跡の位置と地理的環境	-----	7
第2節 歴史的環境	-----	8
第III章 発掘調査	-----	10
第1節 調査の経過	-----	10
第2節 遺構と遺物	-----	11
第1項 後林遺跡	-----	11
層位	-----	11
遺構	-----	11
遺物	-----	15
写真図版	-----	15
後林遺跡自然科学分析報告	-----	18
第2項 上平遺跡	-----	21
層位	-----	21
遺構と遺物	-----	22
写真図版	-----	26
第3項 柴草遺跡	-----	29
層位	-----	29
遺構と遺物	-----	30
写真図版	-----	45
第4項 孝道遺跡	-----	49
層位	-----	49
遺構と遺物	-----	50
写真図版	-----	87
第IV章 総括	-----	106
参考文献	-----	110

表目次

確認調査対象地区一覧	-----	1
周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧	-----	9
土壌サンプリングA地点資料テフラ分析結果	-----	20
ピット群深さ一覧	-----	44
孝道遺跡 検出土坑一覧	-----	74

挿 図 目 次

- | | | | |
|--------|------------------|--------|------------------|
| 第 1 図 | 開発予定地の位置と調査地点 | 第 42 図 | 9号土坑出土遺物実測図 |
| 第 2 図 | A地区の地形と調査個所 | 第 43 図 | 10号土坑実測図 |
| 第 3 図 | B地区の地形と調査個所 | 第 44 図 | ピット群平面図 |
| 第 4 図 | C地区の地形と調査個所 | 第 45 図 | 遺構外出土遺物実測図 (1) |
| 第 5 図 | D地区の地形と調査個所 | 第 46 図 | 遺構外出土遺物実測図 (2) |
| 第 6 図 | E地区の地形と調査個所 | 第 47 図 | 孝道遺跡の位置 |
| 第 7 図 | F地区の地形と調査個所 | 第 48 図 | 孝道遺跡調査区設定図 |
| 第 8 図 | G地区の地形と調査個所 | 第 49 図 | 孝道遺跡B区遺構配置図 |
| 第 9 図 | 周辺の埋蔵文化財包蔵地 | 第 50 図 | 孝道遺跡A区遺構配置図 |
| 第 10 図 | 後林遺跡の位置 | 第 51 図 | 1号住居址実測図 |
| 第 11 図 | 後林遺跡遺構配置図 | 第 52 図 | 1号住居址遺物分布図 |
| 第 12 図 | 土坑実測図 (1) | 第 53 図 | 1号住居址出土遺物実測図 (1) |
| 第 13 図 | 土坑実測図 (2) | 第 54 図 | 1号住居址出土遺物実測図 (2) |
| 第 14 図 | 土坑実測図 (3) | 第 55 図 | 2号住居址実測図 |
| 第 15 図 | 遺構外出土遺物実測図 | 第 56 図 | 2号住居址遺物分布図 |
| 第 16 図 | 上平遺跡の位置 | 第 57 図 | 2号住居址出土遺物実測図 (1) |
| 第 17 図 | 上平遺跡遺構配置図 | 第 58 図 | 2号住居址出土遺物実測図 (2) |
| 第 18 図 | 1号住居址実測図 | 第 59 図 | 3号住居址実測図 |
| 第 19 図 | 1号住居遺物分布図 | 第 60 図 | 3号住居址遺物分布図 |
| 第 20 図 | 1号住居址出土遺物実測図 | 第 61 図 | 3号住居址出土遺物実測図 |
| 第 21 図 | 2号住居址実測図 | 第 62 図 | 4号住居址実測図 |
| 第 22 図 | 2号住居址遺物分布図 | 第 63 図 | 4号住居址遺物分布図 |
| 第 23 図 | 2号住居址出土遺物実測図 | 第 64 図 | 4号住居址出土遺物実測図 (1) |
| 第 24 図 | 土坑実測図 (1～3号土坑) | 第 65 図 | 4号住居址出土遺物実測図 (2) |
| 第 25 図 | 遺構外出土遺物実測図 | 第 66 図 | 5号住居址実測図 |
| 第 26 図 | 柴草遺跡の位置 | 第 67 図 | 5号住居址遺物分布図 |
| 第 27 図 | 柴草遺跡遺構配置図 | 第 68 図 | 6号住居址実測図 |
| 第 28 図 | 1号住居址実測図 | 第 69 図 | 6号住居址遺物分布図 |
| 第 29 図 | 1号住居址遺物分布図 | 第 70 図 | 6号住居址出土遺物実測図 (1) |
| 第 30 図 | 1号住居址出土遺物実測図 (1) | 第 71 図 | 6号住居址出土遺物実測図 (2) |
| 第 31 図 | 1号住居址出土遺物実測図 (2) | 第 72 図 | 7号住居址実測図 |
| 第 32 図 | 1号住居址出土遺物実測図 (3) | 第 73 図 | 7号住居址遺物分布図 |
| 第 33 図 | 1号土坑実測図 | 第 74 図 | 7号住居址出土遺物実測図 |
| 第 34 図 | 2号土坑実測図 | 第 75 図 | 8号住居址実測図 |
| 第 35 図 | 2号土坑出土遺物実測図 (1) | 第 76 図 | 8号住居址遺物分布図 |
| 第 36 図 | 2号土坑出土遺物実測図 (2) | 第 77 図 | 8号住居址出土遺物実測図 (1) |
| 第 37 図 | 3・4・5号土坑実測図 | 第 78 図 | 8号住居址出土遺物実測図 (2) |
| 第 38 図 | 6号土坑実測図 | 第 79 図 | 9号住居址実測図 |
| 第 39 図 | 7・8号土坑実測図 | 第 80 図 | 9号住居址遺物分布図 |
| 第 40 図 | 8号土坑出土遺物実測図 | 第 81 図 | 9号住居址出土遺物実測図 |
| 第 41 図 | 9号土坑実測図 | 第 82 図 | 10号住居址実測図 |

挿 図 目 次

- 第 83 図 10 号住居址遺物分布図
 第 84 図 10 号住居址出土遺物実測図
 第 85 図 11 号住居址実測図
 第 86 図 土坑実測図 (1)
 第 87 図 土坑実測図 (2)
 第 88 図 土坑実測図 (3)
 第 89 図 土坑出土土器実測図
 第 90 図 埋設土器出土状況図
 第 91 図 遺構外出土埋設土器実測図
 第 92 図 遺構外出土遺物実測図 (1)
 第 93 図 遺構外出土遺物実測図 (2)
 第 94 図 遺構外出土遺物実測図 (3)
 第 95 図 遺構外出土遺物実測図 (4)
 第 96 図 遺構外出土遺物実測図 (5)

写 真 図 版

後林遺跡

- 図版 U-1 4 号土坑確認
 図版 U-2 4 号土坑完掘
 図版 U-3 6 号土坑確認
 図版 U-4 6 号土坑完掘
 図版 U-5 9 号土坑土層断面
 図版 U-6 12 号土坑完掘
 図版 U-7 24 号土坑完掘
 図版 U-8 31 号土坑確認
 図版 U-9 28・29 号土坑確認
 図版 U-10 31 号土坑土層断面
 図版 U-11 31 号土坑完掘
 図版 U-12 32 号土坑確認
 図版 U-13 32 号土坑完掘
 図版 U-14 33 号土坑確認
 図版 U-15 33 号土坑完掘
 図版 U-16 53 号土坑確認
 図版 U-17 53 号土坑完掘
 図版 U-18 56 号土坑確認
 図版 U-19 56 号土坑完掘
 図版 U-20 59 号土坑完掘
 図版 U-21 60 号土坑完掘
 図版 U-22 遺構外出土遺物

写 真 図 版

- 上平遺跡
 図版 W-1 1 号住居址確認
 図版 W-2 1 号住居址土層断面
 図版 W-3 1 号住居址カマド確認
 図版 W-4 1 号住居址完掘
 図版 W-5 2 号住居址土層断面
 図版 W-6 2 号住居址完掘
 図版 W-7 1 号土坑確認
 図版 W-8 1 号土坑土層断面
 図版 W-9 1 号土坑完掘
 図版 W-10 2 号土坑確認
 図版 W-11 2 号土坑土層断面
 図版 W-12 2 号土坑完掘
 図版 W-13 3 号土坑確認
 図版 W-14 3 号土坑完掘
 図版 W-15 調査風景
 図版 W-16 上平遺跡遠景 (南東から)
 図版 W-17 1 号住居址出土遺物
 図版 W-18 2 号住居址出土遺物
 図版 W-19 遺構外出土遺物

柴草遺跡

- 図版 S-1 1 号住居址確認
 図版 S-2 1 号住居址土層断面
 図版 S-3 1 号住居址完掘
 図版 S-4 2 号土坑確認
 図版 S-5 2 号土坑完掘
 図版 S-6 6 号土坑完掘
 図版 S-7 6 号土坑地下室工具痕
 図版 S-8 7 号土坑完掘
 図版 S-9 8 号土坑完掘
 図版 S-10 9 号土坑完掘
 図版 S-11 10 号土坑完掘
 図版 S-12 柴草遺跡遠景 (東から)
 図版 S-13 1 号住居址出土遺物
 図版 S-14 2 号土坑出土遺物
 図版 S-15 8 号土坑出土遺物
 図版 S-16 9 号土坑出土遺物
 図版 S-17 遺構外出土遺物

写真図版

写真図版

孝道遺跡

- | | | | |
|---------|---------------|---------|-------------|
| 図版 K-1 | 1号住居址確認 | 図版 K-41 | 1号土坑遺物出土状態 |
| 図版 K-2 | 1号住居址土層断面 | 図版 K-42 | 1号土坑完掘 |
| 図版 K-3 | 1号住居址カマド確認 | 図版 K-43 | 2号土坑完掘 |
| 図版 K-4 | 1号住居址カマド確認アップ | 図版 K-44 | 3・4号土坑完掘 |
| 図版 K-5 | 1号住居址カマド土層断面 | 図版 K-45 | 5号土坑土層断面 |
| 図版 K-6 | 1号住居址カマド完掘 | 図版 K-46 | 5号土坑完掘 |
| 図版 K-7 | 1号住居址カマド完掘アップ | 図版 K-47 | 6号土坑完掘 |
| 図版 K-8 | 1号住居址完掘 | 図版 K-48 | 7号土坑完掘 |
| 図版 K-9 | 2号住居址確認 | 図版 K-49 | 8号土坑完掘 |
| 図版 K-10 | 2号住居址土層断面 | 図版 K-50 | 9号土坑完掘 |
| 図版 K-11 | 2号住居址カマド確認 | 図版 K-51 | 10号土坑完掘 |
| 図版 K-12 | 2号住居址完掘 | 図版 K-52 | 11号土坑遺物出土状態 |
| 図版 K-13 | 3号住居址確認 | 図版 K-53 | 12号土坑完掘 |
| 図版 K-14 | 3号住居址土層断面 | 図版 K-54 | 13号土坑完掘 |
| 図版 K-15 | 3号住居址カマド確認 | 図版 K-55 | 14号土坑完掘 |
| 図版 K-16 | 3号住居址完掘 | 図版 K-56 | 15号土坑完掘 |
| 図版 K-17 | 4号住居址確認 | 図版 K-57 | 16号土坑完掘 |
| 図版 K-18 | 4号住居址土層断面 | 図版 K-58 | 17号土坑完掘 |
| 図版 K-19 | 4号住居址内ピット断面 | 図版 K-59 | 18・19号土坑完掘 |
| 図版 K-20 | 4号住居址完掘 | 図版 K-60 | 20号土坑完掘 |
| 図版 K-21 | 5号住居址確認 | 図版 K-61 | 21号土坑完掘 |
| 図版 K-22 | 5号住居址完掘 | 図版 K-62 | 22号土坑完掘 |
| 図版 K-23 | 6号住居址確認 | 図版 K-63 | 23号土坑完掘 |
| 図版 K-24 | 6号住居址完掘 | 図版 K-64 | 24号土坑完掘 |
| 図版 K-25 | 7号住居址確認 | 図版 K-65 | 25号土坑完掘 |
| 図版 K-26 | 7号住居址土層断面 | 図版 K-66 | 26号土坑完掘 |
| 図版 K-27 | 7号住居址完掘 | 図版 K-67 | 27号土坑完掘 |
| 図版 K-28 | 8号住居址確認 | 図版 K-68 | 28号土坑完掘 |
| 図版 K-29 | 8号住居址遺物出土状態 | 図版 K-69 | 29・30号土坑完掘 |
| 図版 K-30 | 8号住居址完掘 | 図版 K-70 | 31号土坑完掘 |
| 図版 K-31 | 9号住居址確認 | 図版 K-71 | 32号土坑完掘 |
| 図版 K-32 | 9号住居址完掘 | 図版 K-72 | 33号土坑土層断面 |
| 図版 K-33 | 10号住居址確認 | 図版 K-73 | 34号土坑土層断面 |
| 図版 K-34 | 10号住居址カマド確認 | 図版 K-74 | 35号土坑確認 |
| 図版 K-35 | 10号住居址完掘 | 図版 K-75 | 36号土坑完掘 |
| 図版 K-36 | 11号住居址確認 | 図版 K-76 | 37号土坑完掘 |
| 図版 K-37 | 11号住居址土層断面 | 図版 K-77 | 38号土坑完掘 |
| 図版 K-38 | 11号住居址完掘 | 図版 K-78 | 39号土坑完掘 |
| 図版 K-39 | 1号土坑確認 | 図版 K-79 | 40号土坑完掘 |
| 図版 K-40 | 1号土坑土層断面 | 図版 K-80 | 41号土坑完掘 |
| | | 図版 K-81 | 42号土坑完掘 |

写真図版

- 図版 K-82 43号土坑完掘
- 図版 K-83 44号土坑完掘
- 図版 K-84 45号土坑完掘
- 図版 K-85 46号土坑完掘
- 図版 K-86 47号土坑完掘
- 図版 K-87 48号土坑完掘
- 図版 K-88 49号土坑完掘
- 図版 K-89 50号土坑完掘
- 図版 K-90 51号土坑完掘
- 図版 K-91 52号土坑完掘
- 図版 K-92 53号土坑完掘
- 図版 K-93 54号土坑完掘
- 図版 K-94 55号土坑完掘
- 図版 K-95 56号土坑完掘
- 図版 K-96 57号土坑完掘
- 図版 K-97 58号土坑完掘
- 図版 K-98 59号土坑完掘
- 図版 K-99 60号土坑完掘
- 図版 K-100 遺構外埋設土器出土状態
- 図版 K-101 調査着手
- 図版 K-102 作業風景
- 図版 K-103 作業風景
- 図版 K-104 孝道遺跡全景 (東から)
- 図版 K-105 1号住居址出土遺物
- 図版 K-106 2号住居址出土遺物
- 図版 K-107 3号住居址出土遺物
- 図版 K-108 4号住居址出土遺物
- 図版 K-109 6号住居址出土遺物
- 図版 K-110 7号住居址出土遺物
- 図版 K-111 8号住居址出土遺物
- 図版 K-112 9号住居址出土遺物
- 図版 K-113 10号住居址出土遺物
- 図版 K-114 土坑址出土遺物
- 図版 K-115 遺構外出土埋設土器
- 図版 K-116 遺構外出土遺物 (1)
- 図版 K-117 遺構外出土遺物 (2)

凡 例

- 1 本書に掲載する地図のスケールおよび方位は各図中に示した。
- 2 本書に掲載する実測図等のスケールおよび方位は各図中に示した。なお方位は磁北を北として示している。
- 3 グリッドは調査区ごとに磁北を基準に 10 m メッシュで設定した。各列とも北から南に数字、東から西にアルファベットを付して、B-2 のように呼称することとし、これを大グリッドとした。さらに大グリッド内を 2 m メッシュで 25 分割し、北東隅から南北に 1 から 5、6 から 10 のように呼称することとし、これを小グリッドとすることとした。
- 4 遺構実測図において、土層が被熱して赤変した部分はドットで示した。また遺構平面図において石は「S」と表記し、断面図では斜線で図示した。
- 5 縄文土器の施文の説明で、「半截竹管」の用語を使用するが、実際に竹管状施文具の内側で施文された痕跡を観察すると、必ずしも半截ではなく、3分の1あるいは4分の1ほどに割かれた施文具であることが多い。個体ごとにこれを検証し、「三等分に割いた」とか「4分の1に割いた竹管状施文具」などと表記することは有効ではないと判断し、本書では「半截竹管」と表記する。
- 6 土器断面図の割れ口の表現において、明らかに輪積み部分で割られた破片については滑らかな線で示した。また断面に明らかな輪積み痕が観察された場合は図中に示した。なお、須恵器の断面はベタ塗り、陶器の断面はドットで示す。
- 7 遺構名の表記において、住居址は「Pd」、土坑は「P」を用いることとする。1号住居址は「1Pd」と表記する。また1つの遺構として捉えたが、調査の結果複数の遺構が重複していた場合は、「1Pd-a」「1Pd-b」と表記する。なお、a・bは新旧などを表していない。
- 8 住居址内にピットなどが存在した場合、文章で位置を示す必要がある場合は平面図のピットの付近に番号を付し、「P1」のように示すこととした。土坑の「1P」と紛らわしいので注意されたい。
- 9 遺構の説明中、複数のピットの深さを列記する際に、ピット名の後に括弧書きで、P2(-13cm)のように表記する場合がある。この場合の深さは掘り込み面からピット底部までの深さを表し、攪乱などで床面が消滅している場合は、床があると仮定しての深さを示している。

第1章 調査に至る経緯

第1節 事前協議

昭和60年1月、株式会社花咲カントリー倶楽部（以下「原因者」と表記する）より、ゴルフ場開発計画予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。予定地は山梨県大月市大月町花咲地内のおよそ1,200万㎡である。

これを受け、大月市教育委員会は埋蔵文化財包蔵地台帳と照合し、2カ所の埋蔵文化財包蔵地と「山梨県の中世城館跡」（1986：山梨県教委）に花咲鐘撞堂とある場所が含まれていることを確認した。また計画地内には周知されていないが地形的に埋蔵文化財の存在の可能性がある区域もあることから、分布調査を行うこととし、同年2月5日～7日の三日間にわたり予定地域内の踏査を実施した。

踏査の結果、予定地内3カ所から縄文土器片や陶器片の散布が確認できたが、蔓などの植物の繁茂により踏査すらいけない箇所が3カ所あった。計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地の外、複数の包蔵地が存在する可能性があるため、用地取得が進捗し掘削を伴う確認調査が可能になった時点で正式に所在紹介するよう原因者に伝達した。

その後平成元年7月17日、原因者から計画用地がほぼ確定したので、改めて埋蔵文化財包蔵地の所在照会があった。この時点で、計画区域に若干の変更があり、進入路として予定された西側部分に周知の埋蔵文化財包蔵地である後林遺跡（G）の一部が取り込まれ、花咲鐘撞堂と目されていた箇所（H）は現状変更を伴わずに用地内へ取り込まれることとなっていた。

よって後林遺跡（G）を加え、花咲鐘撞堂跡地を除外した7カ所について、埋蔵文化財の所在の有無および存在した場合の範囲確認調査を実施することとなった。

第2節 確認調査の経緯

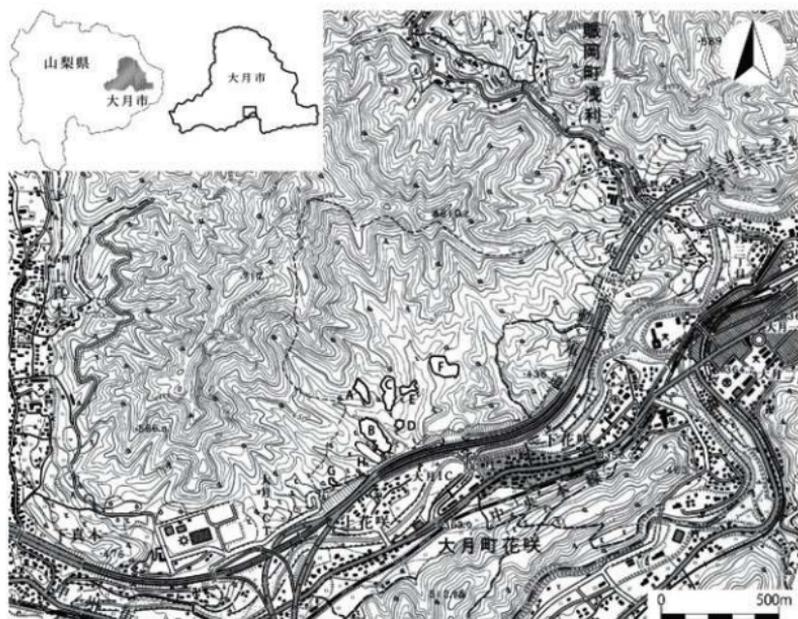
確認調査の対象とした7カ所のうち2カ所は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、包蔵地名も登録されているが、これまでの調査で用いてきたA地区、B地区などの記号で呼称することとし、新たに加わった後林遺跡をG地区として確認調査を実施することとした。

調査の方法は、地表面の遺物収集、検土杖による土壌検査、試掘坑を設定しての掘削であり、これらの方法により遺物包含層や遺構を確認するとともに、包蔵地の範囲を明らかにすることを目的とし、各調査地区の要所に試掘坑を設定し、調査の進行により必要に応じて試掘坑を追加することとした。

昭和60年の調査時には、蔓などの繁茂により立ち入ることができなかった箇所があったことから、対象地内の支障物をすべて事前に除去し、平成元年8月21日から調査を実施した。

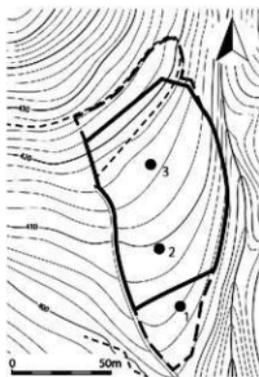
地区名	字名	地番	筆数	面積 (㎡)
A地区	柴草	2748、2750、2751、2752	4	4,410
B地区	上平	2620～2629、2643.2645～2651、2654～2661、2664	28	15,044
C地区	明後沢	2700、2745、2772、2779～2781、2783～2796	21	10,191
D地区	明後沢	2741	1	1,000
E地区	明後沢	2816、2821、2822、2824	4	2,109
F地区	孝道	3007、3009～3016、3020～3025、3027～3037	26	12,893
G地区	後林	2483、2484、2485	3	1,351

確認調査対象地区一覧



第1図 開発予定地の位置と調査地点

A地区



第2図 A地区の地形と調査箇所

昭和60年の踏査時に陶器片の散布が確認されていた地区である。花菱山の山頂から南東に連なる尾根の先端部付近で、北東に面する緩傾斜地であり、現状の勾配は10%前後である。以前は耕作地として使用されていたと推測され、高位部の土壌を低位部に盛って傾斜を緩和する方法で3段に造成されていた。そのため土壌の切り盛りが少ないと考えられる各段の中央部に試掘坑を設定することとし、北側を第1地点(以下、個々の試掘坑は「No○TP」と表記。)とし3カ所を設定した。

No 1 TPでは20～30cmほどの耕作土(表土攪乱層)を除去すると直下に関東ローム層(以下「ローム層」)が露出する状況であった。このロームは色調や粘性、含有物などが通常立川ローム層中にみられる特徴とは異なり、かなり深層部の土層であると推察された。

No 2 TPでは30cmほどの耕作土の直下にローム面が現れ、それを掘り込む円形の黒色土の落ち込みが確認できた。検土杖を差し込むと下部が漏斗状に狭くなる形状であることが推測されたが、中央部は1mの検土杖では届かず、底部が確認

できなかった。作業員の話によると、以前この地点から数メートル範囲内で地表面が陥没したことがあったということであり、地下に空間のある壕的な施設の存在が考えられた。

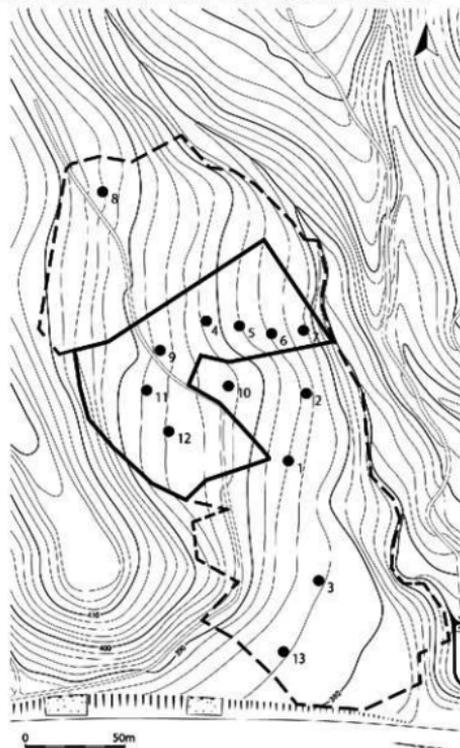
No 3 TP は、15cmほどの表土を取り去ると暗褐色の粘質土が現れ、さらに下部を40cmほど掘削すると非常に粘性の強いローム層に到達した。No 1 TP と同様、このローム面がかなり深層部であると推測されることから、かなり古い段階で上部の土層を失ったものと考えられた。

調査の結果、No 1 TP 付近には人為的な痕跡が残存している可能性がなく、No 2 TP を中心に約1,200㎡を本調査の対象とした。

B地区

平安時代の土器片の散布が確認されていた地区。花咲山の第2ピークの南側から南東に延びる尾根とその東側に形成された谷との間の緩傾斜地で、勾配は12.6%前後である。計画予定地の中では比較的広い緩傾斜地帯である。

これまでの経緯や地形の状況から、埋蔵文化財包蔵地が存在していることを前提に、包蔵地の範囲を確認するため9カ所の試掘坑を設定した。No 5 TP から土器片が出土したが、さらに調査範囲を絞り込むため4カ所の試掘坑を追加し、遺構や遺物の有無、土層堆積状態を確認した。



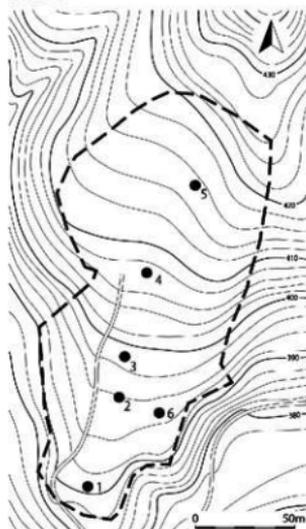
第3図 B地区の地形と調査箇所

調査の結果、No. 12TPにおいて表土の下部に暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土、ローム層と本市内で通常みられる土層堆積が確認され、黒褐色土の中からは複数の土器片が出土した。

対象地の西側の尾根裾に沿って農道があり、これより東側は一段低い地形となっている。低位のNo. 1～3TPでは遺構、遺物は確認されず、土層観察の結果からも、地山は深部のローム層が露出したものと確認され、埋蔵文化財包蔵地である可能性はないものと考えられた。

したがって、No. 5・12TPが存する緩傾斜地を主体に約2,600㎡を本調査対象区域とした。

C地区



第4図 C地区の地形と調査箇所

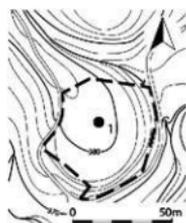
東西を谷に挟まれ、南に延びる尾根の緩傾斜面である。平均勾配は15%ほどで、計画地内では比較的緩やかな傾斜地である。昭和60年の踏査時には地表面が藪で覆われており遺物散布が確認できなかったため、改めて確認調査の対象とした。

北北東から南南西への傾斜に沿って5カ所の試掘坑を設定した。No. 2TPで表土下約20cmにローム層が確認されたが、ほかのNo. 1・3～5TPではいずれも耕作土の直下に非常に粘性の強い暗褐色土が30～40cmほど堆積しており、下部の黄褐色ローム層との境は漸移的で明確に分層し難い状況であった。

この時点で遺構や遺物は確認されなかったが、1カ所だけローム層までの深度が浅かったNo. 2TPの東方の崖に近い場所にNo. 6TPを設定した。表土はやや厚く40cmほどだったが、直下にローム層が露出する状況はNo. 2TPと同様で、表土が厚いのは、傾斜を緩やかにするために上位の土壌を移動したためと推測される。

試掘坑のほか検土杖による調査も実施したが、遺構と考えられる落込みなども確認されず、C地区には埋蔵文化財は存在しないと判断した。

D地区



第5図 D地区の地形と調査箇所

A地区が存在する尾根の最先端にあたる。幾筋もの沢による浸食を免れた小規模な丘陵状の地形を呈する。B地区やC地区と隣接するが、深い谷があるため、往来するにはA地区を経由しなければならず、地形的に孤立した場所である。平坦地の面積は狭く、埋蔵文化財包蔵地存在の可能性は低いと考えられていた地区であるが、昭和60年の踏査時に足を踏み入れることができなかったことから調査対象とした。

平坦地中央に試掘坑1カ所を設定した。15cmほどの砂利層の直下に凝灰岩礫を含む暗褐色ローム層を確認した。周囲を検土杖により探查したが、試掘坑と同様の土層堆積が確認された。

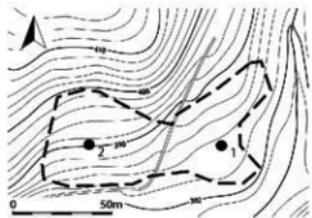
D地区の標高が隣接のB地区やC地区より低いことから、浸食により上位層を失った場所であり、その時期は立川ロームの堆積が認められないことから立川ローム堆積後と考えられる。

以上のことから、埋蔵文化財は存在しないと判断した。

E 地区

C 地区と同一尾根の南東側裾部のやや傾斜を減じた部分。標高はC地区の中ほどより 10 m 以上低く、平均勾配が 24% とやや急傾斜部分が凌駕する地形である。

昭和 60 年の未調査地区であることから調査対象とし、2カ所の試掘坑を設定した。No 1 TP では地表下 20cm に D 地区と同様の凝灰岩礫を含む暗褐色ロームを確認、No 2 TP では地表下 40cm に非常に粘度の強い暗褐色ロームを確認した。試掘個所以外の箇所も検土杖によって下層の状況を調査したが、いずれも試掘坑と同様の状況が確認され、遺物、遺構の存在が確認されず、埋蔵文化財は存在しないと判断した。



第 6 図 E 地区の地形と調査箇所

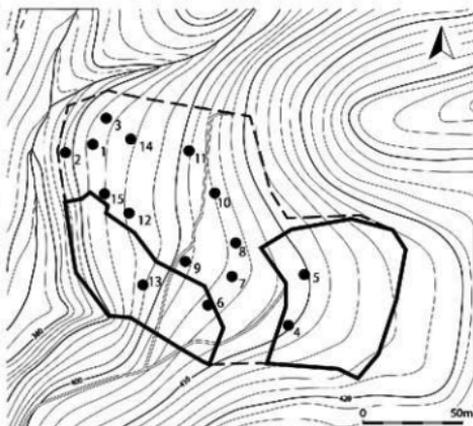
F 地区

周知の埋蔵文化財包蔵地、孝道 1 遺跡、孝道 2 遺跡を含む緩傾斜地。台帳には孝道 1（花咲 3027）・孝道 2（3032）の 2 筆が記載されているだけで、その範囲は明確ではなかった。F 地区全体の地形を概観すると谷地形の中の緩傾斜地であるが、調査区のほぼ中央を南北に横断する農道に沿って段差があり、地形的にはこの段差によって東西に分断されていると言える。

確認調査は周知の包蔵地とされる No 1 TP を中心に、谷地形の全域に 15カ所の試掘坑を設定した。

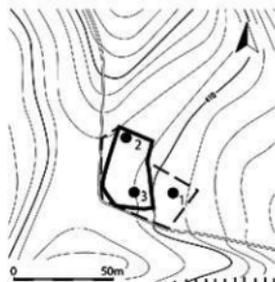
数カ所の試掘坑から遺物の出土、遺構の一部が確認され、結果的には、平安時代の遺物が出土する東部の一帯と縄文時代の遺物が出土する西側の部分があり、両者の間には遺物が出土しない地帯があることが分かった。また孝道 1・2 遺跡として登録されていた部分の地下には遺物や遺構は確認されなかった。

本調査については、北西部および南側中央部の遺物の空白地帯を除き、東側谷地形部を A 区、西側の孝道 1・2 遺跡部分を B 区とし、合わせて約 3,400 m² を対象とした。



第 7 図 F 地区の地形と調査箇所

G地区



第8図 G地区の地形と調査箇所

花咲山山頂から南西に続く尾根は1kmほど先で三方向に分岐する。このうち南東方向へ延びる尾根の先端部は中央自動車道の工事で切断され、現在は擁壁となっている。G地区はこの擁壁から60mほど北側にある鞍部の東側裾部に位置する。

周知の埋蔵文化財包蔵地（後林遺跡）として登録されているが、かなりの急傾斜地（平均勾配24%前後）であることから埋蔵文化財の存在が疑われていた個所でもある。台帳に記載されている花咲2483番地の隣接地に3カ所の試掘坑を設定した。

調査により遺物の出土はなかったが、No.3 TPで人為的な掘り込みを確認した。また検土杖によりNo.2 TPの東側に数カ所の掘り込みがあることが確認された。G地区東側の低位部は地表下70cm以下に粘質土が厚く堆積しており遺構存在の可能性が低いことから除外することとし、西方の約1,400㎡を本調査の対象とした。

確認調査の結果

調査の結果、2カ所の周知の埋蔵文化財包蔵地（F・G地区）のおおよその範囲を確定し、新たに2カ所の埋蔵文化財包蔵地の存在を確認（A・B地区）することができた。

調査終了後、原因者と協議し、新発見のA・B地区については所在地の字名から、柴草遺跡（A地区）、上平遺跡（B地区）と呼称し、本調査を実施すること。周知の埋蔵文化財包蔵地であるG地区については台帳の通り後林遺跡として、F地区については孝道1・2遺跡の登録地からは包蔵地の痕跡が認められないものの、調査対象地内に遺構・遺物が確認されたことから、全体を孝道遺跡と呼称することとし、本調査を実施すること。ほかの3箇所（C・D・E地区）については、埋蔵文化財包蔵地とは認められないので本調査の対象外とすることを確認し、平成2年度に発掘調査を実施することとなった。

第Ⅱ章 地理的環境と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

山梨県は大菩薩嶺から御坂山地に連なる山稜によって、中西部地域と東部富士五湖地域に分かれており、大月市は東部のいわゆる郡内地方に属している。北は大菩薩嶺の石丸峠から東に連なる山稜、通称牛の寝通りを境に小菅村と接し、東は佐野峠、権現山、扇山と連なる山稜により上野原市と、南は桂川の流路と並行する倉岳から九鬼山へ連なる山稜、さらに笹子川南岸の高川山から鶴ヶ島屋山を経て清八山に続く山稜沿いに上野原市（旧秋山村）、都留市、富士河口湖町の一部と接し、西側は小金沢山系から笹子峠以南に連なる山稜に沿って甲州市、笛吹市と周囲を6市町村に囲まれている。市の平面形は北を頂点とする概略三角形を呈し、底辺にあたる南辺部は東西に27.1km、南北は19.2kmで、面積は約280.3km²である。市の最高位地点は七保町瀬戸の小金沢山々頂で標高2014.4m、最低位地点は梁川町新倉の桂川河川敷で標高202m前後である。

市の西端部にあたる笹子峠付近の狩屋野川を水源とし新田沢、奥野沢川の水を集めて東流する笹子川は、大月付近で桂川に合流する。桂川は富士五湖の一つである山中湖を水源とし、北西に流下し、富士吉田市内で北から北東に屈曲し、西柱町、都留市を経て大月市内に流れ込み、笹子川と合流する。桂川を主体にすると、合流後に東へ流路を変えることとなるが、笹子川から見るとそのまま東へ流れていることになる。桂川はその後、浅利川、葛野川など支流の水を集め、蛇行を繰り返しながら東進し、神奈川県相模湖を経て南東方向に流れを変え、厚木市の北部を通過後、南へ向かい、相模湾に流れ込む全長約113kmの河川である。

地学的にみると大月市の桂川以北は関東山地に属し、御坂峠の北側の藤の木から神奈川県愛川町に及ぶ藤の木-愛川構造線に沿った桂川流域は中央低地と呼ばれている。また、桂川以南の山稜地帯は丹沢山地に属する。したがって大月市の地形を概観すると、東西に帯状に延びる中央低地が北側の関東山地と南側の丹沢山地に挟まれている形状と言えよう。関東山地側からは、真木川、浅利川、葛野川などが合流し、丹沢山地側からは比較的小規模な小沢川、藤崎沢などが合流する。これら大小の河川の浸食により、起伏に富み谷が入り組んだ複雑な地形が形成されている。このため傾斜地が多く、市域面積の8割以上が山林や原野である。一方、中央低地部には河川的作用により大小の河岸段丘が発達し、希少な平坦面が形成されており、人々の主要な生活の場となっている。

交通面では、葛野川沿いに北上して現小菅村や上野原市へ通じる道筋、桂川沿いに相模へ通じる道筋、大月から桂川に沿って富士に向かう道筋、笹子町大鹿川沿いに甲州市田野へ通じる道筋、同じく笹子町道分から御坂方面につながる道筋などがあってとされるが、詳細は不明である。相模に向かう道筋以外は険しい山越えを伴うので、気軽に往來できるような道ではなかったと想像できる。江戸時代になると甲州道中が整備された。甲州道中開設の目的が当初より軍事的な意味合いが強かったとというのが定説であり、軍事上重要な通路であると認識されていたようである。江戸時代中期以降は富士山参詣道の分岐となり、交通の要衝としての役割も大きくなった。現在でも国道や鉄道、高速道路は甲州道中や富士道に沿って整備され、首都圏と甲信地方あるいは富士山や駿河方面へのアクセス路として重要な役割を果たしている。

開発予定地は大月市大月町花咲地区内、笹子川と桂川の合流点より上流500～1,500mほどにかけての左岸、中央自動車道大月ジャンクションの北側に位置する。この辺りは笹子川と真木川の合流点付近の河岸段丘が発達し、多くの埋蔵文化財包蔵地の密集地の近隣である。対象地は花咲山の山裾にあたり、南向きの傾斜地であるが、幾筋もの谷の浸食が凌駕し、平坦面が少なく、特に複雑な地形を形成している場所である。

第2節 歴史的環境

縄文時代

現在大月市内では174カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。时期的に重複する包蔵地もあるが、包蔵地総数との割合において80%以上が縄文時代の包蔵地である。

今回調査対象の4カ所は、いずれも笹子川左岸の花咲山裾部にあたり、包蔵地の密度が高い大月町真木地区に隣接した場所である。付近の縄文時代の遺物包蔵地として、銭神遺跡(35)、西の上A遺跡(11)、西の上B遺跡(107)、原平A遺跡(42)、原平B遺跡(41)などが知られる。中でも原平A・B遺跡は1983年から1984年にかけて発掘調査が行われた複合遺跡で、縄文時代から平安時代にかけての住居跡が100基以上確認され、特に縄文時代早期の集落跡が発見された例として貴重な遺跡である。

西側の初狩町も包蔵地の密度が高く、特に下初狩藤沢地区の横道遺跡(21.22)、寺門遺跡(23.24)では現在でも畑の中に土器片が散布しており、縄文時代中期の集落遺跡の存在が予測されている。対象地南側の大月町花咲地区には遅郷1～4遺跡(43.84～86)があり遺跡群の様相を呈しているが、広範囲の集落遺跡であろうと目されている。やや東側の桂川右岸、大月地区には市内最大級の河岸段丘があり、過去に11次にわたる発掘調査が行われている大月遺跡(44)がある。縄文時代から平安時代にわたる複合集落遺跡であることが知られている。

これらの包蔵地のうち、原平遺跡、大月遺跡以外は発掘調査が行われた経緯はなく、遺物散布地として台帳に登録されている。

古墳時代

いわゆる郡内地方は甲府盆地のある国中地方に比べ、古墳の存在数が少なく、その分布は大月市と上野原町に限られる上、时期的にも終末期の小円墳のみである。大月市内では飯岡町強瀬の強瀬子の神古墳において横穴式石室が確認できるが、その他は墳丘部を失っている。また分布は笹子川・桂川・葛野川流域に限られている。今回の調査対象地近隣では、前沢内屋敷古墳(105)、坂田古墳(106)が台帳に登録されているが、「消滅」と記載されており、所在を確認することはできない。

この時期の集落遺跡は確認されておらず、西の上C遺跡(107)ほか数カ所で土師器片が拾われているにすぎない。

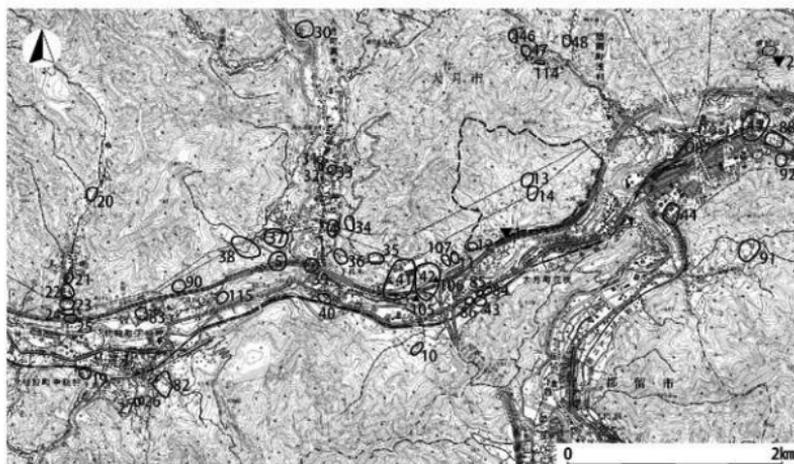
奈良・平安時代

発掘調査が実施された市内の遺跡としては、南堀之内遺跡、原平A・B遺跡(42・41)、大月遺跡(44)で複数の住居跡が確認されており、集落遺跡の存在が明らかになっている。散布地としては西の上B遺跡(11)、外ガイド遺跡(26)ほか9カ所が知られている。

中世以降

花咲鐘撞堂跡(▼1)は、花咲山山頂から南東に連なる尾根の先端部にあり、天狗山と呼ばれている。『甲斐国志』(1814)に搗鐘堂跡とあり、戦国の時合図の鐘を撞いた跡ではないかと類推している場所であろう。

第9図右上に示す岩殿山の山麓には、山岳修験の寺院である円通寺が平安時代中期頃創建されたと伝えられる。戦国期以降は岩殿城が築城され、宗教的、軍事的機能を併せ持つこととなった。平成7年には県の史跡に指定され、また平成7年～9年にかけて総合的な学術調査が実施された。



第9図 周辺の埋蔵文化財包蔵地

No.	遺跡名	種別	時代
4	中曽根遺跡	散布地	縄文
5	沢中原A遺跡	散布地	縄文
10	幸ノ田遺跡	散布地	縄文
11	西ノ上A遺跡	散布地	縄文・平安
12	後林遺跡	散布地	縄文
13	孝道1遺跡	集落跡	縄文
14	孝道2遺跡	集落跡	縄文
19	服遺跡	散布地	縄文
20	下門原遺跡	散布地	縄文
21	横道B遺跡	散布地	縄文
22	横道A遺跡	散布地	縄文
23	寺門B遺跡	散布地	縄文
24	寺門A遺跡	散布地	縄文
25	寺門口遺跡	散布地	縄文
26	外ガイド遺跡	集落跡	縄文・平安
27	上原遺跡	散布地	縄文
30	大薊遊仙橋遺跡	散布地	縄文
31	太田屋敷遺跡	散布地	縄文
32	上真木辻遺跡	散布地	縄文
33	根の神遺跡	散布地	縄文
34	梅久保遺跡	散布地	縄文
35	銭神遺跡	散布地	縄文
36	後小路遺跡	散布地	縄文
37	権現原遺跡	散布地	縄文
38	沢中原C遺跡	散布地	縄文
39	小佐野遺跡	散布地	縄文

No.	遺跡名	種別	時代
40	青木原遺跡	散布地	縄文
41	原平B遺跡	集落跡	縄文・弥生・古代他
42	原平A遺跡	集落跡	縄文・古代・中世他
43	遅郷1遺跡	散布地	縄文
44	大月遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
45	四本木遺跡	散布地	縄文
46	岩下遺跡	散布地	縄文
47	指平遺跡	散布地	縄文
48	浅利平石1遺跡	散布地	縄文
82	連野遺跡	散布地	縄文
83	房氏遺跡	散布地	縄文
84	遅郷2遺跡	散布地	縄文
85	遅郷3遺跡	散布地	縄文
86	遅郷4遺跡	散布地	縄文
87	天神遺跡	散布地	縄文・弥生
88	柳田遺跡	散布地	縄文
90	足ノ口遺跡	散布地	縄文
91	地藏窪遺跡	散布地	縄文
92	延命寺遺跡	散布地	縄文
105	前沢内屋敷古墳	墳墓	古墳(墳丘消滅)
106	坂田古墳	墳墓	古墳(墳丘消滅)
107	西ノ上B遺跡	散布地	縄文
114	浅利入遺跡	散布地	不明
115	川向遺跡	窯跡?	不明
▼1	花咲鐘撞堂跡	狼煙台?	中世
▼2	岩殿城跡	砦跡	中世

周辺の埋蔵文化財包蔵地一覧

※番号は埋蔵文化財包蔵地台帳の登録番号▼は登録外城跡推定地

第三章 発掘調査

第1節 調査の経過

大月市教育委員会は確認された埋蔵文化財包蔵地の位置や範囲を原因者に示し、開発の計画との調整、発掘調査の時期や期間、順序、予算、調査の方法、作業員の確保方法などについて協議を重ね、平成2年6月から調査を開始することとなった。

発掘調査は、すべての埋蔵文化財包蔵地について、造成の対象となる部分は全面発掘をすることになった。しかし、遺跡ごとに表土除去→遺構確認→調査という手順を繰り返す方法では、作業効率が悪くなると予測されたため、集中的に表土除去作業を先行させ、全調査個所の表土除去が終了した時点で各遺跡の調査に入るという変則的な方法を導入することとした。

以下、発掘調査の手順と方法について経過を追って記述する。

6月10日・調査開始。後林遺跡の表土除去作業。

この間、余力で上平遺跡の土棄て場の土留めの柵を作成。

24日・後林遺跡の表土除去作業終了。

25日・上平遺跡の表土除去作業開始。

この間、余力で柴草・孝道遺跡への重機進入のための雑木雑草の伐採。

7月5日・上平遺跡の表土除去作業終了。

6日・柴草・孝道遺跡への重機進入のための道整備。

16日・柴草遺跡の表土除去作業開始。

22日・柴草遺跡の表土除去作業終了。

23日・孝道遺跡へ移動のための器材移動。

24日・孝道遺跡の表土除去作業開始。谷地形で廃土置場の確保が困難なため、確認調査時に遺構物が確認されなかった北西部から着手。

8月中・孝道遺跡北西部の表土除去が終了。確認調査時のデータと照合し、この部分に遺構が無いことが確認されたため、北西部を廃土置場とし、法面に土留柵を作成した。

・廃土置場確保のため、調査区中央段差の遺構空白部分を土捨て場とし、調査区東部の廃土を置くこととした。

・表土除去作業終了を待たずに、孝道遺跡の調査区西側の調査を開始した。

この間、台風の影響により数カ所で進入路崩壊。各遺跡への侵入路整備等多数。

9月1日・孝道遺跡の表土除去作業終了し、本格的に調査を開始した。

11月9日・孝道遺跡の調査終了。

10日・後林遺跡の調査開始。

23日・後林遺跡の調査終了。

24日・上平遺跡の調査開始。

12月4日・上平遺跡の調査終了。

5日・柴草遺跡の調査開始。

25日・柴草遺跡の調査終了により全調査を終了

調査期間の中で、表土除去作業を終了した調査対象地については、事前に原因者に依頼してあった通り、磁北を基準とした10mメッシュのグリッドを順次設定していただいた。

また、孝道遺跡については、表土除去が終了した部分に順次グリッドを設定し、全体の表土除去の終了が予測された時点で作業員を二手に分け、発掘調査に着手した。

第2節 遺構と遺物

第1項 後林遺跡

平成2年6月10日から表土除去作業に着手し、同月24日に終了した。

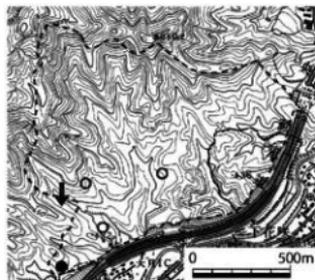
層位

基本的な層序は20～30cmの耕作土を除去すると直下にローム層が露出する状況であり、通常確認される暗褐色土や黒褐色土からなるいわゆる遺物包含層が存在しない状況である。

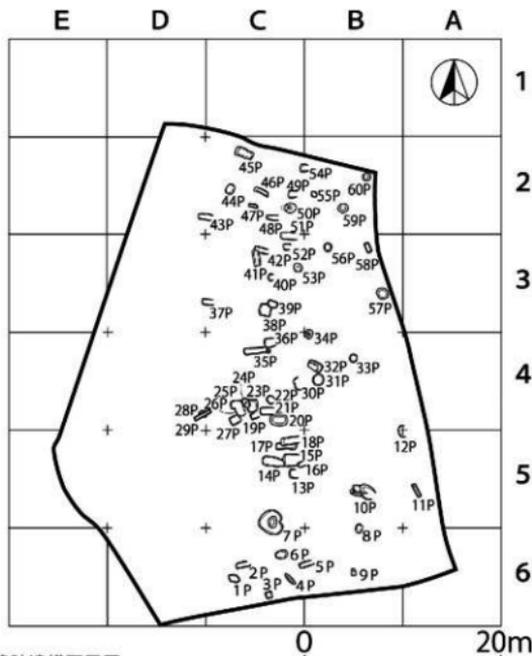
このような状況は市内の耕作地にしばしばみられるもので、細かく砕かれた耕土が強風で飛ばされ、次の作付けの時、飛ばされた分だけ深く耕される。これを繰り返すことにより徐々にローム層にまで耕作が及ぶことになると考えられる。

遺構

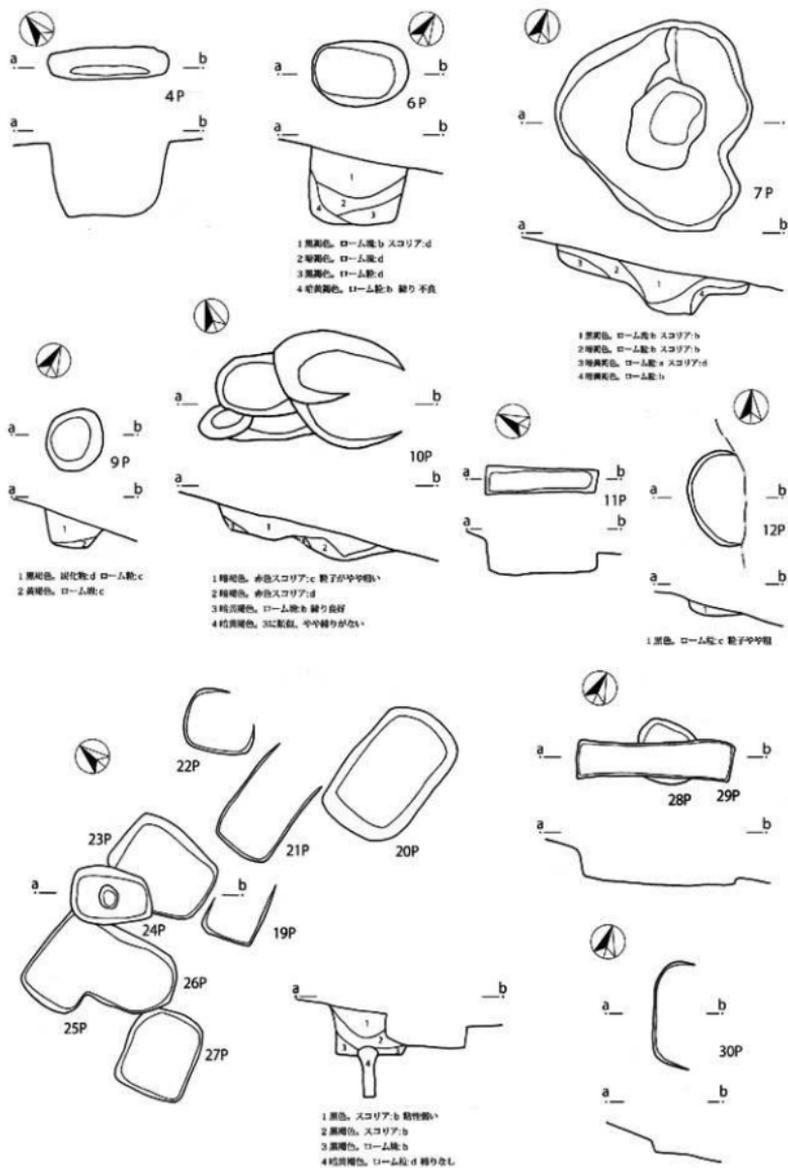
後林遺跡の本格的な調査に着手したのは11月11日であった。およそ140日間放置していたため、作業は再度遺構確認段階から行うこととなった。



第10図 後林遺跡の位置



第11図 後林遺跡遺構配置図



第 12 図 土坑実測図 (1)

0 2m

遺構はD列より東側に密集しており、60カ所の掘込みが確認された。確認された遺構は番号を付し、「○号土坑」のように呼称することとした。本稿では「○P」と表記する。

これらは一括すると土坑群であるが、規模や形態により幾つかのグループに分けられる。

平面形が長方形あるいは隅丸長方形で、長軸を等高線に直角方向または等高線に平行方向に有する一群がある。長軸が等高線に直角方向のものは、斜面下方にあたる東側の一部を失っている例が多い。これは、層序の項で触れたように長年にわたり表土が消失したため、あるいは表土層中に掘り込み面があり、表土除去作業で表土が取り去られたためなどの理由が考えられる。

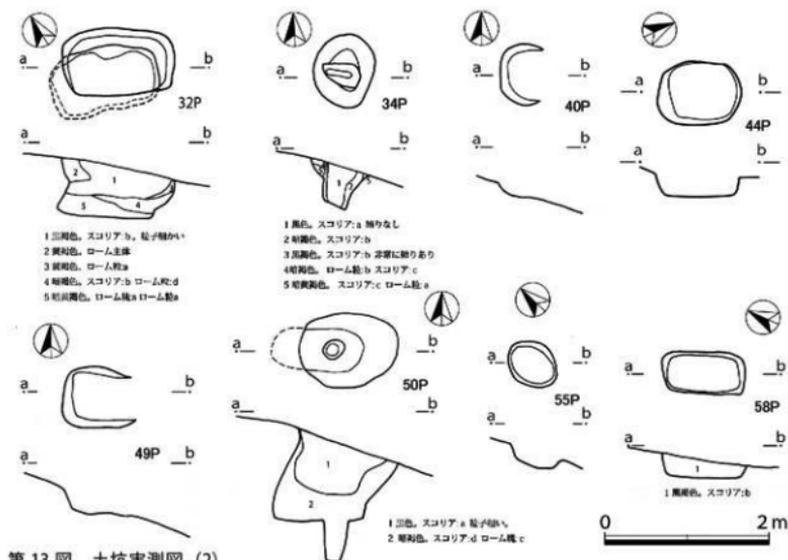
形状は四隅が角張り縦軸が長い長方形、四隅がやや丸みを帯びた長方形、四隅がやや丸みを帯び正方形に近いものなどがあるが、いずれも内部が黒色土あるいは黒褐色土の単一層で埋まっている状況から、時間をかけて徐々に埋まったものではなく、一時期に埋没した可能性が高い。

2P・3P・5P・8P・11P・13P～23P・25P～27P・29P・30P・35P～39P・41P～43P・45P・46P～49P・51P・52P・54P・58Pなど38基が該当し、長方形の各辺が直線的なこと、13～18Pなどのように、同一箇所周辺に繰り返し構築されている一群があることが特徴である。なお、29Pと重複する28Pは後に掘られた掘乱である。

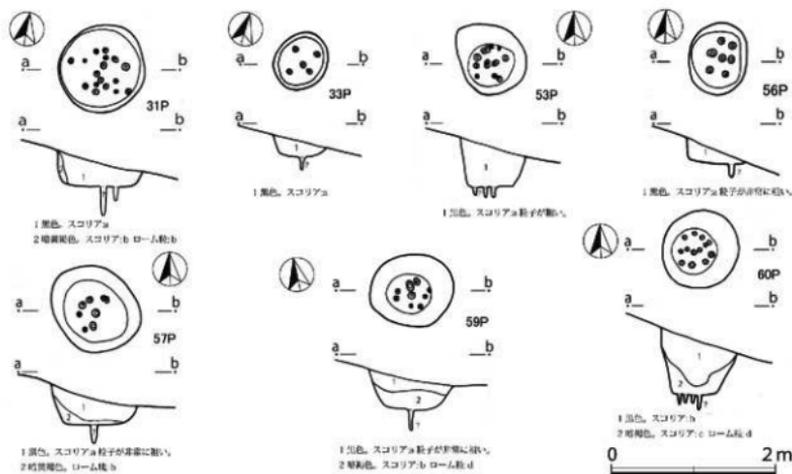
第12図～11Pは等高線方向に長軸を有する長方形、29Pは等高線に直行方向に長軸を有する長方形の土坑である。19P～23P、25P～27P、30P、第13図～49P、58Pは四隅がやや丸い長方形あるいは正方形に近い形状の土坑である。

これらの土坑については、作物を保管するための貯蔵穴的な機能や深耕に要する作物の作付けの痕跡などが考えられるが、等高線に直行して作られる場合でも底面が傾斜に沿わないことや長軸が最大でも250cmほどであることから、後者は考え難い。

これらの構築時期については判然としないが、耕地として利用されるようになって以降、最近まで造られていたと考えられる。



第13図 土坑実測図(2)



第 14 図 土坑実測図 (3)

平面形が楕円あるいは円形で、底面の形状も確認面とほぼ同形の土坑。第 12 図-6 P・9 P・12 P・28 P・第 13 図-32 P・34 P・40 P・44 P・55 P など 9 基である。構築当時の掘り込み面が攪乱を受けているため、平面や深さの法量は単純に比較できないが、攪乱の影響のない底面の大きさを比較すると、長径 60cm 以下 (9 P・55 P など) の小規模のものから、大きいものでは長径 130cm (32 P) と規模は様々である。これらの土坑の機能は不明であり、単に土坑と分類した。この中で 32 P は特殊な形態をしており、北西から南西側の壁面がオーバーハングしている。なお、34 P に伴う小穴部は後に掘られた攪乱である。

上記の土坑群と同様に楕円形プランで、底部中央に 1 ヲ所の小穴を伴う土坑がある。第 12 図-24 P・第 13 図-50 P の 2 基で、小穴の深さは 24 P が 53cm、50 P は 41cm である。土坑の機能については他遺跡の類例から、逆茂木を設置するタイプの陥し穴と考えられる。

第 12 図-4 P は長径 146cm、短径 40cm の長楕円形状の土坑で、等高線に沿って長軸を有する。長軸側の両壁は葉研のように下方で狭まり、底面では幅 12cm ほどとなる。ほかに同様な遺構は認められないが、類例から推測して陥し穴と考えられる。

第 14 図-31 P・33 P・53 P・56 P・57 P・59 P・60 P は、ほぼ円形のプランで底面に複数の小孔を有する形状の土坑である。確認された 7 基は底面のほぼ中央に小穴が存在するという点で共通するが、小穴の数は最少で 5 ヲ所、最多で 17 ヲ所と数はまちまちである。また、小穴の中には直径 4cm 以下の極小の穴もあり、幾つかは床面の干割れや後世の樹木の根の痕跡である可能性もある。これらは底部に複数の逆茂木を設置するタイプの陥し穴と考えられる。

陥し穴と考えられる土坑も含め、これらの土坑からは遺物が出土せず構築時期は不明である。

その他、土坑として調査したが人為的な痕跡ではないものとして、第 12 図-7 P・10 P がある。両者は平面形が不整形で、底面も不規則に起伏に富む。図面では複数の遺構が重複しているようにも見えるが、土層断面からは遺構が重複している様相は確認されなかった。土層が反転する風倒木痕に特徴的な兆候は確認できなかったが、風倒木痕の下層部であると考えられる。そのほか、図示しなかったが、1 P は窪地に土層が堆積した、いわゆるシミである。

遺物

第15図-1は、遺構外から出土した尖頭器である。粘板岩製で、尖頭部と基部を欠いており、風化のため全面的に灰色である。

2は4Pから出土した土器底部の破片である。明瞭ではないが縦方向の条痕文が施され、胎土には繊維痕が認められることから、縄文時代早期後葉から前期前葉ころの所産と考えられる。



第15図 遺構外出土遺物実測図

ほかに縄文時代の土器片2点、石英の碎片1点、粘板岩の剥片1点、陶器片3点が出土したが、いずれも細片であり、図示するに至らなかった。



図版U-1 4号土坑確認



図版U-2 4号土坑完掘



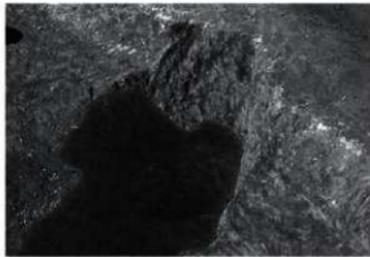
図版U-3 6号土坑確認



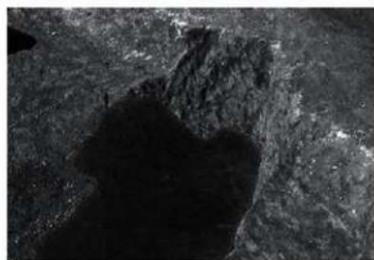
図版U-4 6号土坑完掘



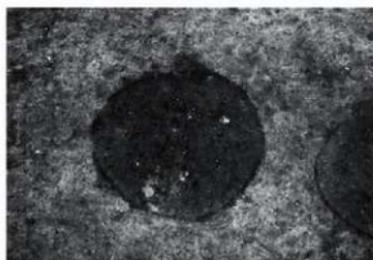
図版U-5 9号土坑土層断面



図版U-6 12号土坑完掘



図版U-7 24号土坑完掘



図版U-8 31号土坑確認



図版U-9 28号・29号土坑確認



図版U-10 31号土坑土層断面



図版U-11 31号土坑完掘



図版U-12 32号土坑確認



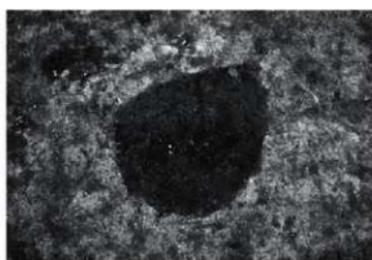
図版U-13 32号土坑完掘



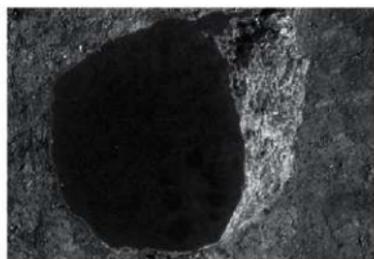
図版U-14 33号土坑確認



図版 U-15 33号土坑完掘



図版 U-16 53号土坑確認



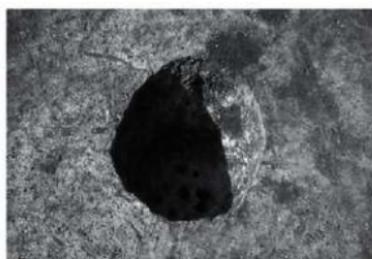
図版 U-17 53号土坑完掘



図版 U-18 56号土坑確認



図版 U-19 56号土坑完掘



図版 U-20 59号土坑完掘



図版 U-21 60号土坑完掘



図版 U-22 出土遺物

1. はじめに

後林遺跡の位置する笹子川沿岸には河性段丘が分布するが、下流の桂川沿岸ほど発達はよくない。また、河川に臨む山地の縁辺部には、やや傾斜の緩やかな斜面が局地的に分布する。これらの斜面は、地形図や遠藤・村井（1978）に示された大月周辺の地形分類図などから、崖錐であると考えられる。後林遺跡もこのような斜面上に位置している。

後林遺跡では、表層に堆積するいわゆる火山灰土層から遺物が検出されているが、その火山灰土層については、層序対比がほとんど行われていない。本報告は、遺物や遺構の層位的な位置づけを確立するために、分析による火山灰土層の層序対比を行う。

2. 対比の方法

一般に地層の対比には、指標テフラを見だし、それを鍵層にする方法がとられる。今回分析対象とする火山灰土層中には、地域のおよび層位的にみておそらく富士山のテフラに由来するスコリアが多量に認められている。当社では、これまで多くのテフラ試料を扱ってきた中から、軽石やスコリアなどの特徴記載が、テフラの同定にかなり有効であると考えられる。特に、実態鏡による比較的低位率での観察は、処理方法も簡単であり、数多くの試料に対応する場合も非常に有利である。特に、富士山を主な給源とする南関東地域の細粒のスコリア質テフラについては、屈折率や化学組成のデータが余りない現状では、有効な同定方法となっている。したがって、本分析でも同様な特徴記載を行い、テフラの対比を試み、層序を考察する。

3. 試料の採取とその選択

試料は、後林遺跡土壌サンプリングA地点（UB-A地点）で作成された土層断面より採取された。土層断面は、表土耕作土を1層とし、以下順に11層までが分類された。2層から10層までは暗褐色～黒色を呈することからいわゆる黒ボク土層であり、11層は黄褐色を呈することからいわゆるローム層であろう。

試料は1層下部から11層上部まで厚さ5cm連続で試料番号1～48までの48点が採取された。なお、資料番号1は最下位の試料であり、資料番号48は最上位の試料である。各層と資料番号の対応は以下のようにになっている。

1層：試料番号48～46	2層：試料番号45～44
3層：試料番号43～42	4層：試料番号42～37
5層：試料番号37～34	6層：試料番号34～31
7層：試料番号30～27	8層：試料番号27～22
9層：試料番号21～8	10層：試料番号8～2
11層：試料番号2～1	

分析には、耕作土の試料番号48、47、層界にかかる試料番号45、42、37、34、27、8の合計8点を除いた40点の試料を選択した。

4. 分析処理手順

試料を適量蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラスの産状を調べる。これらの観察からテフラの同定を行い、その降灰層準を推定する。

5. 分析結果

スコリアは、8層以上には多量、9層には少量～中量、10層以下には中量含まれる。8層以上に含まれるスコリアには、黒色で発泡不良、灰黒色でやや発泡不良、赤色でやや発泡良好、灰褐色でやや発泡良好の4種類が認められる。2層～7層では、前2者の多い傾向があるが、8層は灰褐色のスコリアが多い傾向にある。スコリアの最大粒径が各層毎に異なることも特徴といえる。9層以下のスコリアは、赤色のスコリアが多い。

火山ガラスは、全試料を通じて微量含まれる。ほとんどが無色透明で薄手平板上のパブル型であるが、資料番号25、16、11の3点には褐色を呈するパブル型火山ガラスも認められる。軽石は、全試料とも全く認められなかった。

6. 考察

試料中に認められたスコリアは、その特徴と産出層準および遺跡の地理的な位置から、完新世に噴出した富士山のテフラに由来すると考えられる。しかし、広い層位にわたって同様な量比と同様な特徴のスコリアが産することから、これらのスコリアは、降下堆積後に攪乱や再堆積等の経過を経たものと考えられる。遺跡の立地する斜面地の表層土壌層の形成過程を考慮すれば当然ともいえる。

富士山の完新世のテフラは、上杉(1990)によりS-0-1～S-25までの記載があるが、本分析のような産状では、これら個々のテフラに対比することはできない。ただし、土層断面下部の10層～11層がローム層の最上部であるとすれば、スコリアの産出が比較的少ない9層とスコリアの多量に含まれる8層以上は、テフラ堆積速度の遅いS-0～S-9までの層準とテフラ堆積速度が急に早くなるS-10以上の層準(上杉, 1990)に各々対比される可能性がある。この対比に従えば、9層は約3300年前～約1万年前の間の堆積年代が考えられ、8層以上は3300年以降の層であると言える。

ところで、微量認められるパブル型火山ガラスは、おそらく始良Tn火山灰(A T:町田・新井, 1976)や鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井, 1978)に由来すると考えられる。特に褐色のものはK-Ahに由来する可能性が高い。A Tの噴出年代は約2.1～2.5万年前(町田・新井, 1992)であり、K-Ahのそれは約6300年前と考えられているが、どちらのテフラも本土層断面に降灰層準は推定できない。しかし、9層にK-Ahが認められることは、上記のスコリアの産状による9層の対比と調和するとも考えられる。

〈引用文献〉

- 遠藤邦彦・村井公一(1978)山梨県大月市における猿橋溶岩直下の腐植土層の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代(122)—。地球科学, 32, p107-108.
- 町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p143-163
- 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 276 p. 東京大学出版会.
- 上杉 陽(1990)富士火山東方地域のテフラ標準柱状図—その1 : S-25～Y-114—。関東の四紀, 16, p3-28.

土壌サンプリングA地点 (U B・A地点) 試料テフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア			火山ガラス			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調	形態	量	色調・発泡度	粒径
1	46	++++	R*sg.GBr*sg>B*sg.GB*sb	10.0	+	cl	bw	—		
2	44	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	10.0	+	cl	bw	—		
3	43	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	10.0	+	cl	bw	—		
4	41	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	8.0	+	cl	bw	—		
	40	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	8.0	+	cl	bw	—		
	39	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	8.0	+	cl	bw	—		
	38	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	8.0	+	cl	bw	—		
5	36	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	8.0	+	cl	bw	—		
	35	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	8.0	+	cl	bw	—		
6	33	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	15.0	+	cl	bw	—		
	32	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	15.0	+	cl	bw	—		
	31	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	15.0	+	cl	bw	—		
7	30	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	3.0	+	cl	bw	—		
	29	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	3.0	+	cl	bw	—		
	28	++++	B*b.GB*sb>R*sg.GBr*sg	3.0	+	cl	bw	—		
8	26	++++	GBr*sg>R*sg.G*sg>Bb	8.0	+	cl	bw	—		
	25	++++	GBr*sg>R*sg.G*sg>Bb	8.0	+	Cl,br	bw	—		
	24	++++	GBr*sg>R*sg.G*sg>Bb	8.0	+	cl	bw	—		
	23	++++	GBr*sg>R*sg.G*sg>Bb	8.0	+	cl	bw	—		
	22	++++	GBr*sg>R*sg.G*sg>Bb	8.0	+	cl	bw	—		
9	21	+++	GBr*sg>R*sg.G*sg>Bb	8.0	+	cl	bw	—		
	20	+++	R*sg.GB*sb,Bb	5.0	+	cl	bw	—		
	19	+++	R*sg.GB*sb>Bb	5.0	+	cl	bw	—		
	18	++	R*sg.GB*sb,Bb	5.0	+	cl	bw	—		
	17	++	R*sg.GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	16	++	R*sg.GB*sb	5.0	+	Cl,br	bw	—		
	15	++	R*sg.GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	14	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	13	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	12	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	11	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	Cl,br	bw	—		
	10	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	10	7	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—	
6		+++	R*sg>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
5		+++	R*sg>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
4		+++	R*sg>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
11	3	+++	R*sg>>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	2	+++	R*sg>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		
	1	+++	R*sg>GB*sb	5.0	+	cl	bw	—		

凡例 — :含まれない, + :微量, ++ :少量, +++ :中量, ++++ :多量.

B : 黒色 GB : 灰褐色 Br : 褐色 GBr : 灰褐色 R : 赤色

g : 良好 sg : やや良好 sb : やや不良 b : 不良

最大粒径はmm

cl : 無色 br : 褐色

bw : バブル型 md : 中間型 pm : 軽石型

第2項 上平遺跡

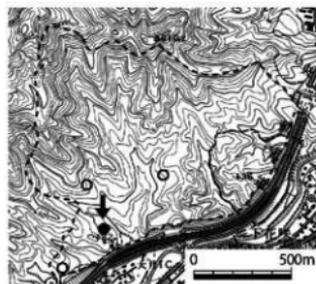
平成2年6月25日から表土除去作業に入り、7月5日に終了した。その後、他調査区の調査後、11月24日から本格的な調査を開始し、12月4日に終了した。

層位

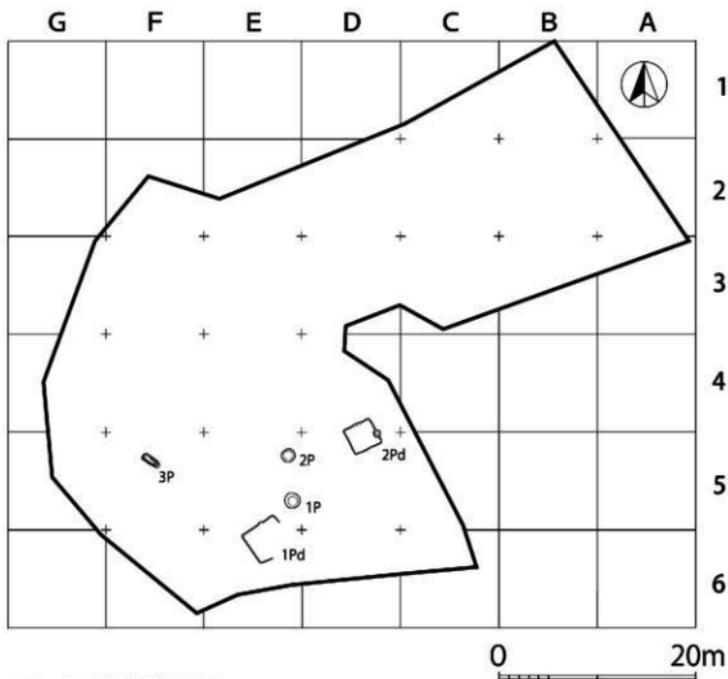
調査区北部のA～G-1～4グリッドの範囲は、15～30cmほどの表土（耕作土）を除去すると直下にローム層が露出する。この状況は後林遺跡と同様に表土消失に伴う深耕によるものと考えられる。

E・F-5グリッド付近では、表土（≒20cm）の下に暗褐色土（≒25cm）、黒褐色土（≒20cm）、暗黄褐色土（≒25cm）が堆積し、その下にローム層が認められるという通常の土層堆積がみられた。しかしこの付近より南や東側では再び耕作が深層まで及び、暗黄褐色土やローム層直上が耕作土となっている。

つまり、E・F-5グリッド付近のみプライマリーな土層堆積が残るが、周囲は徐々に暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土などを失い、ローム層上部を失っている箇所もある。



第16図 上平遺跡の位置

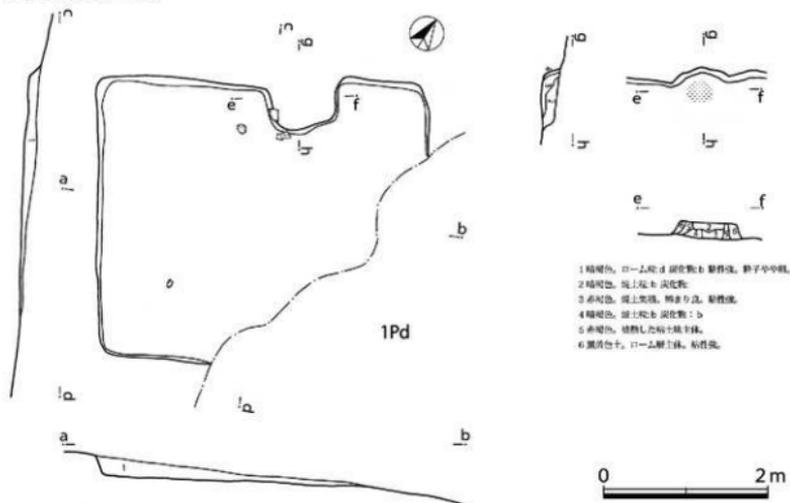


第17図 上平遺跡遺構配置図

遺構と遺物

調査区内からは住居址2基、土坑3基が確認された。確認調査時にはC-3グリッドから土器片が出土したが、結果的に遺構はD～F・5・6グリッドの範囲に偏って確認され、調査区北半のA～G-1～3グリッドからは遺構は確認されなかった。ただし、表土消失に伴う深耕が極端に行われたことを想定すると、北半部にも遺構が存在していた可能性がある。

1号住居址(1Pd)



第18図 1号住居址実測図

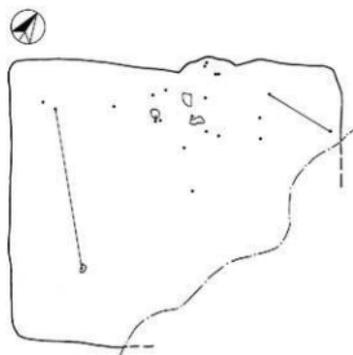
位置的にはE-6グリッドを中心に確認された。南東部を欠損しているがコーナーが直角ではないことから、平面形は長軸400cm、短軸343cmの隅丸平行四辺形と思われる。短軸は北西を向き、北西壁にカマドが存在する。

確認面から床面までの深さは、北西コーナー部で25cmほど、カマド部も底面から20cmほどしか残されておらず、住居址上部の大半が消滅していると考えられる。

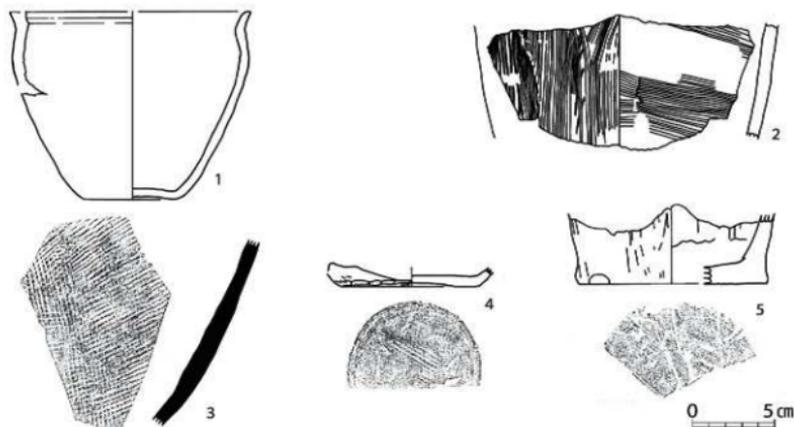
覆土は最下層のみ確認されたが、残存部の厚みが僅かであり、上層との比較が困難なため分層に至らなかった。

カマド部は上部を失っているが、構築材として5層、6層などが袖部を構成していたものと考えられる。カマド部を取り去った後の床面は火床部が赤褐色に変色していたが、ほぼ平坦であった。

住居址内部には柱穴や貯蔵穴などの施設の痕跡は認められなかった。



第19図 1号住居址遺物分布図



第 20 図 1号住居址出土遺物実測図

遺物は土器片 22 点、鉄滓 1 点の計 23 点が出土した。細片が多く、図示できるものは少ない。第 20 図 1 は小形甕である。器面が全面的に粗く細部が不明瞭であるが、ロクロにより成形しているようである。

2 は長胴甕の体部破片で、外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整がみられる。

3 は表面をタタキ調整した須恵器壺の破片である。

4 は環の底部破片で、焼成不良のため内外面とも稜線が明瞭ではないが、体部外面の底部周辺にヘラケズリの痕跡が認められる。体部内面とみこみ部に暗文の痕跡がかすかに確認できる。底部中央に切り離し時のヘラ切り痕が残る。

5 は長胴甕の底部破片である、体部外面にナデによる擦痕がみられる。

個々の遺物からは時期を推定しがたいが、全体的な様相から 8 世紀後半から 9 世紀前半にかけての所産であろう。

2号住居址 (2Pd)

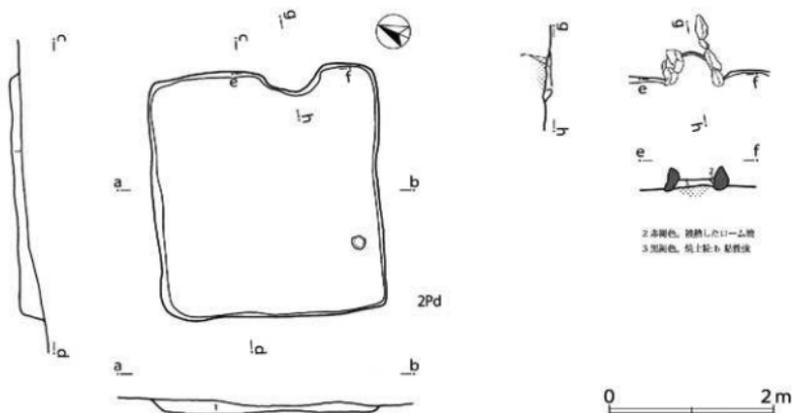
D-5 グリッドの北東部に確認された。平面形は長軸 300cm、短軸 276cm の隅丸長方形で、長軸は北東を向き、北東側短辺の中央よりやや南東寄りにカマドが存在する。

確認面から床面までの深さは北西コーナー付近が最深で 32cm、北東コーナー付近が最も浅くて 6cm 程度である。床面全体は地形の傾斜に沿って西から東に傾斜しており、東側には西側より 10cm ほど低い箇所もある。床面は硬く締まっており、床面中央部がやや高まっていた。

床面を損傷するような攪乱が数カ所に存在したが、これらを除き、カマド以外の施設、柱穴などは確認されなかった。また、床面南東コーナー付近に直径 16cm ほどの扁平な円礫が置かれているが、使用の痕跡は認められず、用途は不明である。

覆土は最下層の 1 層のみが確認できた。1 層中に上層の一部が存在する可能性もあるが、目視による土層観察の中では分層できなかった。

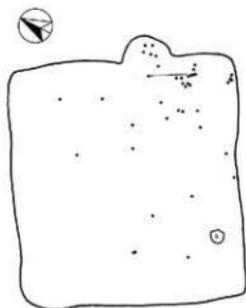
カマドは大半を欠損しており、床面に近い部分のみが残されていた。カマド両袖部の構築材として使われた礫は、上端部が攪乱層中に露出していたが、ほぼ本来の位置を保っていると思われる。



第 21 図 2号住居址実測図

る。カマド内部は主に第3層（焼土混じりの黒褐色土）で充填されており、その下に火床面が確認された。当初、焼土粒などの堆積により生成された層と思われたが、観察によりローム面が被熱して焼土化したものであることが確認された。

遺物は土器片 32 点、黒曜石片 1 点、鉄滓 2 点、礫 3 点であった。細片が多く、図示できる遺物は少なかった。



第 22 図 2号住居址遺物分布図

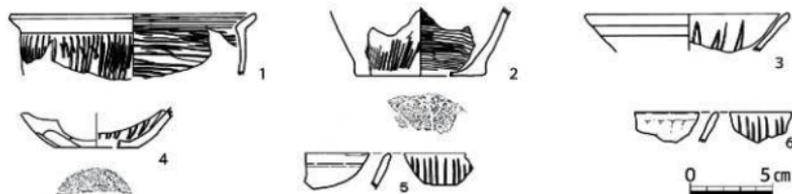
第 23 図 1・2 は小形甕で、外面は縦方向、内面は横方向のナデ整形が施されている。

3 は坏の口縁部破片で、ロクロ成形である。内面に放射状暗文が施され、口縁端部がやや肥厚している。

4 は坏の底部破片で、外面底部付近はヘラケズリ整形され、やや丸みを帯びている。底部には回転系切り痕が観察される。内面見込み部には放射状暗文が認められる。

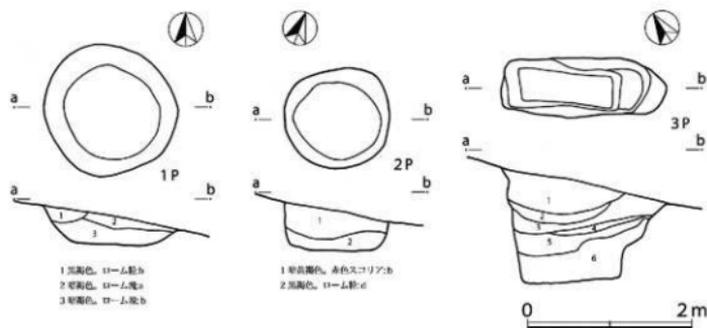
5・6 は坏の口縁部破片であり、ともに内面みこみ部に放射状暗文が認められる。5 の外面には規則的なヘラケズリが口唇部付近まで施されている。

これらの遺物の状況から、2Pd は 9 世紀前半から後半にかけての時期に機能していたと推定される。



第 23 図 2号住居址出土遺物実測図

土坑



第 24 図 土坑実測図（1～3号土坑）

1P・2PはE-5グリッドに確認され、平面形はほぼ円形である。ともに上部の大半を失っていると考えられる。形状を比較すると、1Pは壁面がラッパ状に開きながら立ち上がる形態であり、2Pの壁面は底部から丸みを帯びてほぼ垂直に立ち上がる形態である。現状の深さは1Pが48cm、2Pは59cmであるが、上部の消失を考慮すると最低でも30cm以上高い位置から掘り込まれたと考えられ、本来の深さは80～90cm以上と推測される。2Pの底面について、幾つかの小穴が存在する可能性もある。各小穴は形も大きさも統一性がなく、配置も不規則であり、植物の根などによる攪乱と判断したが、逆茂木を伴う陥し穴である可能性もある。

3PはF-5グリッドに確認され、長楕円プランの平面形で、長軸が等高線に直交する方向に構築されている。底面は長方形の平面形を呈し、北西側壁面は底面から約100度の角度で直線的に立ち上がり、南東側は底面から35cmほどまでほぼ垂直に、それ以上は130度以上の角度に開いて立ち上がっている。本来は南東側の壁もほぼ垂直に立ち上がる形態であったが、何らかの要因により上部が崩れた可能性もある。土層断面からは、現在の形状になった後に自然堆積によって埋没したと推察される。

これらの土坑に搬出した遺物はなく、構築時期や機能については不明確であるが、縄文時代の所産であると考えられる。

遺構外の遺物

第25図1～3はロク口成形による坏の口縁部破片である。1・2の内面みこみ部には放射状暗文が施されている。1の外部下半にはナデ整形時に胎土の砂粒が引きずられた痕跡が残り、口縁部がわずかに外反気味である。2の口縁端部はやや肥厚している。

4は須恵器環の底部破片である。外面下半の底部周辺を回転ヘラケズリで整形している。

ほかに土師器片、黒曜石片、石英片、石の破片等が出土している。



第 25 図 遺構外出土遺物実測図



図版W-1 1号住居址確認



図版W-2 1号住居址土層断面



図版W-3 1号住居址カマド確認



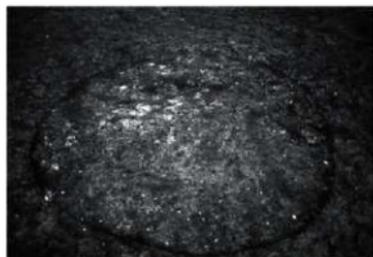
図版W-4 1号住居址完掘



図版W-5 2号住居址土層断面



図版W-6 2号住居址完掘



図版W-7 1号土坑確認



図版W-8 1号土坑土層断面



図版W-9 1号土坑完掘



図版W-10 2号土坑確認



図版W-11 2号土坑土層断面



図版W-12 2号土坑完掘



図版W-13 3号土坑確認



図版W-14 3号土坑完掘



図版W-15 調査風景



図版W-16 上平遺跡遠景(南東から)



図版W-17 1号住居址出土遺物



図版W-18 2号住居址出土遺物



図版W-19 遺構外出土遺物

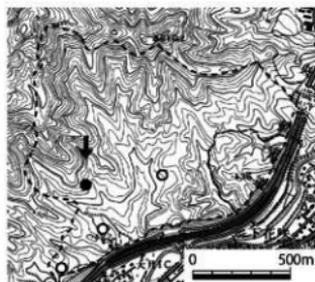
第3項 柴草遺跡

平成2年7月16日に表土除去作業に着手し、同月22日に終了した。引き続き孝道遺跡、後林遺跡、上平遺跡の調査を実施した後、12月5日から当遺跡の調査を再開し、同月25日に全調査区の調査が終了した。

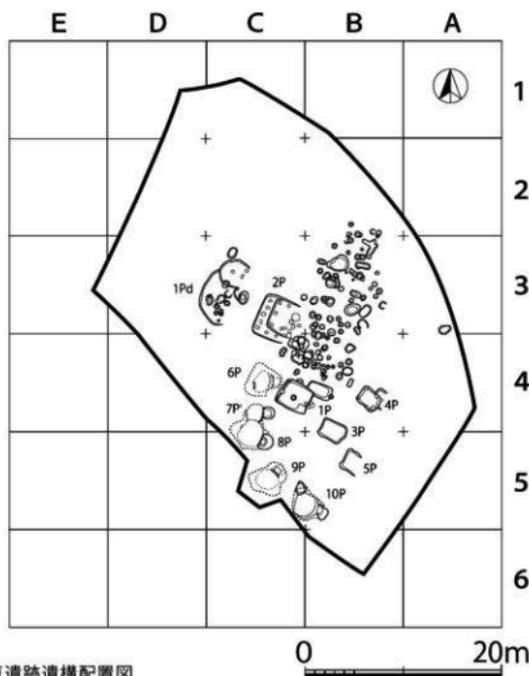
層位

B-3、C-4グリッドより北西側は15cmほどの耕作土の下部に粘性が強い暗褐色土が25cmほど堆積していた。通常の発掘調査で認められる暗褐色土とは粘度の点で明らかに性質が異なるが、成因の違いなのか後天的な何らかの影響によるものかについては不明である。この暗褐色土を取り除くとローム面が現れるが、非常に粘性が強く、明らかに立川ロームの表層とは様相が異なり、深部のロームが露出している状況と考えられる。

B-3・C-4より南東側は40cmほどの耕作土を取り除くと直にローム面が現れる。前出の後林遺跡、上平遺跡の例と同様、耕作地として使用していた期間に表土の消失と深耕が繰り返された結果であると考えられる。



第26図 柴草遺跡の位置



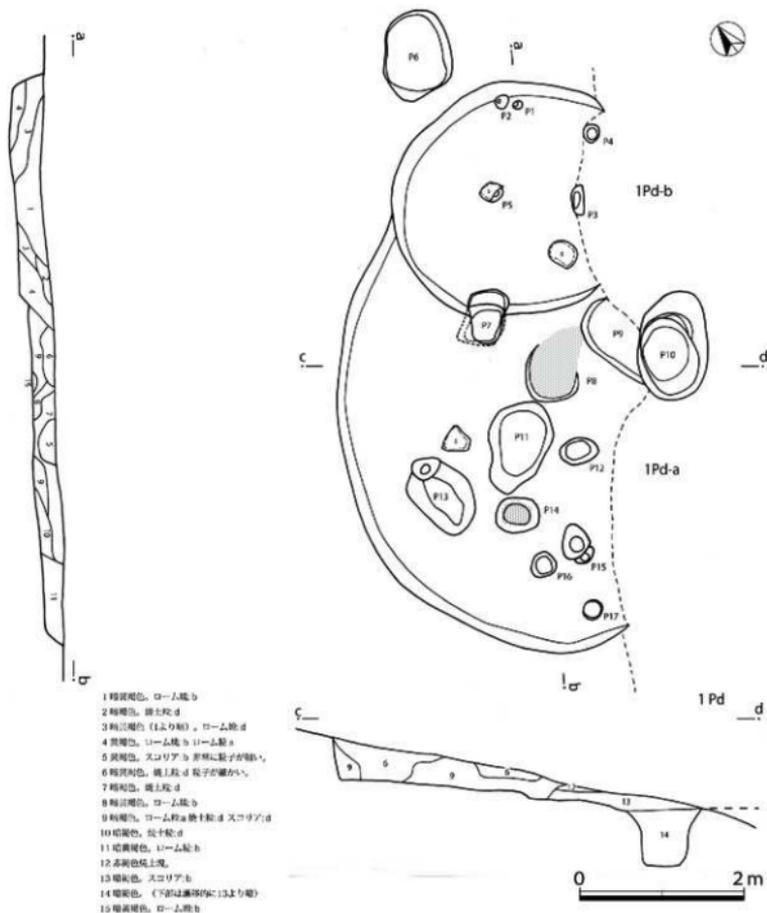
第27図 柴草遺跡遺構配置図

遺構と遺物

調査区内からは住居址1基、土坑10基およびピット群が確認された。位置的には主に、B・C-3~5グリッドに集中している。

1号住居址

C・D-3グリッドに確認された。当初は楕円形プランの大型住居と思われたが、調査の進行に伴い複数の住居址が重複していることが分かった。したがって、北側の円形の掘り込み部分を1号住居址a(1Pd-a)、南側の楕円形の部分を1号住居址b(1Pd-b)と呼称することとした。



第28図 1号住居址実測図

遺構の南東部は後世の造成によって削られ、2割程度を欠損していると考えられる。また、住居址周辺の地面の勾配が19.4%であるのに対し、造成部斜面は50.9%と急勾配である。

1Pd-aは直径280cmほどの円形プランである。床面までの深さは北東側最深部で52cmである。床面には5カ所のピットが確認されたが、P1~P4はいずれも掘り込み面からの深さが10cm以下で、柱穴とするには小規模ではある。住居のほぼ中央に位置するP5は直径20cm、深さ22cmのピットであるが、真上に扁平な石が置かれており、これも柱穴の機能は考え難い。

床面上にはP5上の石以外に南壁付近に長径35cmほどの楕円形の石が置かれているのみで、ほかの施設や痕跡は認められなかった。なお、北側にあるP6および1Pd-bとの境にあるP7は後世の攪乱である。

1Pd-bは、1Pd-aの南西に位置し、一部が重複している。土層断面の観察によると、1Pd-aより先に構築されたようである。

重複や攪乱のため推測値であるが、長軸が6mほどの楕円形プランであると考えられる。

床面はロームブロックと暗褐色土が混じり、硬く締まった部分と軟弱な部分があり、貼り床構造である可能性がある。

住居内にはP8~P17の10カ所のピットが確認された。これらのうちP8・P14の覆土は焼土混じりの暗褐色土で、底部は火床面となり赤褐色に変色している。このような状況で確認されたP8・P14は炉であると考えられる。

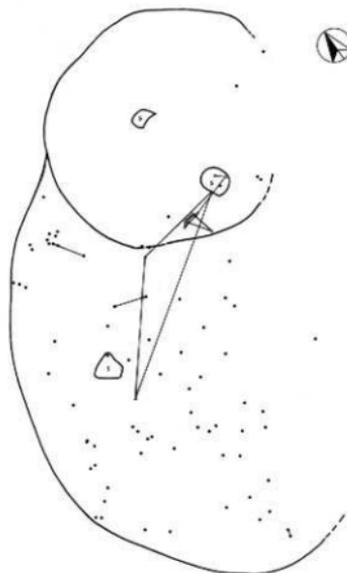
P9・P11は炉に隣接し、長径100cmほどの楕円形の掘り込みみであるが、深さは9cmほどで、何らかの機能を担っていたとは考え難いことから、住居使用に伴う窠み、あるいは貼り床面を掘り過ぎた可能性がある。

P12(床面からの深さ-28cm)、P13(-29cm)、P15(-46cm)、P16(-29cm)、P17(-67cm)は規模や深さから、柱穴と考えられる穴である。なお、床面が削られている南東側部分には柱穴らしき痕跡は確認されなかった。

P10は長径130cm、短径83cmの楕円形の穴で、ほかの柱穴とは明らかに規模が異なる。底部の長径は49cm、深さは68cmで、覆土からの遺物の出土はなかった。土層断面の観察によれば、住居址と同時期、あるいはそれ以前の構築であると考えられる。住居址に伴うものであれば貯蔵穴的な機能であろうと思われる。

遺物は縄文土器片55点、石器7点、剥片20点の計82点が出土した。第30・31図のうち1Pd-aから出土した遺物は第30-4の一部および22だけである。

1は無紋の口縁部破片で横方向のナデによる整形痕が明瞭である。18~20と同一個体と思われる、無文土器と考えられる。器形は詳らかではないが頸部で緩やかに屈曲する深鉢形と推測される。口縁残存部から推計すると口径40cmほどのやや大型の土器であろう。



第29図 1号住居址遺物分布図



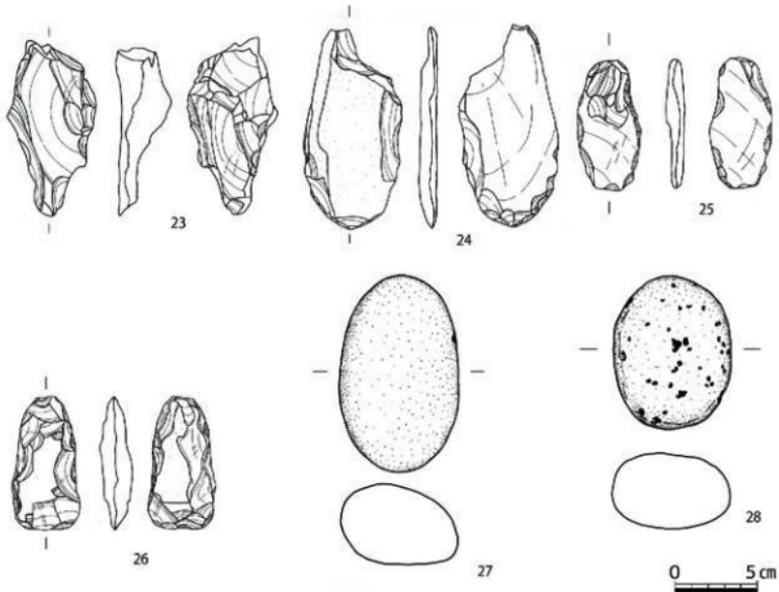
第 30 图 1 号住居址出土遗物实测图 (1)

2も無紋の口縁部破片であるが、内側に屈曲した口唇部が成形時の接合部で剥がれている。

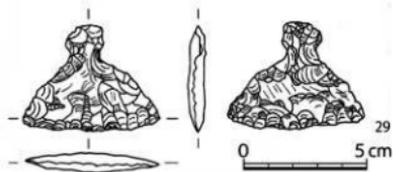
3は半截竹管状施文具の内側により口唇部に連続押し引き文が施された口縁部破片である。外面には同様の施文具により斜方向の沈線が地文として施され、それに直交する方向に2条の押し引き文が認められる。また径5mmほどの粘土粒が2カ所に貼り付けられている。

4は口縁部が大きく開く深鉢形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。地文として、3と同様の施文具の内側によって、頸部は横方向、それ以上は波状あるいは向い合った弧線状の集合沈線が描かれている。口唇部直下に上下で一對となるボタン状の貼付け文が認められる。3片が接合したが、1片は1Pd-a内から出土した土器片である。

5～17も半截竹管状施文具による地文のある体部破片である。5～7は横方向、8は斜めに右下方向と左下方向が混在、9・10は縦方向の並行沈線が施されている。11・12は矢羽根状の集合沈線が施された体部破片である。11は横方向に、12は縦方向の集合沈線の間の空間を矢羽根状の集合沈線で充填している。また、12の上部には下向きの矢羽根状集合沈線の一部が確認できる。13は横方向の並行沈線の下部に縦方向の並行沈線が施されており、深鉢形土器の頸部



第31図 1号住居址出土遺物実測図(2)



第32図 1号住居址出土遺物実測図(3)

付近の破片であろう。14～17は矢羽根状あるいは鋸歯状の集合沈線を地文とし、半截竹管による2本の結節浮線文が施された土器片である。1カ所に2個単位とみられるボタン状貼付け文が認められる。

18～20は接合しないが、胎土や焼成状況、整形痕などの特徴から同一個体と考えられる。全面に横ナデによる整形が施され、文様はまったく認められない。18・20は断面の屈曲の様子から底部に近い部分と思われるが、下部ほどナデ整形が粗雑で、表面の凹凸が著しい。

21は地文に縄文が施されている土器片で、表面には繊維の焼失痕が認められる。

22は1Pd-a内から出土した。半截竹管状施文具の内側による縦方向と背中合せの弧線文の集合沈線が認められる。14～17に類似するが、浮線文が認められないことから別個体と思われる。ボタン状貼付け文は3個を1単位として張り付けられている。

第31図 23は石核である。石材は粘板岩で、全周に剥片を剥いだ痕跡が認められるが、本体に刃部を作り出した形跡はない。ほかに同一石材と思われる剥片が数点出土している。

24～26は打製石斧である。24・25は頁岩製で、刃部が摩耗しているため、剥離痕が分かりづらい。両者とも裏面は劈開面で剥離しており、二次的な作用によるものと考えられる。

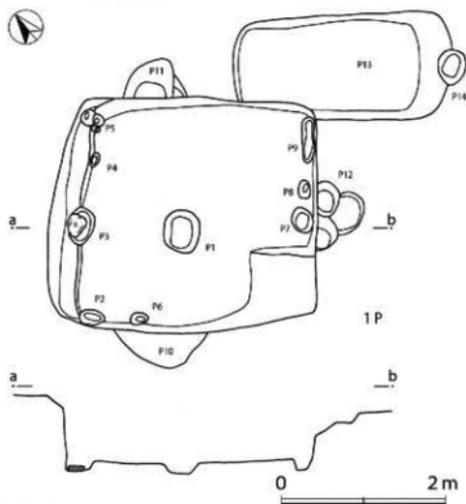
26は頁岩製の打製石斧である。石材自体の硬度が低く、剥離面の摩耗が著しい。

27・28は磨り石である。27は長径12.1cmの長楕円形の礫で、断面形は下方が扁平で上方が丸みを帯びた形をしている。下方の平坦面には使用により滑らかなった部分があり、上方部の頂部と図面下方の端部には物を敲いてつぶれた痕跡が認められる。28は楕円形で多孔質の礫を用いており、表裏面ともに滑らかな磨り痕が残る。

29は黒曜石製の石匙である。

以上のことから1Pd-a、1Pd-bともに縄文時代前期後葉ころの所産と考えられるが、両者の詳細な時間差は不明である。

1号土坑(1P)



第33図 1号土坑実測図

C-4 グリッド内南東部に位置する。今回の調査では、遺構の掘り込み面を確認する段階で、住居址と推測された遺構以外はすべて土坑と呼称したが、1P・2Pについては「小竪穴」などの呼称が適切かもしれない。

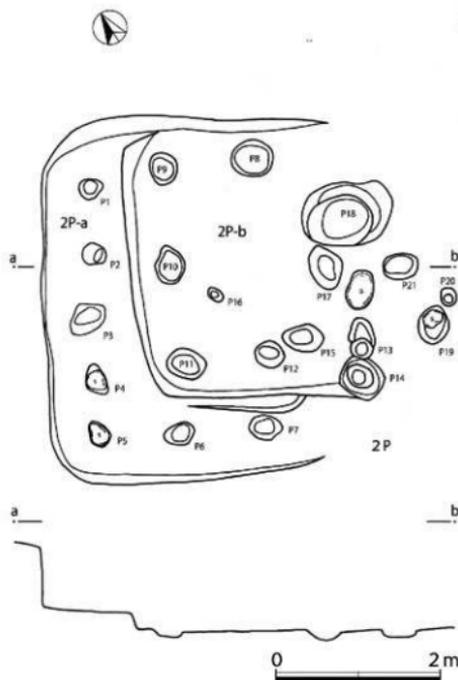
1Pの平面形は長軸325cm、短軸290cmの隅丸方形で、等高線に並行する方向に長軸を有する。深さは、最深部の北西壁際で82cm、最も浅い東コーナー付近で42cmである。南コーナー部分のみ南西壁面に沿ってスロープが造り出されている。

床面には9カ所のピットがある。ほぼ中央部のP1(-16cm)、北西壁際のP2(-13cm)、P3(-9cm)、P4(-16cm)、P5(-15cm)、南西壁のP6(-14cm)、南東壁のP7(-19cm)、P8(-19cm)、P9(-14cm)である。P1の機能は不明であるが、P2~9については壁際に位置することから、柱穴的な役割が想定できる。

P10~14は土層の堆積状況から、本遺構より後に構築された遺構であることが明らかである。P10~12・14は後述するピット群の範囲の一部であり、P13は3~5号土坑と同類のグループであると考えられる。

覆土中から、縄文土器の細片、黒曜石片などが数点出土したが、明確に本遺構に伴う遺物の出土はなく、遺構の構築年代は不明である。

2号土坑(2P)



第34図 2号土坑実測図

設定した調査区のほぼ中央、C-3・4グリッドに位置する。遺構は重複しており、大小2基の遺構が確認された。以後、大型の遺構を2号土坑a(2P-a)、小型の遺構を2号土坑b(2P-b)とする。

覆土は全体的にローム粒や礫片が混じる黒褐色土で、土層観察からは2P-aと2P-bの新旧関係を把握することはできなかった。しかし調査過程で竪穴壁のすぐ内側に多数の礫片が分布している傾向があることが分かり、2P-aより深い2P-bの外形線に沿って礫片が出土していることから、2P-bが後に構築されたと推測される。

両者とも南東側の立ち上がりが確認できないため、北東-南西方向の数値だけであるが、2P-aは等高線に並行する方向の一辺の長さが450cmの隅丸方形プランで、深さは最深部の北西側で78cmである。2P-bは南東壁を2P-aと共有しており、それに直行する辺の長さが328cmの隅丸方形プランである。床面までの深さは北コーナー付近で74cmである。

2P-aの床面には壁に沿って配されたピットが7カ所(P1~P7)に認められる。深さが3cmから10cm程度で、ピットとは言い難いものもあるが、P4・P5内に扁平な石が置かれていたことから、礎石などを置かれたための窪みであると考えられる。このことから2P-aは上屋構造物を伴う遺構であると推測される。また南西壁の内側にスロープが造りだされている点も、1号土坑と共通する特徴である。

2P-bの床面にはP8~P18のピットが認められる。このうちP8~P13は壁に沿って規則的に配されており、掘り込みの深さは8~13cmである。P14~P21は位置関係だけではどの遺構に伴うものか片断できない。

P8・P9は位置関係からは2P-aに伴うものとしても整合するが、2P-bの床面レベルが20cmほど低いことから、明らかに2P-bに伴うピットと言える。

P14~P21の中で、ほかのピットと規模や深さが異なるP14(-40cm)とP18(-41cm)が一对のものと考え、位置的に2P-aの南東壁と推測される範囲に沿っており、P4やP2と向き合った位置にあることから、2P-aの施設の一部である可能性がある。

P19は、2P-bの南西壁に沿うP11~P13の延長上に位置し、内部に扁平な石が置かれていることから、2P-bに伴うピットと考えることも可能である。

遺物は縄文土器片、陶器片、貨幣などが出土した。

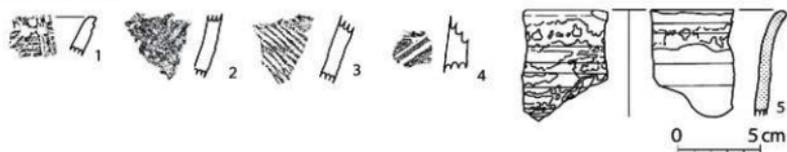
第35図1は口縁部の破片である。前出の複数に割いた竹管状の施文具の内側で、横方向の条線状の地文を施した後、幅の狭い同様の施文具で縦の沈線、同様の幅の広い施文具で斜方向の沈線が施されている。口唇部直下と沈線の端部にやはり同様の施文具による刺突が施されている。

2は浅い縄文が施された体部破片である。摩耗が著しく、縄目の節は認識できない。

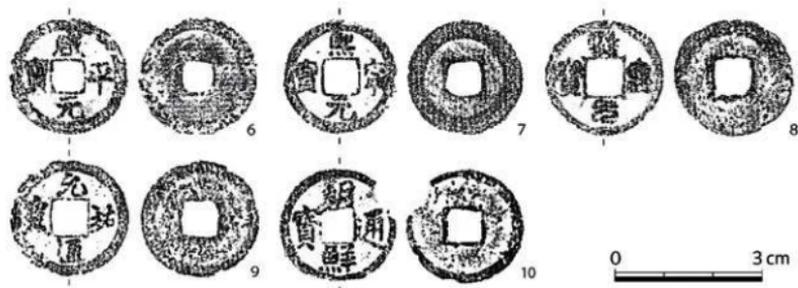
3は鮮明な縄文が施された破片である。2cmほどの幅で横方向に回転押圧されている。

4は竹管を複数に割いた施文具の内側による沈線が認められる。三角形の区画を表出していると思われ、区画内には沈線に沿う竹管状施文具の外側による連続押し引き文が施されている。

5は陶器で、壺の口縁部破片である。外面は前面に、内面は口縁部以下2.5cmほどまで釉薬がかかっている。



第35図 2号土坑出土遺物実測図(1)



第36図 2号土坑出土遺物実測図(2)

第36図6～10は貨幣である。2Pからは1個体と数えられる貨幣が33点と破片数点が出土した。全体的に腐食が著しく、うち28点は文字部分が消え、裏表も分からない状態であった。

6は咸平元寶(998年)である。7・8はともに熙寧元寶(1068年)であるが、8は篆書である。9は元祐通寶(1088年)、10は朝鮮通寶(1423年)である。6～9は宋の時代に鑄造されたいわゆる宋銭である。10は李氏朝鮮時代の朝鮮銭である。

これらの貨幣が2Pの構築年代や機能に関わるものと思われるが、当時の貨幣の流通状況から考えると、貨幣の鑄造年代と遺構の構築年代は一致するとは言えず、貨幣鑄造の年代差が遺構の機能していた期間とも言えない。現段階では遺構の構築時期は中世であり、さらに限定すると最も新しい朝鮮通寶の流通以降の時期、中世後半期である可能性が高い。

3号土坑(3P)

C-4・5グリッドに位置する。長軸252cm、短軸233cmのほぼ長方形プランであるが、長軸の南東端部にあたる一辺のみ丸みを帯びている。覆土は黒褐色土のみで遺物は出土しなかった。遺構内部にピットなどの施設痕はない。

4号土坑(4P)

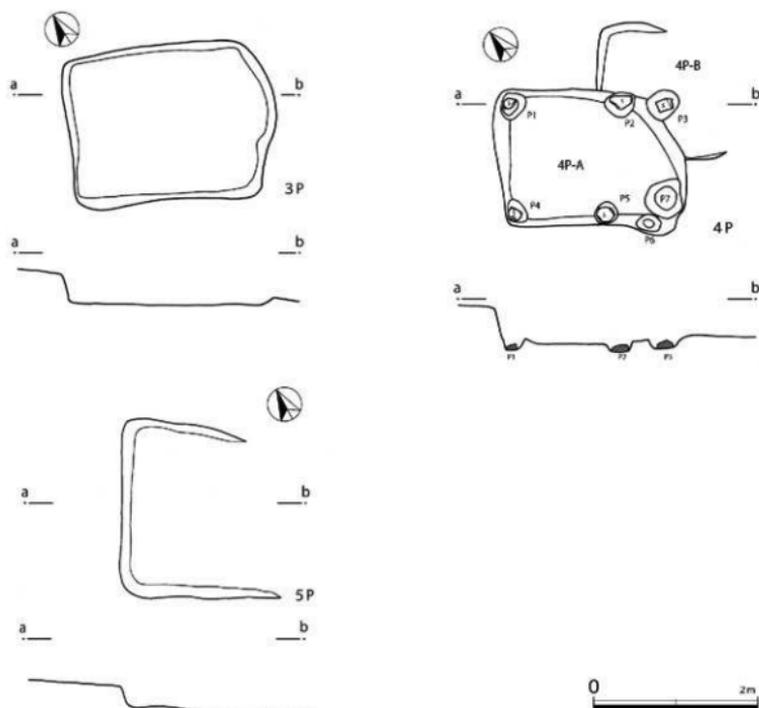
B-4グリッドに位置し、2基の遺構が重複しており、北西側を4P-a、南東側を4P-bとする。覆土は黒褐色土一層のみで、前後関係を示す土層堆積状態は確認できなかった。

4P-aは長軸長227cm、短軸長166cmの長方形プランで、床面までの深さは北西側最深部で49cmである。床面には7カ所のピットが確認された。北東壁側と南西壁側の対面する2カ所を一組とし、南東壁とのコーナー(P3・P6・P7)、北西壁とのコーナー(P1・P4)、長軸の中央よりやや北西側の両壁(P2・P5)に計三組が配置され、P1～P5の底部には石が置かれている。このことからこれらのピットは上屋構造物を支える柱穴であろうと推測される。

4P-bは4P-aより掘り込みが浅く南東部を欠いている。他例と同様に北西-南東方向に長軸を有する長方形プランであると推察され、短軸側の幅は170cm前後である。付随するピットなども認められなかった。4P全体からは遺構の構築時期を判断する遺物の出土はなかった。

5号土坑(5P)

北西-南東方向に長軸を有する長方形プランであると推察され、短軸側の最大幅は219cmである。遺構内に施設痕はなく、構築時期の決め手となる遺物の出土はなかった。



第 37 図 3・4・5号土坑実測図

6号土坑～10号土坑は、地表から縦に穴を掘った後、横方向に地下室を造りだす遺構で、一般的に地下式坑と言われている。遺構確認時に、天井部の崩落により大きな不整形の落込みとして把握されたものや竪穴の円形あるいは方形の掘り込みが明確に確認できるものがあった。

調査に当たっては、これらが地下式坑である可能性が生じた時点で、断面の記録のために半割し土層壁を残す方法は、壁面崩落の危険性があるので実施しない。天井部が残存する場合も崩落の危険性があるので、あらかじめ除去するという方針を定め、調査を進めた。

6号土坑（6P）

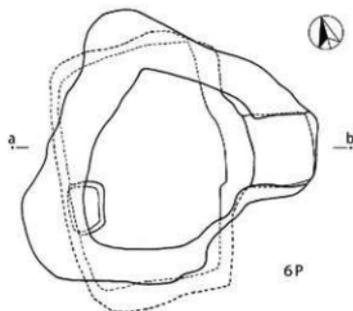
確認の状況から、天井部が崩落していることが分かっていった。竪穴部は一辺が85cmほどの方形で、底面は160cmほどの深さになる。ここからほぼ西側に向かって横穴を掘り、内部に長方形の地下室を造りだしている。地下室の規模は、入口から見て左右(南北)の壁間が318cm、奥壁(西)までが218cmの隅丸長方形である。床面は南北285cm、183cmとひと回り小さく、床から天井に向かって壁面が開く形態で、天井部が最も面積が広い。

各壁面の上部は内側に傾き天井部となるが、壁面から離れるほど天井が高くなることから、ドーム型を呈していたものと考えられ、最高部は床面から170cm以上であると推測される。

また、地下室の床面は竪穴部の底面より100cmほど低く、地表からは256cmの深さとなる。

付随施設として、地下室西壁の中央より南側に、長軸63cm、短軸42cmの隅丸方形のビットが存在する。深さは10cmほどで、西壁にやや潜り込むように掘られている。

地下室内は崩落した土で埋められていたが、比較的天井部が残存していた北西部の壁面には、土圧がからなかったためか、地下室を掘った時の工具痕が残っていた。肉眼での観察によると、幅10cmほどの鋤状の工具を、横方向にすきとるような動作で連続して動かしているようである。



7号土坑・8号土坑（7P・8P）

7Pは6Pの南に隣接し、8Pは7Pの南に重複する。両土坑とも天井部が崩落していた。

7Pの竪穴部は掘り込み面の直径が110～120cmのほぼ円形で、136cmの深さで竪穴の底面に達するがその形状は80cmほどの方形である。底面はほぼ水平で、そこから西側に地下室を造りだしている。地下室の平面形状は竪穴側の壁面が直線的で、左右（南北： \approx 250cm）、奥壁（西：170cm）側は丸みを帯びた形状である。

竪穴底部から64cm、掘り込み面からは200cmの深さに地下室の床面があり、断面形は床面から60cmほどの高さまでは緩やかに広がり、それ以上は狭まる、中膨らみのドーム状を呈する。

天井の高さは、最も残存していた北側で、床面から140cmほどであった。

地下室内にはほかの施設の痕跡は認められなかった。

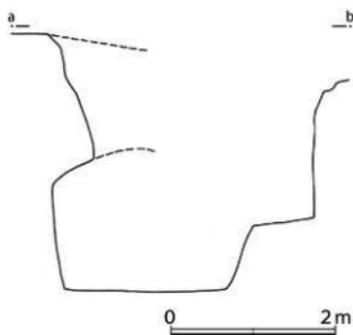
8Pは竪穴の掘り込み面の直径が160cmほどあり、7Pに比べ規模が大きい。竪穴の底部まで240cmの深さがあり、底面は70cmほどの方形を呈する。竪穴はやや開き気味に立ち上がり、底面から130cmほどからさらに漏斗状に開く形状である。

6P・7Pの地下室は、竪穴部からほぼ西に向かって掘られているが、8Pはやや北西に向いている。平面形状は7Pと同様に竪穴側の壁面は直線的で、ほかの3辺は丸みを帯びた形状である。床面の規模は北東-南西に321cm、北西-南東に226cmで、7Pより3割ほど大きい。

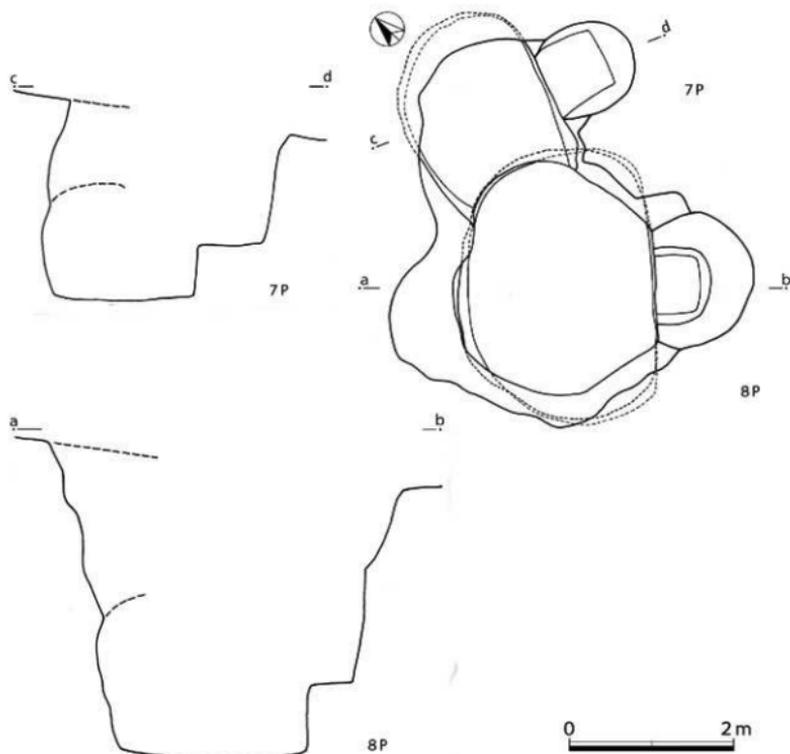
竪穴部底面からの深さは90cmで、地上の掘り込み面からの深さは330cmであり、床面のレベルは7Pより140cm低い。断面形は床面から天井部付近まで直線的にわずかに開き、天井部との境は丸みを帯びつつ次第に内傾しており、ドーム形を呈するものと推測される。天井の高さは、最も残存していた南西部壁面で190cmを測ったが、最頂部は200cm以上であろう。

壁面には地下室を掘り出した際の工具の痕跡が残る部分もあったが、明瞭ではなかった。また地下室内部には施設痕などは存在しなかった。

7Pと8Pの境界部の土層は天井部の崩落土などが入混じり、同時期に崩落した様相で、両者の新旧関係を究極めることはできなかった。埋土の状況からは、天井部の崩落以前に7Pの床面以上までは土砂で埋没していたようである。



第38図 6号土坑実測図



第39図 7号・8号土坑実測図

8Pからは2点の遺物が出土した。

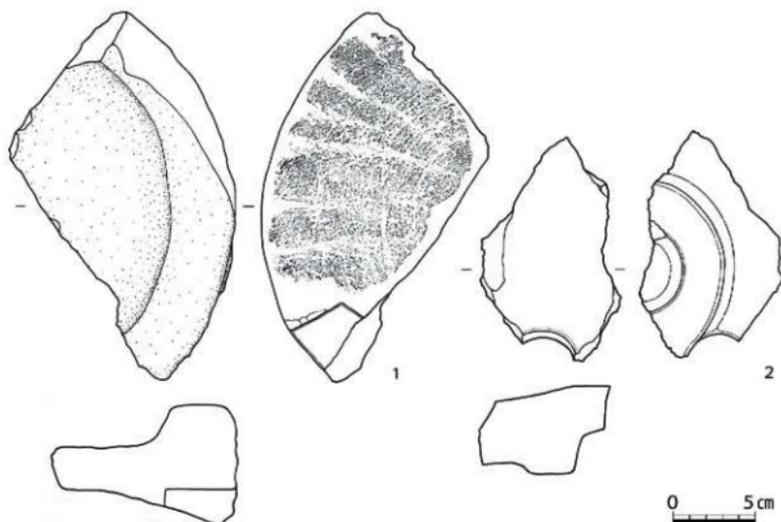
第40図1は直径30cmほどの石臼の破片で、残存部が4分の1ほどの上臼である。

裏面に6本の溝が認められるが、見える範囲では中心部に集約する放射状に配置され、違和感がある。側面には挽木を装着する穴の一部が認められるが、下半部が消滅するほど使い込まれている。上面のくぼみから裏面までの厚さは、最も薄い場所で20mmである。

以上のことから、溝の摩耗と補修を繰り返しながら使用し続けたものと考えられる。

2も石臼で、やはり上臼の破片である。上面のくぼみ部の整形面は確認できず、外側に向かって低くなっていることから、くぼみ面は剥離している可能性がある。上面からは、ものいれの穴のみが人為的な痕跡として認められる。裏面には芯棒受けの窪みと、ものくぼりの穴と溝が確認できる。溝の外周部は欠損しているものの、外周部に溝の立ち上り際が残存していることから、溝幅は3cmほど推測される。

1・2はともに火成岩製であるが、厚みも異なり、含有する鉱物の粒径も異なることから、別個体であると言える。



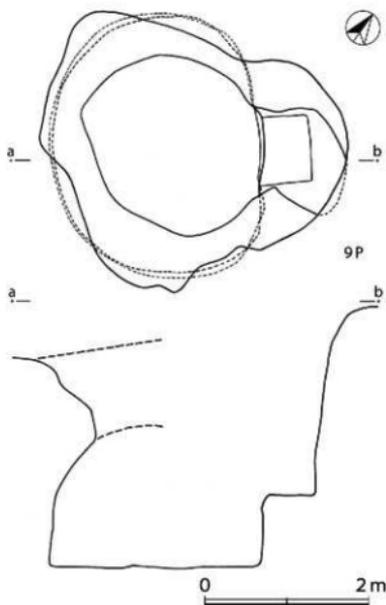
第40図 8号土坑出土遺物実測図

9号土坑（9P）

C-5グリッドに確認された。5基の地下式坑の中で、唯一天井部の崩落がなかった遺構であるが、竪穴部の覆土を除去し、地下室の方向を確認した後、天井部崩落の危険を回避するため、最小限の範囲で天井を取り去ったものである。

竪穴の掘り込み面の形状は、ほかの地下式坑に比べるとやや大きな不整形円で、底面は北西-南北辺が82cmの方形を呈する。断面の形状は断面図に示す通り、竪穴北東部の形状が本来の形であり、北西側、南東側は二次的に崩落した結果であると思われる。したがって、本来の掘り込み面の楕円形はひと回り小さかったものと考えられる。掘り込み面から底面までの深さは227cmであり、底面はほぼ水平である。

地下室は、竪穴底部から北西方向に造りだされている。平面形は7P・8Pと同様、竪穴のある北東壁が直線的で他の3辺が丸みを帯びた形状である。地下室の床面は竪穴の底面より90cm低く、床面の規模は北西-南東方向が312cm、北東-南西方向が251cmである。



第41図 9号土坑実測図

断面の形状は、壁面がほぼ垂直で、90cmほどの高さから徐々に内傾してドーム形を呈する。ほかの地下式坑と同様、斜面に構築されているが、本遺構は竪穴から斜面の低い方に向かって地下室を造りだしていることが特異である。

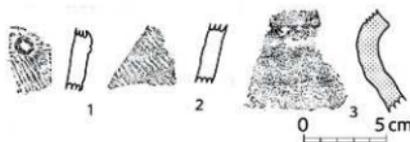
遺物は数点出土したが、図示できるものは3点である。

第42図1は竹管を複数に割いた施文具の内側による弧状の集合沈線が認められる。上部に数条の横方向の沈線による区画があり、その上にボタン状張付け文が施されている。

2は横方向に回転押された単節縄文が認められる。押圧の幅は1.2cmほどである。

3は陶器壺の口縁部破片である。胎土は灰黒色で砂粒を含む。表面には自然釉がかかるが裏面は無釉である。口唇部を欠損しているため、口縁の形状は不明確であるが、内面の欠損部直下に口唇部を画する沈線がめぐることから、端部が内側に突出する形態と考えられる。

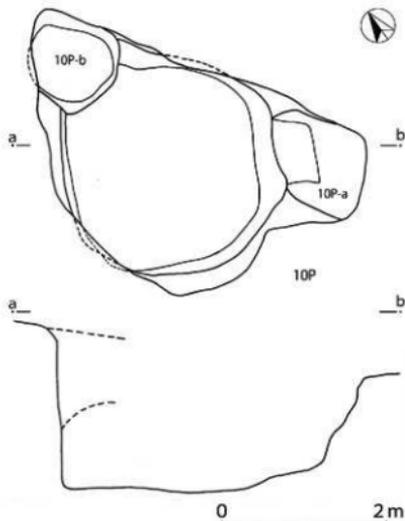
1・2は縄文時代前期の土器、3は中世以降の所産と思われる。



第42図 9号土坑出土遺物実測図

10号土坑 (10P)

10PはB・C-5グリッド、調査区内で最も南側に位置する。プラン確認時には、複数の遺構が複雑に重複する遺構と認識されたが、地下室を共有する2基の地下式坑であった。以後、地下室の南東側の竪穴を10P-a、北側を10P-bとする。



第43図 10号土坑実測図

10P-aは南東側に1辺を有する平面形が隅丸方形の竪穴である。掘り込み面から116cmの深さに底面があり、その平面形は方形で、軸方向が西側に振れている。底面から西北西方向に地下室が広がり、床面は竪穴の底面より17cm低い。

10P-bは10P-aより掘り込み面の標高が85cmほど高く、平面形は不整形である。底面までの深さは228cmであり、ほぼ筒状に掘られている。底面は地下室の床面より15~20cm深い。他例を参考にすると、ここから横方向あるいは下部を掘削するが、10P-bは、少なくとも下部の掘削はしなかったようである。

地下室は本来、10P-aに付随しているものと考えられ、長軸を北北東-南南西方向に有する隅丸方形とすると、竪穴との位置関係も整合する。

また、10P-bは後から掘られたと推察

される。6 P～9 Pの例によれば、竪穴の底面をステップとし下および横に向かって地下室が構築されているが、10 P-bでは下方方向への掘削が認められない。竪穴の底面が10 P-aの地下室の床面より低いことから、竪穴底面まで掘削が及ぶまでの間、10 P-aの存在を知らず、横穴の掘削に着手した際に10 P-aの壁面を突き破り、地下室の存在を知ったものと考えられる。

10 P-b構築の目的は不明であるが、10 P-aの地下室の存在は遺構構築の目的に沿ったものと判断されたようで、竪穴の開口部を調整し、10 P-b側の入口部の形状を整えている。

10 P-aの入り口側から見た奥壁側が、北コーナー付近が膨らんで左右非対称になっているのは、このためであると考えられる。

10 P-bとしての地下室は北北西-南南東方向に長軸を有し、奥に丸みを持つティアドロップ形状を呈する。また、構築時に意図したものかは不明であるが、竪穴は地下室部より高位の地表面にある。

遺構内から遺物の出土はなかった。

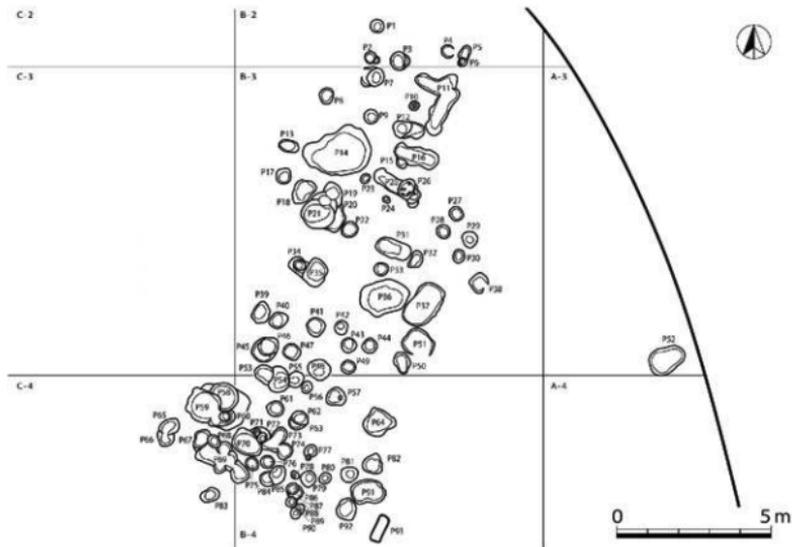
ピット群

B-3・4グリッドを中心に、多数の遺構が確認された。これらの規模や形状は多岐にわたり、土坑、小竪穴、小穴あるいは柱穴列、攪乱など様々な要素がみられる。

ここではピット群として一括して表示する。全体的には、各遺構の平面形は長短の軸が等高線を意識して構築されていると言えよう。

直径40～60cmほどの円形ピットが多数確認されている。これらのいくつかはほかのピットと組合って、柱穴列あるいは掘立柱建物址などを構成している可能性もあるが、遺構の配置からは抽出することはできなかった。

P 26は底面に6ヵ所の小穴があり、陥し穴である可能性がある。同様の遺構は他に存在しない。



第44図 ピット群平面図

P 14、P 36、P 37、P 51などは、ビット群の中ではやや大型の遺構である。P 37は隅丸長方形プランで深さ41cm、底面も平坦で人為的に掘られたものであることが分かる。P 14、P 36は形も不定形で場所により底面の深さが様でないことから、樹木による攪乱あるいは非常に多数のビットが重複している状態と考えられる。P 69は深さが28cm前後の複数のビットが重複している状態であろう。

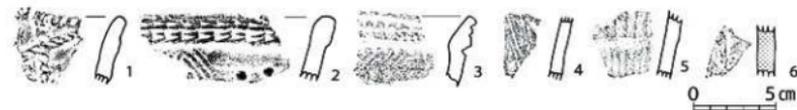
P 11、P 16、P 25、P 93は、ほかの遺跡でもみられたような、農耕に起因する痕跡と考えられる。

P 26は縄文時代の遺構である可能性があるが、ほかの遺構については明確な伴出遺物もなく、形態的な特徴もないことから、構築時期を明らかにすることはできない。

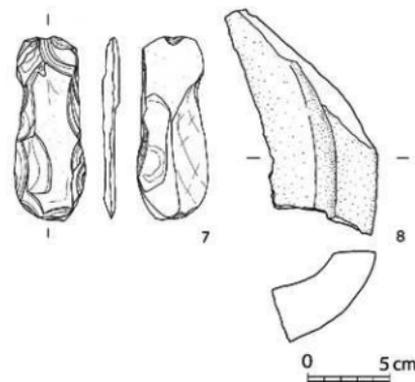
ビット群深さ一覧

ビット群深さ一覧		確認面から底面までの深さ (cm)		確認面から底面までの深さ (cm)											
番号	深さ	番号	深さ	番号	深さ										
P 1	14	P 13	11	P 25	39	P 37	41	P 49	16	P 61	28	P 73	33	P 85	34
P 2	71	P 14	27	P 26	46	P 38	11	P 50	24	P 62	41	P 74	14	P 86	37
P 3	44	P 15	21	P 27	12	P 39	43	P 51	18	P 63	25	P 75	26	P 87	18
P 4	7	P 16	35	P 28	17	P 40	55	P 52	12	P 64	27	P 76	24	P 88	30
P 5	11	P 17	25	P 29	23	P 41	34	P 53	35	P 65	52	P 77	14	P 89	11
P 6	16	P 18	20	P 30	19	P 42	21	P 54	41	P 66	50	P 78	13	P 90	29
P 7	52	P 19	51	P 31	46	P 43	21	P 55	24	P 67	32	P 79	19	P 91	17
P 8	14	P 20	50	P 32	9	P 44	16	P 56	34	P 68	37	P 80	20	P 92	18
P 9	35	P 21	64	P 33	26	P 45	26	P 57	12	P 69	28	P 81	32	P 93	30
P 10	9	P 22	52	P 34	55	P 46	56	P 58	25	P 70	33	P 82	8		
P 11	13	P 23	64	P 35	26	P 47	21	P 59	37	P 71	41	P 83	34		
P 12	31	P 24	9	P 36	25	P 48	40	P 60	44	P 72	44	P 84	14		

遺構外の遺物



第45図 遺構外出土遺物実測図(1)



第46図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外からは、縄文土器片23点、土師器片2点、陶器片2点、黒曜石片4点、貨幣9点、石器2点が出土した。貨幣はすべて文字部分の腐食が著しく、表裏すら分からない状態であった。

第45図1～5は縄文土器の破片である。

1は幅6mmほどの隆線の上を竹管状施文具の背により斜め方向の連続押圧を施した口縁部破片である。口縁部の形状から緩やかな波状を呈すると思われる、口唇部にも斜めの連続押圧が施されている。

2は口縁部周辺に1.5cmほどの粘土紐を貼り付け、その上に径2.5mmほどの竹管状施文具3本を並べ、連続押し引き文を施した口縁部破片である。口縁部の下には、半截竹管

の内側による3本一組の山形沈線と、2カ所のボタン状貼付け文がある。

3は口縁部が内側に湾曲する深鉢形土器の口縁部破片で口唇部のみがやや外反する。単節の縄文を地文とし、口辺に沿って、多数に割いたための竹管状施工具の内側により盛り上がった隆線状の線を表出している。

4は半截竹管の内側による沈線が斜方向に施された体部破片である。

5はいわゆるヒダ状圧痕が認められる体部破片である。

6は陶器片である。外面左側は突起部が取れており、右側に釉葉が認められる。

第46図7は頁岩製の打製石斧である。表面には刃部の加工が認められるが、裏面の加工痕がほとんどみられないのは、二次的に劈開面の剥離があったためと考えられる。

8は茶臼の下臼受け皿部分の破片と思われ、火成岩性である。



図版5-1 1号住居址確認



図版5-2 1号住居址土層断面



図版5-3 1号住居址完掘



図版5-4 2号土坑確認



図版5-5 2号土坑完掘



図版5-6 6号土坑完掘



図版 S-7 6号土坑地下室工具痕



図版 S-8 7号土坑完掘



図版 S-9 8号土坑完掘



図版 S-10 9号土坑完掘



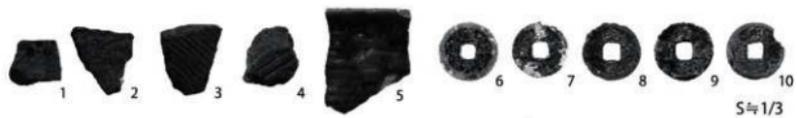
図版 S-11 10号土坑完掘



図版 S-12 柴草遺跡遠景（東から）



图版 S-13 1号住居址出土遗物



图版 S-14 2号土坑出土遗物



图版 S-15 8号土坑出土遗物



图版 S-16 9号土坑出土遗物



图版 S-17 遺構外出土遺物

第4項 孝道遺跡

確認調査の対象とした約 13,000㎡の北半部（1～4列）は、東側の小ピークから西に走行する尾根地形である。南半部（5～9列）は上記小ピークの南西裾部を谷頭とし、尾根と並行して西に傾斜する緩やかな谷地形を形成している。確認調査で、尾根部分に相当するG～N-1～4グリッド部分からは遺構や遺物が検出されなかったため、A区、B区の2カ所の調査区（約 3,400㎡）を調査対象としたものである。

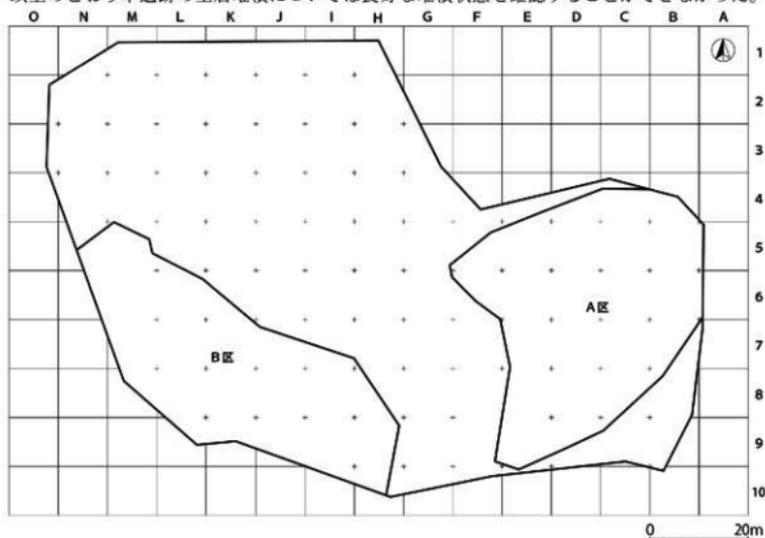
平成2年7月24日からB区の表土除去に着手した。作業には1箇月余りを要し、9月1日にA区の表土除去が終了した。この間、台風の影響により現場までの進入路の崩落や廃土置場の土砂流出などへの対応に追われ、予定外の日数を費やすこととなった。

すべての調査地区の表土除去の終了に伴い、最も調査に時間を要すると考えられる本遺跡から本調査を開始することとした。

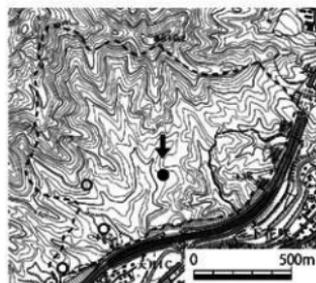
層位

表土（耕作土）の厚さは地点により異なるが、10～20cmほどを取り除くと直にローム層が露出する場所がほとんどであった。A区の谷地形の低部位（C・D-6）付近には暗褐色土や黒褐色土、暗黄褐色土などが整合的に堆積している箇所が部分的に存在していた。耕作の深耕による下層への影響は西側ほど強く受けており、調査区西側の遺構の残存率は低い。

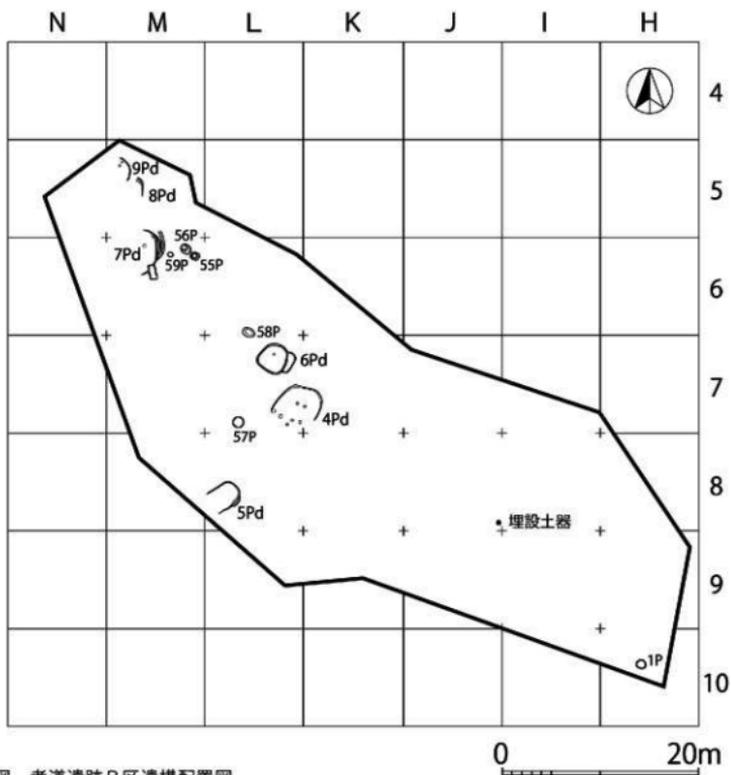
以上のとおり本遺跡の土層堆積については良好な堆積状態を確認することができなかった。



第48図 孝道遺跡調査区設定図



第47図 孝道遺跡の位置



第 49 図 孝道遺跡 B 区遺構配置図

遺構と遺物

遺構としては、住居址 11 基、土坑 60 基、埋設土器 1 ヲ所が確認された。遺構の分布をみると、A 区では C・D-6 グリッドを中心に遺構が密集し、中心から離れると散在している傾向がある。B 区では 1 号土坑以外はすべて K 列より西側に存在している。

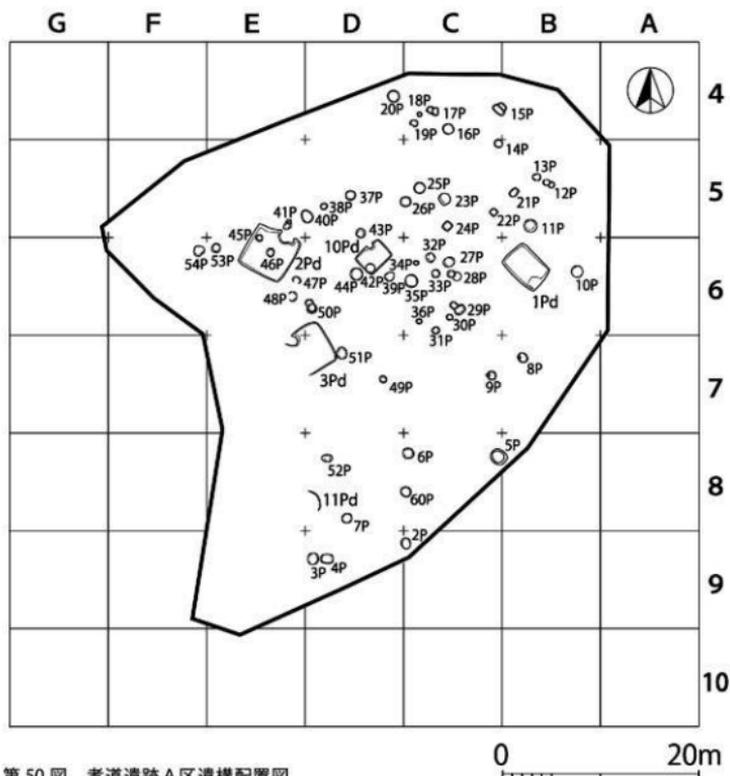
1) 住居址

1 号住居址 (1 Pd)

A 区の B-6 グリッドに位置する。各辺がやや外側に張り出す長方形プランで、長軸は北西-南東方向で長さ 438cm、短軸は 350cm である。竪穴の壁は良好に残存し、最も深い北コーナーで 83cm、最も浅い南コーナーで 31cm である。

南東壁の南コーナー寄りに暗灰褐色や黄褐色の粘土混じりの土層が確認され、この部分にカマドの存在が予測された。この部分を掘り残し、完掘した状態が第 51 図中央の平面図である。

住居の床面はほぼ平坦であった。北東壁と北西壁の北半部には壁溝があり、床面からの深さは最深部でも 5cm 程度であるが、明確な掘り込みである。北東壁側の壁溝は壁面の中央よりやや北



第 50 図 孝道遺跡 A 区遺構配置図

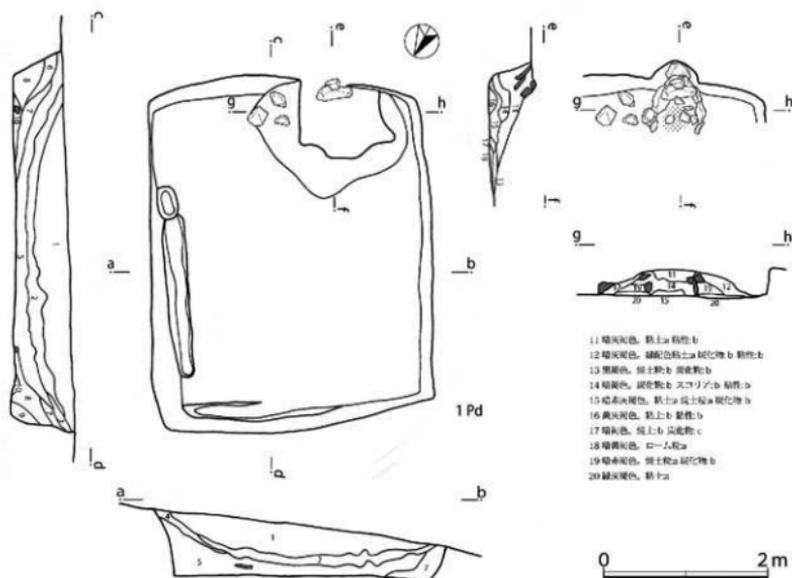
側で終わっているが、その端部に深さ 10cm ほどのピットが重複して存在する。遺構内にはこれ以外にピットは存在しなかった。

住居址の土層堆積は色相や含有物などを目安に目視により分層したものであるが、自然堆積により埋没した様相を示していると言えよう。

カマド部には芯材である両袖や煙道の礫が残存していたが、壁材の粘土を主体とした土層は、第 14 層の上下に散在している状況であり、煙道部より前方が崩れ落ちたものと推測される。

カマドの構築材をとり除いた後の床面はほぼ平坦で、火床面が赤褐色に変色している。変色は表面のみで内部までは達していない。またカマド奥部の南東壁面は 20cm ほど外側へ掘り込み、突出部が造りだされており、煙道の機能に関する構造であると考えられる。なお、遺構確認時点で煙道構築の石が露出していたことから、カマドの上部は壊されていると考えられ、本来の壁面は現状の床面までの深さ 51cm より深かったと推測される。

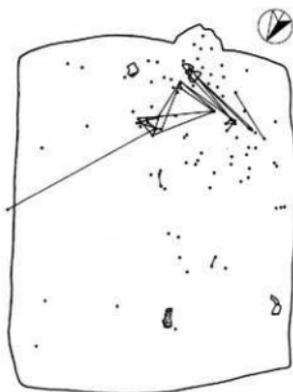
遺物は 80 点出土した。うち土師器片が 49 点、須恵器片が 6 点、石の剥片が 2 点、残りは礫であった。また土師器片の中で 9 点が接合した例など、7 件の接合例があった。全体的に遺物の出土地点はカマド周辺に偏っている。



第51図 1号住居址実測図

第53図1は小形甕で、外面体部にはハケ目の間隔が広い縦方向のハケ調整が施されている。口縁部内面には土器を回転させながらの横方向のハケ調整が施されている。内面体部には斜め方向のナデが施されており、底部には木葉痕が残る。

2・3、5～7は甕の口縁部破片である。7以外の口縁部は体部より1.5～2倍ほどの厚さがあり、このうち2・3・5・6の口唇端部は面をなすように平らに整形されている。

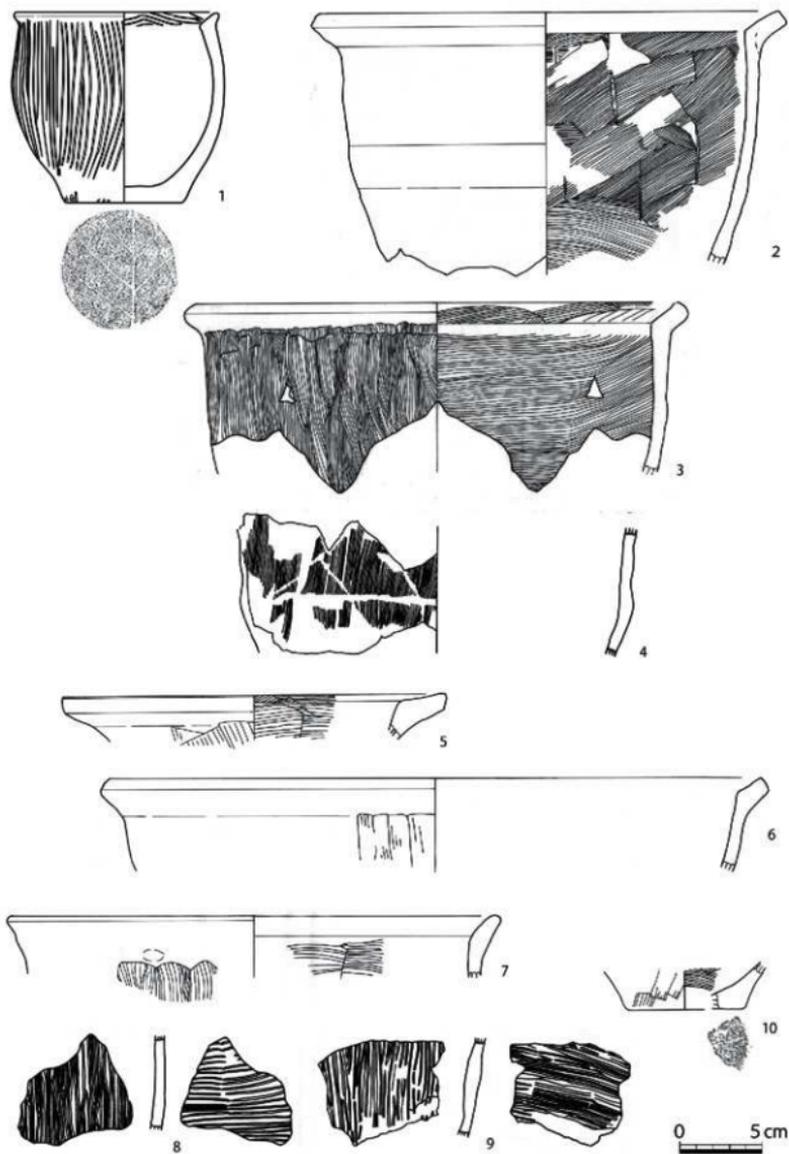


第52図 1号住居址遺物分布図

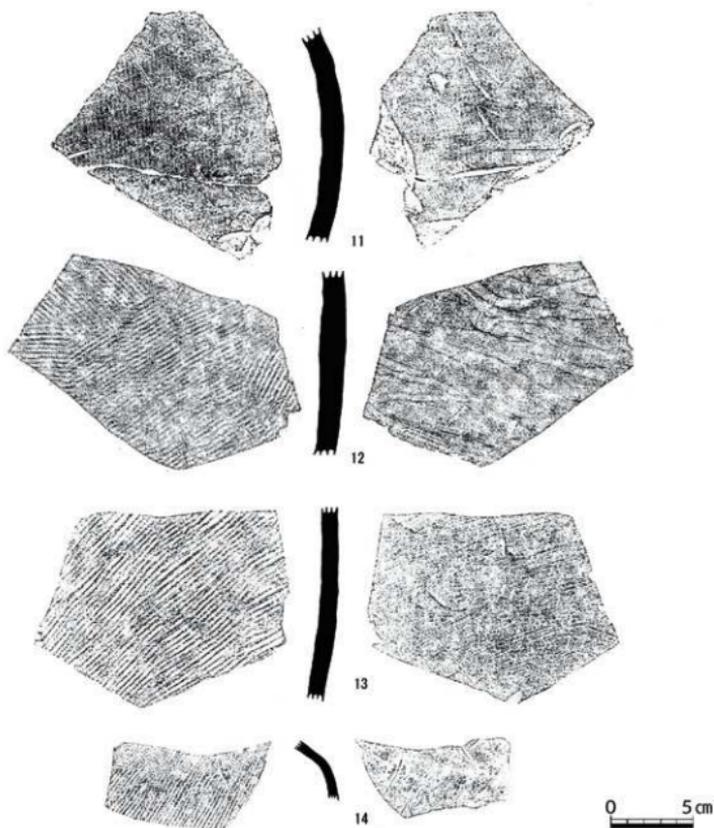
2の口縁部内外面は横方向のナデが施され、体部外面はロクロ成形の後、柔軟性がある調整具により丁寧なナデが施されている。3の口縁部は横方向のナデが施され、体部外面は縦方向、内面は横方向にハケ調整されている。5は口縁部内面と体部内面は横方向、体部外面は縦方向のハケ調整が施される。6の口縁部内外面、体部内面は横方向のナデ調整、体部外面は縦方向のヘラケズリ後、ナデ調整されている。7は体部内面が横方向、外面は縦方向のハケ調整が施されている。

4・8・9は甕の体部破片である。4の表面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施されている。8・9の外面は縦、内面は横方向のハケ調整が施されている。

10は甕の底部破片である。外面は縦、内面は横方向のハケ調整が施されている。底部には木葉痕が残る。



第 53 图 1 号住居址出土遗物实测图 (1)

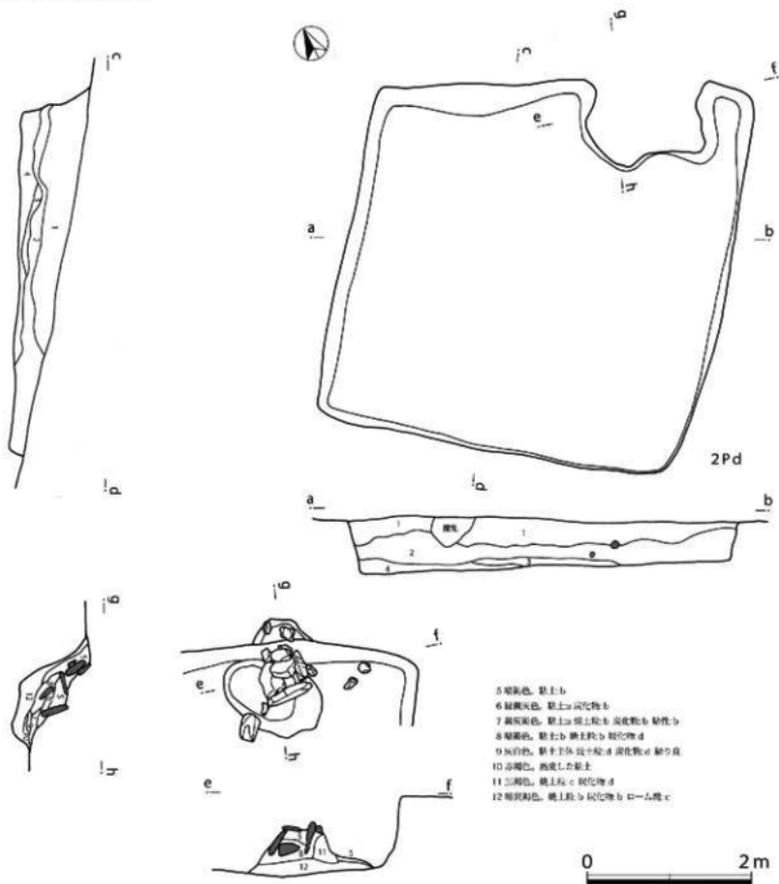


第54図 1号住居址出土遺物実測図(2)

第54図 11～14は須恵器で、11～13は大型壺の体部破片である。11の外面はタタキの後にナデ、内面は横方向のナデによる整形痕が認められる。焼成が悪く表裏とも赤褐色を呈している。12・13の表面にはタタキが施されている。11には少なくとも3方向からのタタキ目が認められる。内面はヘラナデされ、当て具痕などは残っていない。12はほぼ同一方向のタタキ目で、内面は幅5cmほどの道具により横方向のナデが施されている。14は壺の肩部破片である。表面全体にタタキ目が施されるが、肩部の屈曲以下は特に明瞭に認められる。肩部以上には斑点状に釉薬が散在する。

ほかに土器の細片が出土しているが、坏や皿の破片は全くみられず、構築時期を推測する資料が少ないが、甕の口縁部の厚みなどの特徴から10世紀中の所産と考えられる。

2号住居址 (2Pd)



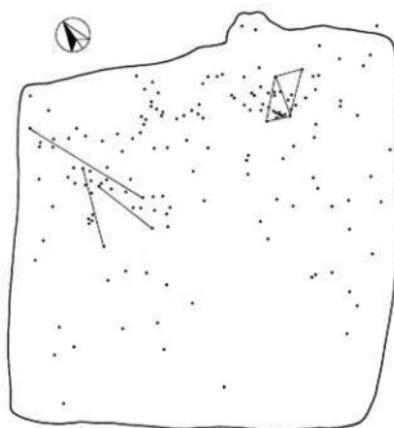
第 55 図 2号住居址実測図

A区のエ-6グリッドに位置する。掘り込み面の確認時に45P、46Pが重複していたので、これらの調査の終了を待ち、調査に着手した。

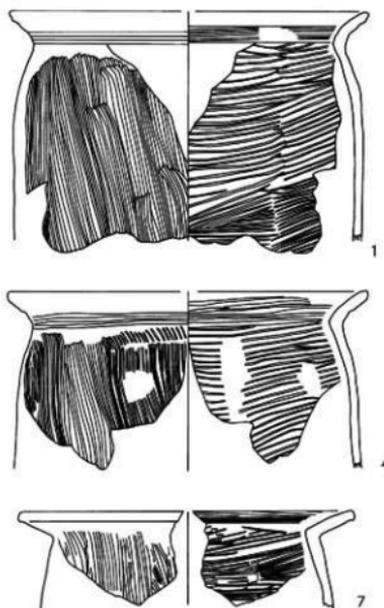
平面形はほぼ正方形を呈し、北東壁の中央より南東側にカマドを有する。概観は正方形だが、北西-南東壁間は約460cmであるが、北東-南西壁間は北西壁側で約430cmに対し南東壁側では最長490cmであり、厳密にはカマド部が北東側へ突出する不正方形と言える。

竪穴の掘り込みの深さは、北東壁の北西側3分の1ほどの場所で最も深く93cm、最も浅い部分は南コーナー付近で5cmであった。

床面はほぼ平坦だが、全体的にカマドの焚口付近が高く、西コーナーに向かって緩やかに傾斜



第 56 図 2号住居址遺物分布図



第 57 図 2号住居址出土遺物実測図 (1)

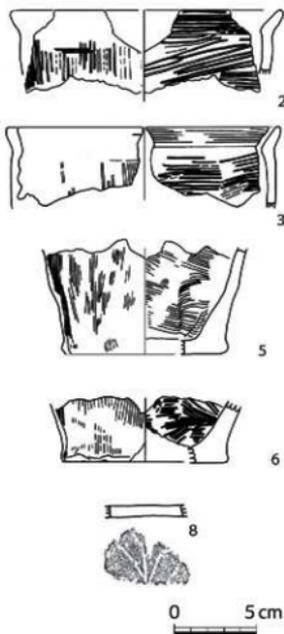
しており、高低差は 18cmほどである。

床面にはカマド以外の柱穴や壁溝などの痕跡は存在しなかった。

カマド周辺は床面までの深さが比較の深いことから、カマド部の良好な残存状況が期待されたが、確認面の最上部に煙道構築の石材が存在していることから、さらに上位に掛け口などが存在していたと想定され、上部は消滅していると推測される。

カマド部の土層断面からは、煙道部から入り込んだ第 12 層の堆積後にカマドが崩れたものと推測される。

火床部は 17cmほど掘りくぼめられているが、火床面が赤変するなどの事象は認められなかった。カマド奥部の北東壁上部は 30cmほど外側に掘り込まれており、煙道の一部と考えられる。先端部が 41 P と重複するが、明らかに 2 P d より新しい遺構である。



遺物は縄文土器片1点、土師器片125点、須恵器編1点、石器1点、鉄器1点、礫33点の162点が出土し、堅穴の北東側、特にカマド前面に密で、南西側が疎である。

第57図1～4、7は甕の口縁部破片である。体部外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整が施されている。1・4は口径、整形痕、色調などが類似しており、同一個体である可能性が高い。2・3はやや小型の甕である。

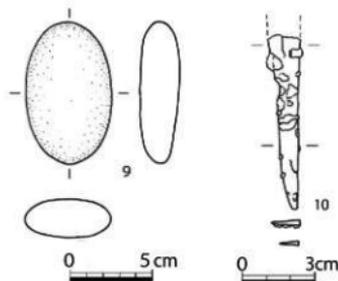
5・6・8は甕底部の破片である。5・6は直径10cmほどと推測され、外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施されている。8は甕底部の破片で、外面には木葉痕が残る。

出土した土師器片のほとんどが甕で、それ以外の機種としては坏の破片が5点出土したのみである。5点はいずれも細片で図示し得なかったが、うち3点は同一個体と考えられる。接合はしないが体部2点の内面と底部1点の見込み部に放射状暗文が施されている。ほかに、ロクロにより非常に薄く成形され、口縁端部のみ肥厚する口縁部破片が1点出土している。

第58図9は楕円形の石で、下端に叩打の痕跡が僅かに認められる。石に加工痕は認められず、自然礫を利用したものであろう。

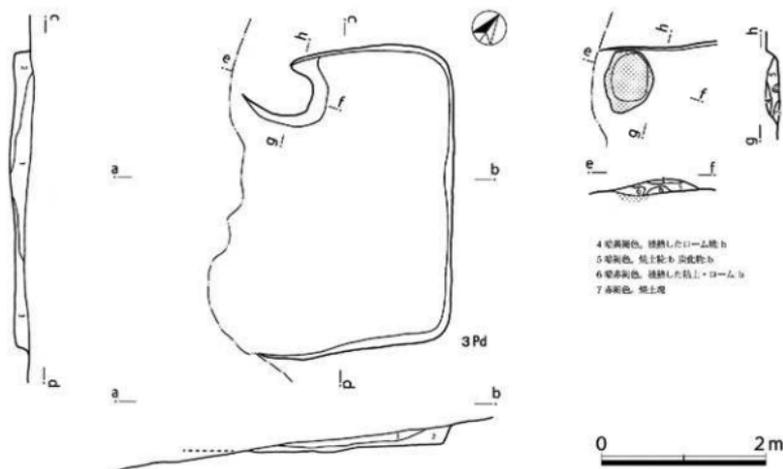
10は鉄製の刀子である。腐食が著しいが、薄い三角形の刀身部が僅かに残っている。

以上、個々の遺物を比較するとかなりの年代差があるが、床面直上資料や接合資料など主体的な出土資料に絞ると、2Pdは9世紀前半から後半にかけての所産と考えられる。

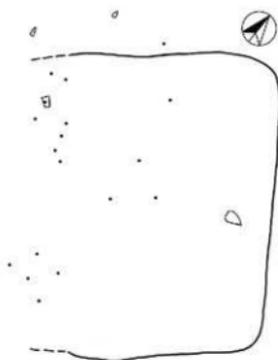


第58図 2号住居出土遺物実測図(2)

3号住居址(3Pd)



第59図 3号住居址実測図



第 60 図 3号住居址遺物分布図

D・E-6・7グリッド、A区の谷地形の最深部に位置する。

平面形は、北西-南東方向(373cm)に片方の軸を有する隅丸方形プランと推定される。しかし南西部は攪乱により床面や壁面が消滅しているため、本来の形状や規模は不明である。

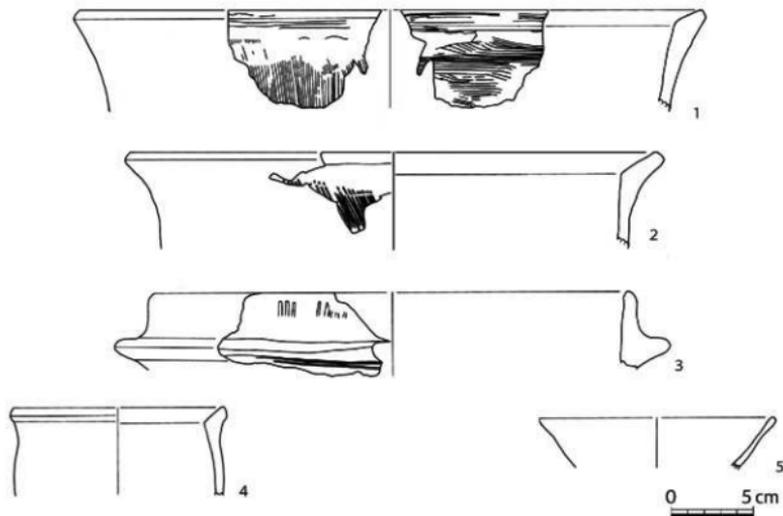
攪乱は谷地形の傾斜に沿って、竪穴をスライスするように進行してきたようである。残存部のうち北コーナー付近の床面から壁上端までの高さが高く31cm、東コーナーでは27cmであるが、南東へ向けて高さを減じ、コーナーから250cmほどで0cmとなる。

覆土は3層に分層できた。残存部の堆積が薄く、目視による観察では、壁際のローム粒混じりの土層など、自然堆積を思わせる堆積状態が確認された。

床面はほぼ平坦であるが、全体的には壁際がやや高位で中央部と南西部が5cmほど低くなっている。

床面および北西部の被攪乱面の竪穴内部と想定される部分には、柱穴や壁溝などの掘り込みはなく、唯一の遺構内設備としてカマドが残存していた。

カマド部は多量の粘土や焼土を含み、床面からの高さは15cmほどであった。カマド部の断面の観察からは、焚口や両袖の躯体部分は遺存せず、全体が崩落した状況と考えられる。カマド部の土層を取り除くと、床面に火床部が確認された。被熱したローム面が硬化し、色調が赤褐色に変色した部分が、長径70cm、短径60cmほどの楕円形に広がっていた。第59図のカマド部完掘



第 61 図 3号住居址出土遺物実測図

の平面図に窪みとして表現されている部分は、火床の赤変部を取り去った状態を表しており、本来のカマド火床部はほぼ平坦である。

遺物は土師器片 17 点、須恵器片 2 点、礫片 8 点の 27 点で、遺物の分布はカマド前方に偏っている。

第 61 図 1・2 は甕の口縁部破片で、体部に比べ口縁部が肥厚している。体部外面は縦方向のハケ調整が施され、1 の内面は横方向のハケ調整がみられる。2 の内面は柔らかい整形具で横方向にナデられている。

3 は羽釜の口縁部破片である。成形時に外面の縦方向のハケ調整後に鈎を貼り付けている。

4 は小型甕の口縁部破片で、外面は縦方向、内面は横方向のナデが施されるが、器面が荒れておりナデ痕は明瞭ではない。

5 は環の口縁部破片である。ロクロ成形で、口縁端部が肥厚する。

ほかに環の破片が 2 点出土しており、うち 1 点はロクロ成形である。

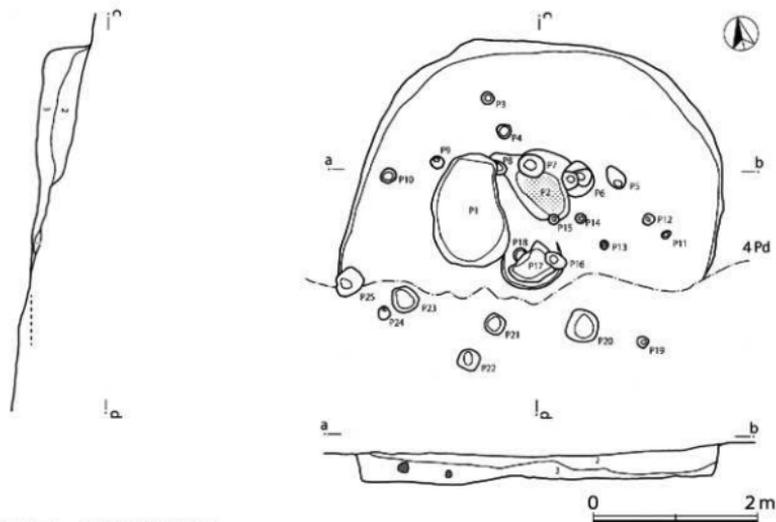
羽釜の出土や甕口縁部の肥厚、環の項端部の肥厚などの状況から、10 世紀中の所産と考えられる。

4号住居址 (4Pd)

B 区のほぼ中央、K・L-7 グリッドに位置する。平面形は北北東-南南西方向を長軸とする楕円形と推定されるが、攪乱により南半部を欠いている。残存している短軸方向の長さが 437cm であることから、長軸の長さは少なくとも 500cm を超えていたと推測される。

床面までの深さの最深部は、北側コーナー付近で 65cm である。床面は平坦ではなく、場所により 10cm ほどの凹凸があり、全体的に南に向かって低くなっている。

覆土は 3 層に分層された。第 1 層は赤褐色の焼土ブロックを主体とした土層で、この部分にだけ僅かに認められた。第 2 層はロームの粒やブロックを多く含む暗黄褐色土、第 3 層はローム主



第 62 図 4号住居址実測図

体の明黄褐色土であり、堆積状態からは人為的に埋め立てられた要素が強いと考えられる。

床面には多数のピットが確認されたが、大きさや深さは様々である。

P 1は長径137cm、短径90cmの長楕円の平面形を呈し、深さは35cm前後である。貯蔵穴的な機能が考えられる。

P 2はP 6～P 8と重複しているため、平面プランが判然としないが、概略的には長径90cmほどの楕円形プランと推測される。深さは10cmほどで、底面は火をうけて焼土化している。位置的には楕円形堅穴の長軸上の北寄りであり、炉であると考えられる。

P 8～P 15、P 18、P 21は深さが2～10cm程度の浅いピットである。P 10は深さ2cmであり、床面の窪みである可能性もある。P 3・P 7・P 8・P 17・P 19・P 20・P 23は深さ10cm以上30cm未満、P 5・P 6・P 16・P 22・P 24・P 25は深さ30cm以上のピットである。なお、南側の攪乱を受けた部分の深さは、攪乱を受けていない部分から想定したものであるが、ピットの深さや位置の関係には斉一性は認められない。

また、炉と考えられるP 2がP 6・P 7・P 15などと切り合っていることから、時間差のある複数の遺構が重複している可能性も考えられる。



第63図 4号住居址遺物分布図

遺物は、縄文土器片173点、時期不明土器片2点、礫78点、石器および石器片9点、剥片19点、黒曜石片23点の計304点が出土したが、土器については小片が非常に多い。

遺物の分布は壁際が疎で中央部が密であり、接合関係では離れた位置間の接合が目立つ。

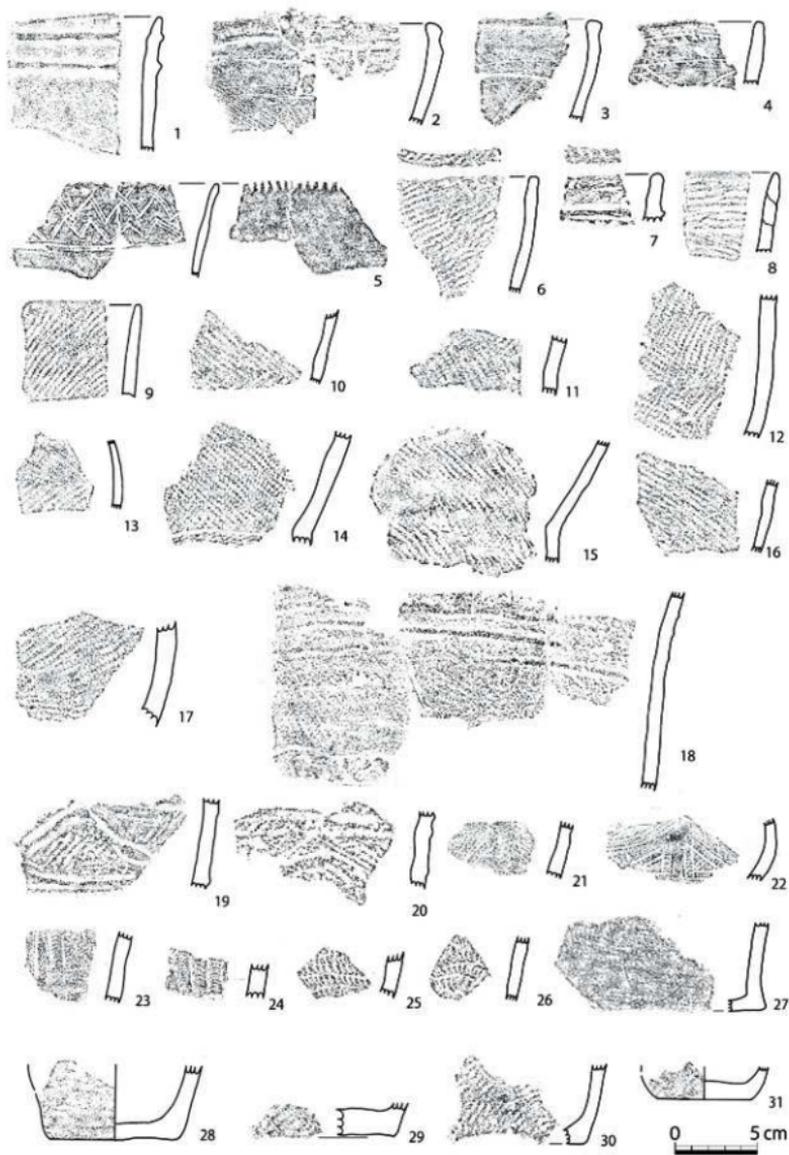
第64図1は口縁部の破片であるが非常に焼成が悪く、洗浄時に摩耗してしまった部分もある。口縁直下に横方向の2本の細く低い微隆線が廻り、その間は無文である。拓本では分り難いが、体部には縄文が施されている。また、口唇部と直下の浮線間の幅が一様ではなく、波状口縁と考えられる。

2・3は口唇部が肥厚し、やや内湾する口縁部破片で、同一個体と思われる。口縁部下に指先でつまみ上げたような僅かな隆線が廻り、口唇の肥厚部との間は無文帯となっている。隆線以下には縄文が施され、半截竹管状施工具で幾何学的な並行沈線のモチーフが描かれている。口縁部には3つを一組とした突起が数カ所に施されているようである。

4は、口縁部直下に半截竹管状施工具による2本の並行沈線が廻り、下側の並行沈線に接する斜方向の並行沈線が認められる。並行沈線内は竹管状施工具の外面端部による連続刺突が施されている。

5は器壁が非常に薄く、色調が黒味を帯びた口縁部破片である。口縁部から4cmほど下に、細い半截竹管状施工具による並行沈線が廻り、以下は無文である。上部は口唇部との間に同様の施工具による横二列の鋸歯状沈線が廻る。口唇部内側は細い丸棒状施工具の側面を縦方向に細かい間隔で押し付けた、刻み目状の施文が施されている。

6～9は地紋として縄文が施された口縁部破片である。6は口唇部にも縄文が施されている。7の口唇部は細い丸棒状施工具の押圧による斜方向の刻み目が施されており、口唇部下2cmほど



第 64 图 4 号住居址出土遗物实测图 (1)

に隆線が廻る。8は縄文の条が口縁部とほぼ平行なことから、縄文原体を器面に対して斜めに転がしたと推測される。輪積み痕が明瞭で、外面には整形されない接合痕が残っている。9は筒型形状の深鉢形土器の口縁部破片で口唇部直下から縄文が施されている。

10～17は地紋が縄文の体部破片である。10は横方向、12は縦方向の羽状になるように原体の施文方向を変えて施文したものである。11はランダムに施文方向を変えたものと思われる。13・14は結束羽状縄文が施されている体部破片である。14は括れのある深鉢形土器の頸部に結束部が施文されている。

15～17は単節縄文が施文された体部破片である。17には2方向の施文方向が認められる。

18は深鉢形土器の頸部付近の破片である。縄文を地紋とし、横方向の3本の微隆線が廻っている。焼成不良のため縄文は判然とせず、浮線も摩耗しているため、縄文と隆線の施文順序は不明である。

19・20は縄文を地紋とし、低い浮線で区画あるいはモチーフを表出した体部破片である。19は横方向に廻る上下の浮線の間、三角形あるいは波状の浮線による区画が施される。20は2本の浮線による横方向の区画とその下部に曲線状の浮線が施されている。

21・22は半截竹管状施文具の内側による並行沈線で幾何学的なモチーフが描かれている。22の並行沈線の内側は、半截竹管状施文具の端部内側による連続爪型文が施されている。

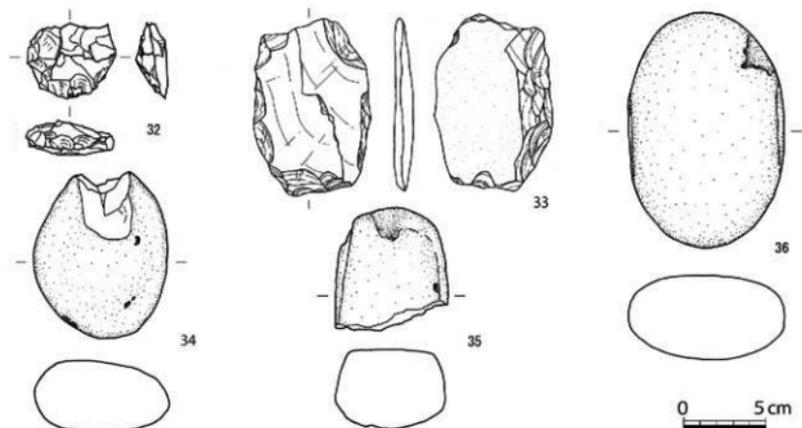
23はやや幅広い浮線による区画に沿って半截竹管による並行沈線を施した後、並行沈線の内側に先端が弧状になった竹管状施文具の内側で連続爪型文を施している。

24～26は半截竹管状施文具による並行沈線と先端が弧状になった竹管状施文具の内側による連続爪型文で充填している体部破片である。並行沈線と内側に施文される爪型文は場所によってずれている箇所もある。

27～31は底部破片である。27は底部に向かって狭まる体部の最下部が、外に向かってやや開く器形である。体部には縄文が施されているが、屈曲部以下はナデにより縄文が消されている。28～31は接地部直上まで縄文が施されている。

第65図は出土した石器類である。

32は石核である。肉眼での観察であるが、石材は粘板岩と考えられる。



第65図 4号住居址出土遺物実測図(2)

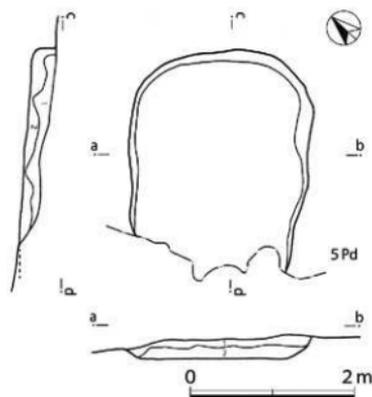
33は頁岩製の打製石斧で、上部を欠損している。石材の硬度が低いことと風化により、剥離面の摩耗が著しい。

34は楕円礫の長軸上の一端に方向からの打撃が加えられている。作り出された刃部に物を敲いたような痕跡が認められるので、礫器として扱っておく。

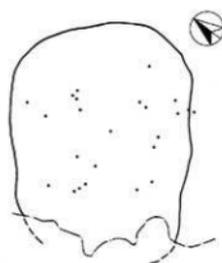
35・36は磨り石である。35は細かい黒雲母や石英を含む火成岩製で、棒状の形態が中ほどで折れたものと推測される。図の正面と左右側面は研磨により成形されている。裏面は自然面のまま手加えられず丸みを帯びている。36は細かい黒雲母や石英を含む火成岩製で、長径14.3cm、短径9.3cmの楕円形の自然石を使用している。長径、短径の両端には敲打の痕跡が認められる。楕円面は表裏とも使用により磨かれ、滑らかになっている。

遺物の出土状況からは、明確に住居に伴うと考えられる遺物が特定できない中、時期的要素を概観すると縄文時代前期前葉から前期後葉にかけての要素が認められる。したがって4Pdとして調査した遺構も、増改築も含め時間差のある複数の遺構が重複している可能性があるが、縄文時代前期前葉から前期後葉にかけての所産と考えられる。

5号住居址（5Pd）



第66図 5号住居址実測図



第67図 5号住居址遺物分布図

B区のL-8グリッドに確認された。平面形は北東-南西方向を長軸とした楕円形プランで、短軸長は210cmである。覆土は、ローム粒を多量に含む暗褐色土である第1層とロームブロックを主体とする暗黄褐色土の第2層に分層してきたが、堆積状況は自然堆積でない状況を示していると思われる。

床面までは最深部で30cmの深さである。床面はほぼ平坦であるが全体的に南西側に傾斜しており、断面図c-dにおいては水平レベルで10cmほどの高低差がある。床面は強く締まっているため、南西部の攪乱を受けた部分との境界は容易に認識できる。床面からは壁溝やピットなど住居に付随する設備痕は検出されなかった。

出土遺物は総数24点の内、縄文土器細片1点、礫19点、剥片4点で、図示できる遺物はなかった。したがって、5号住居址とした本遺構が実際に住居址なのか、どの時期に属するかなどは一切不明である。

6号住居址 (6Pd)

B地区、L-7グリッドに位置する。明らかに2軒の住居址が重複しており、西側の全体が確認されている住居址を6Pd-a、東側の6Pd-aに切られている住居址を6Pd-bとする。

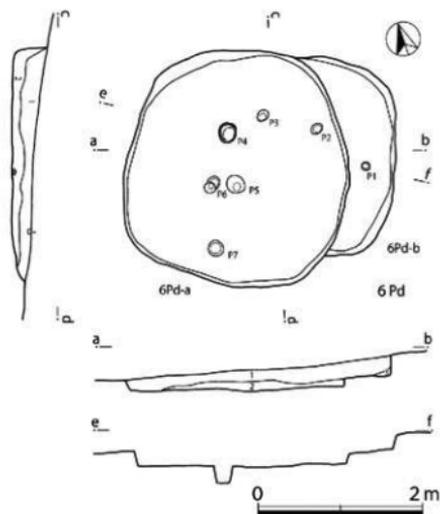
6Pd-aの平面形は不正円形あるいは丸みを帯びた多角形と言えよう。最長径は北北東-南南西方向で290cm、確認面から床面までの深さは北壁の最深部で38cmである。6Pd-bは残存部から推定すると角が大きく丸い隅丸方形と考えられ、推定最長径は250cmほどで、深さは東部コーナーで32cmである。

覆土は色調や混入物により2層に分層できたが、6Pd-a・bの新旧を示す切り合い関係は肉眼では確認できなかった。重複の新旧については、6Pd-bの床面レベルは6Pd-aより10cmほど高いが、6Pd-a内の6Pd-bの床面相当レベルには、踏み固められた面やピットの掘り込みなどが確認されなかったことから、6Pd-aが新しい遺構と考えられる。

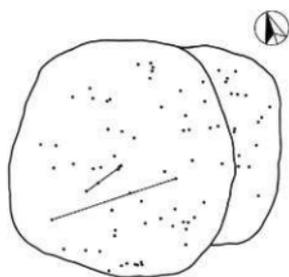
6Pdの床面からはP1(-7cm)、P2(-14cm)、P3(-15cm)、P4(-21cm)、P5(-31cm)、P6・P7(-9cm)の7カ所のピットが確認されたが、壁際に並ぶとか等間隔に配置するなどの規則性は認められない。P4には土器が埋設されており、土器内は上層に炭化物片を多量に含む暗黄褐色土、下層には少量のスコリアを含み粘性の強い暗褐色土で充填されており、ピット底面などにも被熱した状況はみられなかったが、位置的に6Pd-aの炉であると考えられる。確実に6Pd-bに伴うピットはP1であるが、6Pd-a内に確認されたピットはP4、P7以外はどちらに伴うピットかは不明である。

遺物は縄文土器片37点、石器3点、剥片2点、黒曜石片5点、礫35点の計82点であった。その内、6Pd-bからは土器片4点を含む17点が出土している。

第70図1は口唇部が尖るように細くなる口縁部破片で、端を止め結びした縄文原体を口縁部に沿って横方向に施文されている。表裏ともに繊維痕が明瞭に残る。



第68図 6号住居址実測図



第69図 6号住居址遺物分布図

2は口唇部に丸棒状施文具の側面による連続押圧が施されている。口唇部以下は単節縄文が施文されている。

3は6Pd-aの灰体土器で、口縁部と底部を欠いている。頸部以下の体部がやや膨らむ形状で、前面に縄文が施されている。

4～10は縄文を地文とする体部破片で、縄文以外の文様は見当たらない。6は縄文の施文が浅いため条間が広く、縄文が施文されていない部分が多い。6・7の胎土には少量の繊維が含まれている。9・10は縄文の条が横方向に施文されているが、押圧が浅く節は明瞭でない。

11は6Pd-bから出土した無文の体部破片で、繊維を含んでいるが焼成は良好である。

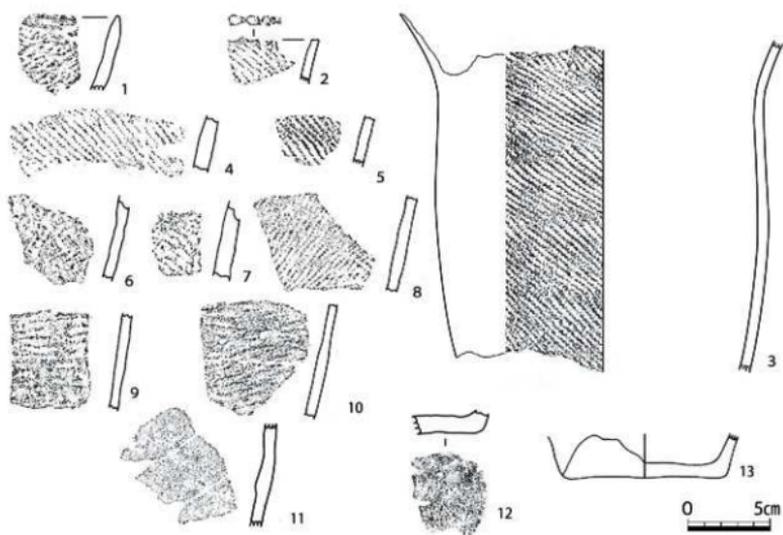
6Pd-bからはほかに3点の土器片が出土しており、多量の繊維を含むものもあるが、細片のため図示できなかった。

12・13は底部破片である。12は繊維を含みやや上げ底になっている。13は比較的薄手で繊維を含まず、底面に木の葉の葉脈らしき痕跡が認められる。

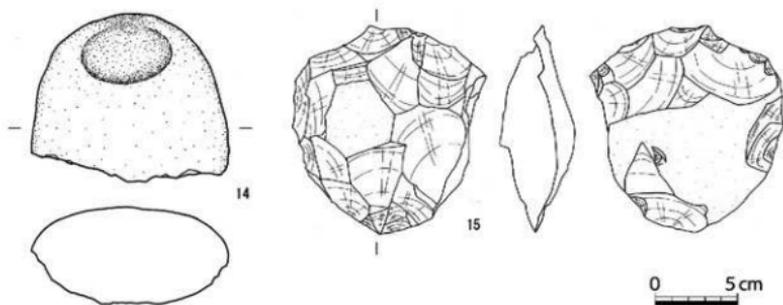
第71図14は砂岩製の敲石である。楕円形の礫を折り割った形状をしており、上端やや下部は使用により窪んだものと思われる。表裏面および右側面には、磨った痕跡があることから、磨り石からの転用の可能性もある。断面部分には使用の痕跡は認められない。

15の石材は粘板岩である。裏面に自然面を残す部分があるが、表裏ともに周囲の剥離が顕著である。一部に細かい剥離が認められる部分もあるが、剥片を剥がすことを目的とした石核であると考えられる。

6Pdから出土した土器は、無文あるいは縄文のみが施文されている破片ばかりで、時期を示す特徴的なモチーフや施文などは確認されなかったが、繊維を含む土器の存在や焼成状況などから6Pd-aは縄文時代前期中葉ころの所産と推測する。重複する6Pd-bは6Pd-a以前と考えられるものの時期的に大きく隔たるものではないと考えられる。

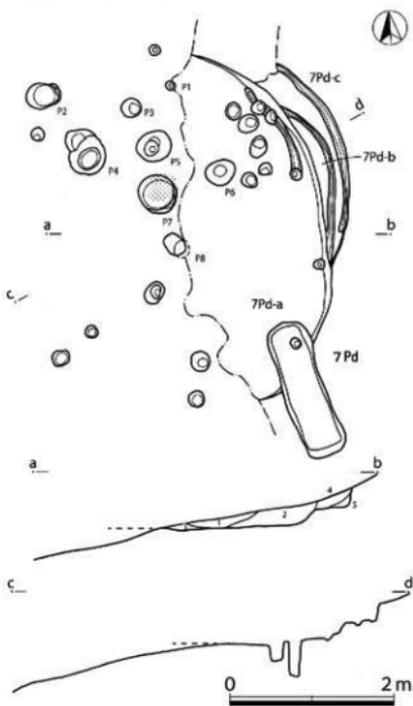


第70図 6号住居址出土遺物実測図(1)



第71図 6号住居址出土遺物実測図(2)

7号住居址(7Pd)



第72図 7号住居址実測図

B区の北西部M-5・6グリッドに位置する。攪乱により西側の大部分を失っているが、残存部から推測すると平面形は北北西-南南東方向に長軸を有する楕円形と考えられ、長軸径は400cmほどであろう。

7Pdとして調査を行った本住居址は、最終的に3基の住居址が重複していたことが判明したので、内側から7Pd-a・b・cと呼称することとした。また、7Pd-aの南東側で農耕による穴とも重複しており、壁と床面の一部が壊されている。

確認面から床面までの深さは最深部で、7Pd-aは42cm、cは15cmである。bは壁溝の外縁であり壁面はない。

7Pd-aの床面は比較的平坦であるが、地形の高低に沿った東北東-西南西方向に緩やかに傾斜している。床面は硬く締まっており、西側の攪乱との境界は硬さで識別できた。

土層断面からは、7Pd-a・bの重複関係について7Pd-aが新しいことが観察できたが、7Pd-b・cについては新旧を示す状況は確認できなかった。

住居址内には24カ所のピットが確認された。大きさも深さも様々であるが、最も浅いのはP1で17cm、ほかのピットは22cm以上の深さである。攪乱を受けている西側のピットも床面が残っているという想定

で計測すると、深いものは P 2 ~ 6・8 で深さ 62cm ~ 66cm である。P 7 は北西から南東方向へのオーバーハング気味に掘られているが、底面や壁面に熱を受け赤化した部分が認められることから、地床炉であると考えられる。

住居址の壁面に沿って壁溝が確認された。7 Pd - a では、北東側壁に沿って部分的に 130cm ほどが存在する。7 Pd - b では確認された外縁に沿った全域に存在。7 Pd - c では北東部壁面に沿っているが、東壁部で途切れている状況で、壁溝の深さはいずれも 5cm 以下の浅い溝である。

出土した遺物は、縄文土器片 31 点、石器 1 点、剥片 3 点、礫 8 点の計 43 点である。

第 74 図 1・2 は地文の縄文のみが施されており、やや外反する口縁部破片である。

2 は口唇部直下に半截竹管による並行沈線を廻らし、並行沈線間には連続爪型文が施文されている。下部は半截竹管による 2 条の並行沈線で斜めに区画し、区画内には波状あるいは弧線が沈線で描かれている。

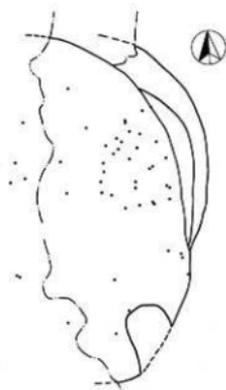
4・5 は半截竹管の内側の連続押し引きにより、並行沈線内に連続爪型文を表出するのと類似した線を表出する技法による口縁部破片である。口唇部の下に僅かな空白を残しつつ横方向の連続押し引き線を廻らし、その下部に同様の手法で木の葉状モチーフの文様を表出している。

6 は頸部近辺の破片である。内側に連続爪型文を施す並行沈線を横方向に 2 条廻らし、その下に半截竹管を用いた並行沈線による菱形の文様が出されている。

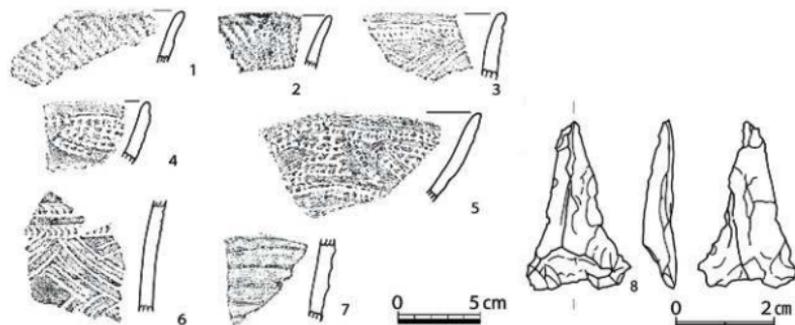
7 は破片内に横方向の 5 本の隆線が認められるが、張付けたというより両側を撫でることにより盛り上がったような僅かな隆線である。

8 は粘板岩製の石鏃である。裏面は剥離面に加工痕は認められないが、表面には裏側からの押圧によって刃部が加工されたと考えられる剥離痕がみられる。

図示できなかった土器片は、縄文、半截竹管による並行沈線や爪型文、あるいは無文のもの以外存在せず、7 Pd - a は縄文時代前期後葉の所産と考えられる。7 Pd - b・c からは遺物の出土がなく、構築時期を明確にし難いが、前期中葉から後葉にかけての時期と推測される。



第 73 図 7 号住居址遺物分布図

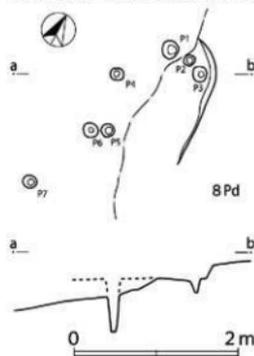


第 74 図 7 号住居址出土遺物実測図

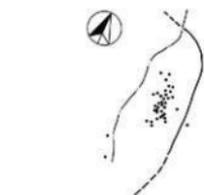
8号住居址 (8Pd)

B区M-5グリッドに位置する。遺構の一部しか確認されていないが、平面形は南北方向を長軸とする楕円形プランと推測される。

確認面から床面までの深さは、最深处で16cmである。床面は平坦であるが、残存部を見る限り壁面から離れるほど床面レベルが高くなっている。攪乱は北から南方向の緩やかな傾斜のものと東から西方向の急角度のものがあり、8Pdはこの両方向の攪乱を被っている。南側の壁面の終息点以南の床面は緩やかに削られているため、攪乱との境界が明確ではない。



第75図 8号住居址実測図



第76図 8号住居址遺物分布図

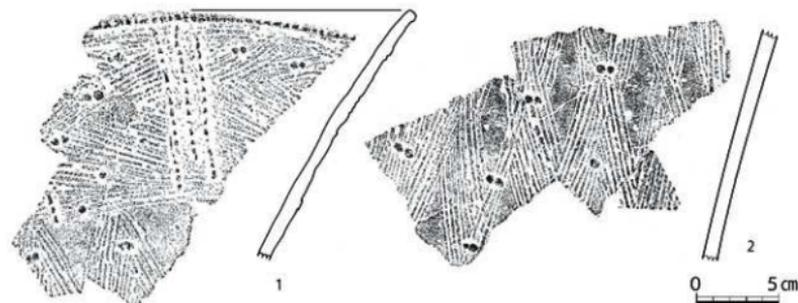
土層の堆積が非常に浅かったため、壁際の暗褐色土のみが目視で確認できた。

床面および住居址の範囲内と推定される範囲内には、P1 (-45cm)、P2 (-14cm)、P3 (-14cm)、P4 (-59cm)、P5 (-18cm)、P6 (-32cm)、P7 (-56cm)の7カ所のピットがあり、20cm以下と30cm以上のピットが混在する。8Pd内における配列や深さに規則性などは認められず、壁に沿って配置するピットもP1~P3のみだが、やや離れたP7は南西壁際である可能性はある。床面には壁溝や火の使用痕は確認されなかった。

出土遺物は縄文土器片32点、石器2点、黒曜石剥片2点、礫4点の40点で、遺物の分布は東壁のやや内側に集中している。

第77図1は口唇部周囲に1本の結節浮線文、10cmほど下部に半截竹管による横方向の集合沈線を廻らし、口縁部に文様帯を区画している。区画内には横方向の矢羽根状集合沈線が施されている。口縁部の文様帯は、周囲の数カ所に縦に3本単位の結節浮線文により縦方向に複数に区画されている。区画内の矢羽根状集合沈線上には、2個一對のボタン状貼付文が所々に施されている。口縁部文様帯下の体部には結節浮線文は認められず、半截竹管による菱格子状の集合沈線が施され、やはりボタン状貼付文が施されている。

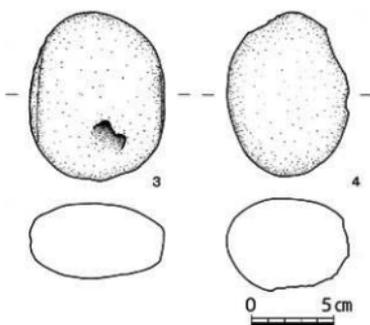
2は1と同一個体と考えられる体部の破片で、半截竹管によ



第77図 8号住居址出土遺物実測図(1)

る菱格子状の集合沈線が施されている。2個一對のボタン状貼付文が数カ所に施されるが、多くは集合沈線が交差する個所に貼り付けられている。

第78図3・4は磨り石である。両者とも自然礫を用いたもので、やや扁平な3の両側には打撃による整形痕が認められるが、ほかの石などに敲きつけて握り易い形に成形したものと思われる。4はやや厚みのある楕円形の断面を呈する。当初より適切な大きさであったとみられ、整形の痕跡はなく、使用により表裏とも滑らかであるが、図では裏側になる面と右側面の表面に10カ所ほどの剥離の痕跡が残る。剥離の原因としては、敲き石として硬いものを敲いたか、火で焼かれるなどして熱を受け表面が弾けたなどが考えられ、4には火を受けたらしき痕跡が残ることから、後者が有力である。



第78図 8号住居址出土遺物実測図(2)

出土土器1・2は12片の破片が接合したものだが、同一個体とみられる破片はこのほかに11片あり、8Pd出土土器片数の3分の2はこの同一個体の破片である。1・2と異なる土器は、いずれも無文か半截竹管による集合沈線が認められる破片であるが、細片や摩耗のため図示できなかった。いずれにしろ出土遺物の年代差が長期に渡るとは考え難く、8Pdの構築時期は縄文時代前期後葉と推測される。

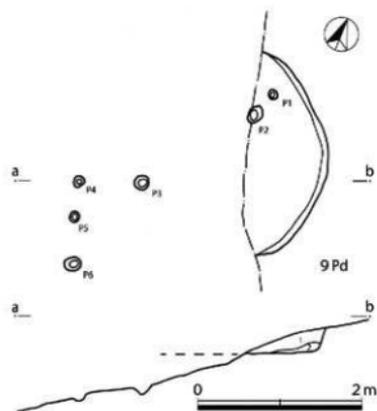
9号住居址(9Pd)

B区M-5グリッド、8Pdの北西に位置する。北東部の壁面と床面が検出されたが、東から西方向に急角度に攪乱を受け住居址の大半を消失している。残存部から推測すると住居址の平面形は円形と思われるが、P6などのピットが本住居址に伴うとすれば、北東-南西方向に長軸を有する楕円形である可能性もある。

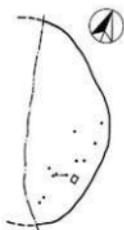
確認面から床面までの深さは、最深部で30cmである。覆土は暗黄褐色土(第1層)とローム粒を多量に含む黄褐色土(第2層)が観察された。

遺構内に壁溝は認められないが、6カ所のピットが存在する。口径は12~23cmで小規模である。床面からの深さは、P1=38cm、P2=15cm、P3=48cm、P4=53cm、P5=56cm、P6=73cmと深さや配置に規則性は認められない。当然、攪乱の深さより浅いピットは確認されず、P6のように深さや配置など本遺構に伴う設備か否か判断しがたいものもあり、本来の状況は不明である。また、炉が存在するとすれば攪乱された部分に位置すると推定されるが、火の使用の痕跡は確認できなかった。

出土した遺物は縄文土器片8点、黒曜石剥片2点、礫2点の12点であった。残存部北側からは遺物の出土がなく、すべて南半部からの出土であった。



第79図 9号住居址実測図



第80図
8号住居址遺物分布図

第81図1は口縁部の破片で、口唇部周囲に2～3本の結節浮線文が施される。破片の中央部から2列目が右に廻り、一周して左側の2列目につながると推測され、中央部で2列目の開始点を避けるように下に回り込んで3列目として右に続いている。口唇部下7cmほどにも1本の横方向の結節浮線文を施し、上下の横方向の結節浮線文間を3本単位の縦の結節棒状浮線文で小さく区画し、区画内には半載竹管の集合沈線による縦方向の鋸歯状文が地文として施されている。集合沈線には所々に2個一對のボタン状文が貼り付けられている。

2は体部の破片であるが、最上部に半載竹管による横方向の沈線が廻っているようである。その下部は半載竹管の集合沈線による横方向の鋸歯状文が重なるように2段施文されている。破片中央部には2個一對のボタン状貼付文が施されている。

3はやや幅の広い半載竹管の集合沈線により縦方向の鋸歯状文あるいは横方向の矢羽根状文が施された体部破片である。

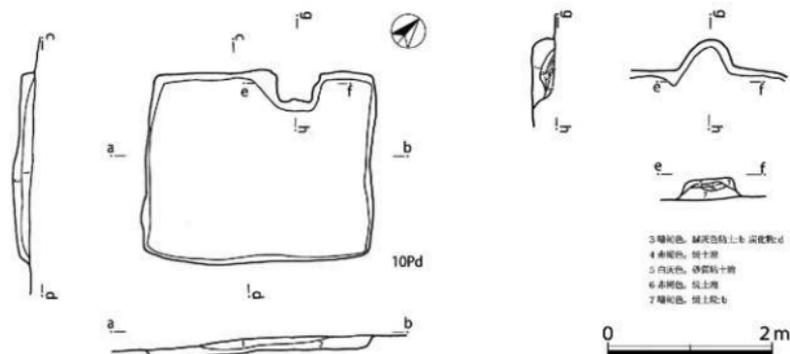
4は原体を縦方向に転がした縄文のみの体部破片である。右側には原体の端部の折返し部の痕跡が確認される。出土土器片中、縄文が施される2片のうちの1片である。

以上の出土状況から9Pdの構築年代は僅かな出土数の土器片を主体に推測せざるを得ないが、縄文時代前期後葉と考えられる。



第81図 9号住居址出土遺物実測図

10号住居址 (10Pd)



第82図 10号住居址実測図

A区D-6グリッドに位置する。平面形は北東-南西方向を長軸とする長方形プランで、長軸270cm、短軸231cmである。床面は全体的に北から南に10cmほど傾斜している。確認面から床面までの最深部は、北西壁の中央よりやや北側に存在するカマド部の北側で、深さ22cm、最も浅いのは南東壁の中央部で10cmほど、本来の掘り込み面はさらに高いレベルであったと推察される。

覆土は色調や含有物の観察から2層に分層できたが、壁際から徐々に埋没するような一般的な自然堆積の状況ではないと思われる。

本住居内部からはカマド以外、ピットや壁溝は確認されなかった。

カマドは上部を失っている。土層中には粘土や焼土からなる土層がみられ、最下層には煙道を伝って入り込んだと思われる暗褐色土が堆積している。土層中には石がみられないことから、粘土を主体として構築したものと思われる。

遺物は6点の出土であった。内訳は土師器片2点、礫片4点である。

第84図1はやや厚手で外反しており、裏あるいは鉢の口縁部破片である。

遺構の機能時期を検討するには、あまりにも遺物が少ないが、住居址やカマドの特徴なども勘案し、7世紀末から8世紀前半ころの所産であると考えられる。

11号住居址 (11Pd)

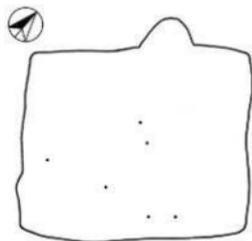
A区のD-8グリッドに位置する。プラン確認時点で住居址としては規模が小さいことから、小竪穴として分類すべきか検討したが、同じく規模が不明な8Pd・9Pdを住居址として扱っていることから本遺構も住居址とすることとした。遺構の西側部分を攪乱で失っているため全容を知り得ないが、残存部からは不整円形あるいは隅丸不整多角形の平面プランを呈し、差渡しは最低でも240cmを下回らないと推測される。

確認面から床面までの深さは、最深部の東側壁面で11cmであり、確認レベル以上の大部分は攪乱により消滅してしまったことになる。覆土は第1層である暗黄褐色土が存在しただけである。

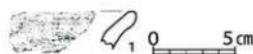
床面はほぼ平坦であるが、東から西に向かって緩やかに傾斜しており、比高差は断面図採取位置で8cmである。床面には壁溝やピットなどの付属設備は認められなかったが、東壁から130cmほど西側に焼土が確認された。規模は長径60cmほどの楕円形で、西側は攪乱を受けていたが、硬化赤変した部分が残り、大よその範囲を把握できた。11Pdに伴う炉と考えられる。

遺物はまったく出土せず、遺構の一部が確認されただけの状態である。遺構の形状から縄文時代の住居址である可能性が高いが、A区内に

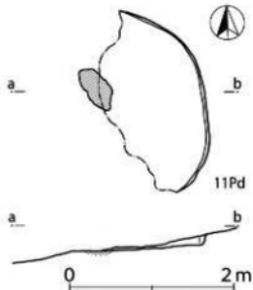
は縄文時代の住居址が存在せず、B区の複数の住居址からは離れた位置にあり、構築時期などは不明である。



第83図 10号住居址遺物分布図

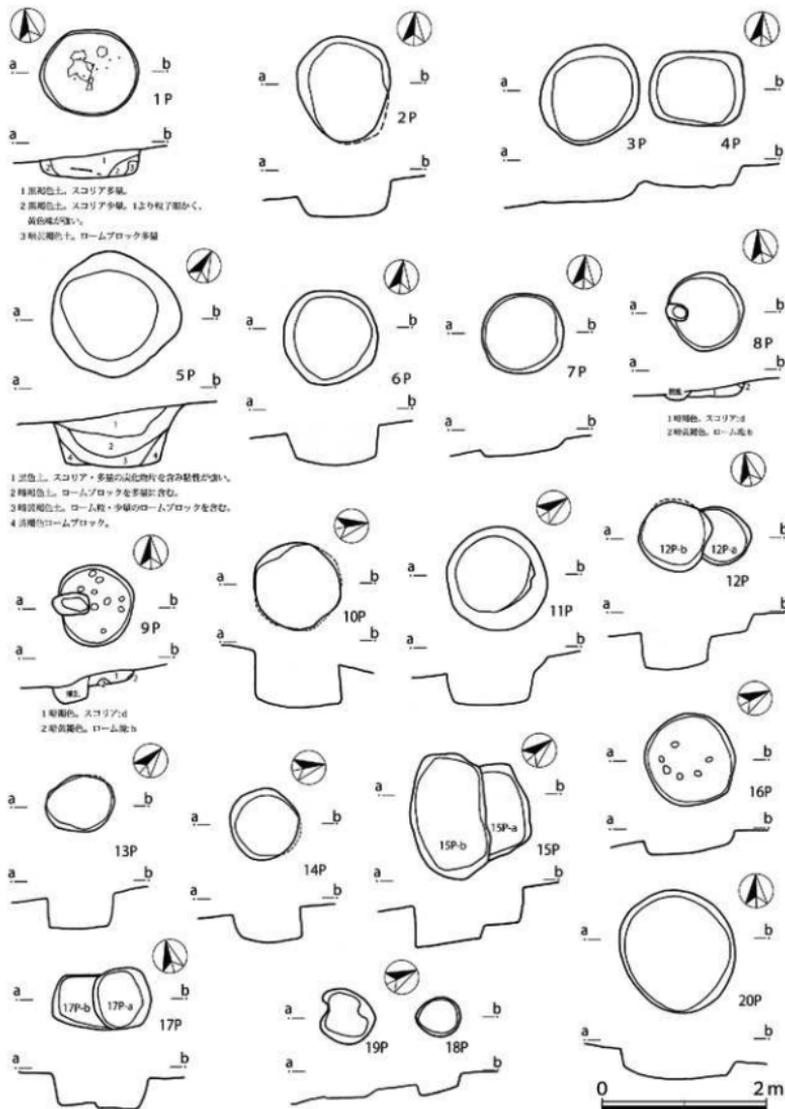


第84図
10号住居址出土遺物実測図

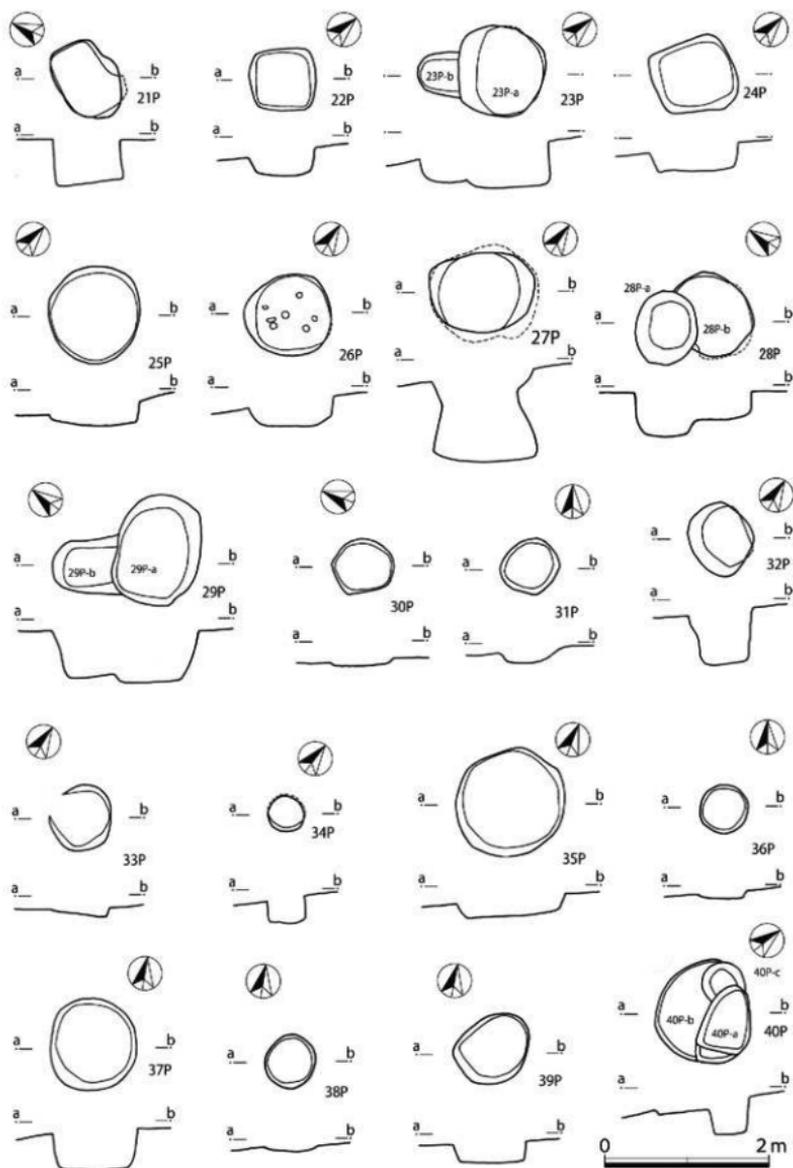


第85図 11号住居址実測図

2) 土坑



第 86 図 土坑実測図 (1)



第 87 图 土坑实测图 (2)

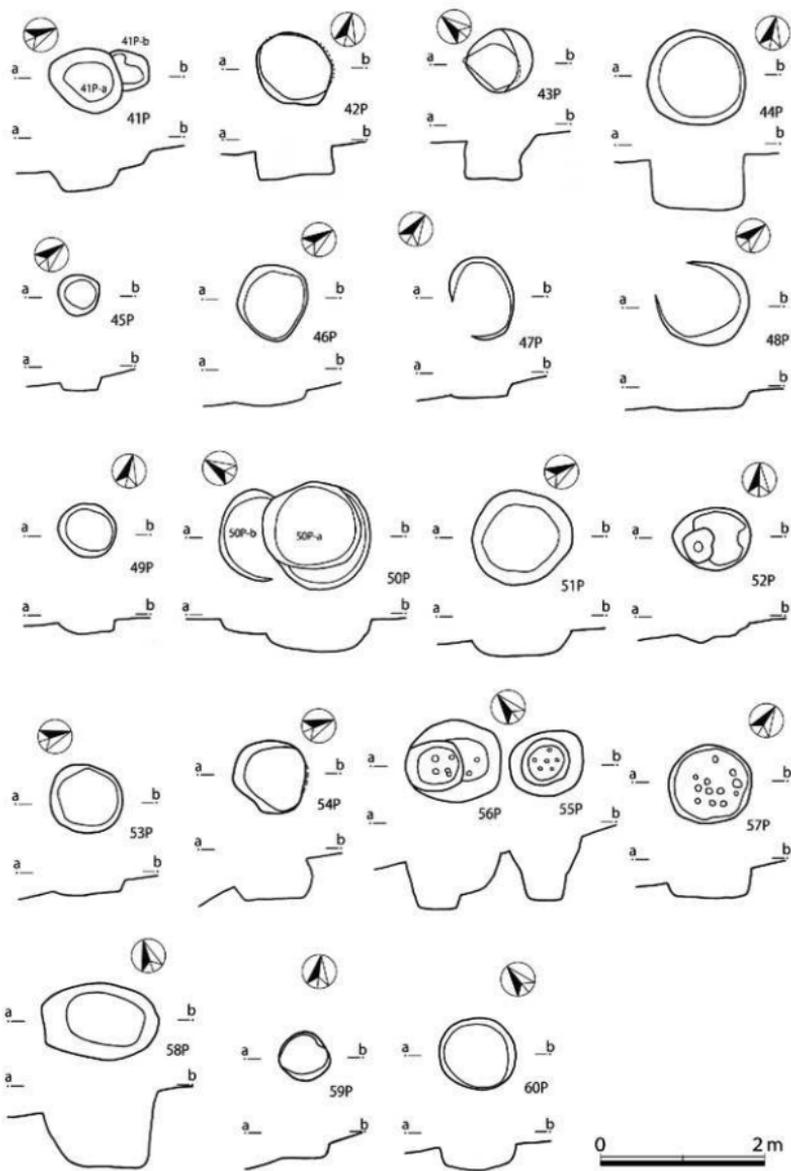
孝道遺跡 検出土坑一覧

(最大長・深さの単位はcm)

番号	重複	平面形	最大長	深さ	特 徴 等	時期・機能等
1P		円形	120	32	土器出土(第85図-1)	縄文:貯蔵穴
2P		卵形	132	43	一部オーバーハング	縄文:土坑
3P		不整円形	127	25	底面のみ残存	中世以降の土坑
4P		隅丸長方形	114	20		農耕
5P		不整円形	155	80	断面ラッパ状	縄文:土坑
6P		円形	115	46		中世以降の土坑
7P		円形	105	21	底面のみ残存	中世以降の土坑
8P		円形	94	16	底面のみ残存	中世以降の土坑
9P		円形	99	20	底面のみ残存、小穴多数あり。土師器片1点	縄文:陥し穴?
10P		円形	105	66	壁面垂直、一部オーバーハング	縄文:土坑
11P		円形	126	56	石片埋没。東壁面の上部ラッパ状	縄文:土坑
12P	a	楕円形?	(78)	25		農耕
	b	円形	92	58	北側壁オーバーハング	縄文:土坑
13P		不整楕円形	82	44	北側壁オーバーハング。縄文土器片1点	縄文:土坑
14P		円形	88	43	北東側壁オーバーハング	中世以降の土坑
15P	a	隅丸長方形	108	43	壁面直線的	農耕
	b	長楕円形	155	58	壁面直線的	農耕
16P		円形	113	28	底面付近のみ残存、小穴複数あり	縄文:陥し穴?
17P	a	楕円形	73	44		農耕
	b	隅丸長方形	-	40		農耕
18P		不整円形	54	23		農耕
19P		不整円形	71	11	形状不整形で底面不陸	攪乱
20P		楕円形	147	38		中世以降の土坑
21P		隅丸長方形	97	58	壁面直線的、南側壁オーバーハング	農耕
22P		隅丸方形	78	32		農耕
23P	a	不整円形	109	56	北東部壁垂直、底面は楕円形	縄文:土坑
	b	長楕円?	-	26		農耕
24P		隅丸方形	100	37		農耕
25P		円形	118	29	底面のみ残存	中世以降の土坑
26P		不整円形	102	38	底面に小穴複数あり。壊破片1点	縄文:陥し穴?
27P		不整楕円形	125	112	断面袋状。壊破片1点	縄文:貯蔵穴?
28P	a	楕円形	90	52		縄文:土坑
	b	楕円形	107	32	東側、南側壁オーバーハング	縄文:土坑
29P	a	楕円形	138	67		縄文:土坑
	b	楕円形	-	58		農耕

番号	重複	平面形	最大長	深さ	特 徴 等	時期：機能等
30P		不整円形	73	8	底面のみ残存	中世以降の土坑
31P		不整円形	68	17	底面のみ残存	中世以降の土坑
32P		不整楕円形	90	70	底面隅丸方形、一部オーバーハング	縄文：土坑
33P		円形	82	12	底面のみ残存、底面傾斜	農耕
34P		円形	46	34	立ち上がりが直線的	時期不明：柱穴
35P		円形	136	30	底面付近のみ残存	中世以降の土坑
36P		円形	58	11	底面のみ残存	縄文：土坑
37P		円形	113	49		中世以降の土坑
38P		円形	65	6	底面のみ残存。小規模	縄文：土坑
39P		不整楕円形	94	27	北西部のみ直線的コーナー	縄文：土坑
40P	a	不整楕円形	100	47	底面三角形	縄文：土坑
"	b	楕円形？	128	20	底面のみ残存	中世以降の土坑
"	c	楕円形	-	22		農耕
41P	a	不整円形	92	42	立ち上がりが開き気味、底面傾斜。土師器片1点	農耕
"	b	楕円形？	-	27	小規模	農耕
42P		楕円形	98		壁面垂直、北側壁オーバーハング	中世以降の土坑
43P		不整円形	77	51	底面不整形、やや袋状	縄文：土坑
44P		円形	117	68	立ち上がり垂直。陶器片2点	中世以降の土坑
45P		円形	50	17	小規模	中世以降の土坑
46P		不整円形	89	18	底面のみ残存	中世以降の土坑
47P		楕円形	101	18	底面のみ残存	中世以降の土坑
48P		円形	114	21	底面のみ残存	中世以降の土坑
49P		円形	72	16	底面のみ残存、小規模	縄文：土坑
50P	a	楕円形	131	39	底面2段、丸底	中世以降の土坑
"	b	楕円形	-	16	底面のみ残存	中世以降の土坑
51P		円形	122	39		中世以降の土坑
52P		楕円形	96	16	底面のみ残存、底面不陸	時期不明：土坑
53P		楕円形	88	16	底面のみ残存	縄文：土坑
54P		不整円形	90	47	底面平底。縄文土器片、須恵器編（第89図2・3）	時期不明：土坑
55P		不整楕円形	114	69	立ち上がり中ほどで開く。縄文土器片（第89図4）	縄文：陥し穴
56P		楕円形	96	81	重複か？。縄文土器片11点（第89図5～7他）	縄文：陥し穴
57P		円形	101	38	底面平底、小穴多数あり	縄文：陥し穴
58P		長楕円形	145	104	覆土中ほどに礫打数混入	縄文：土坑
59P		不整円形	64	19	底面のみ残存	時期不明：土坑
60P		円形	92	32	丸底気味	中世以降の土坑

土坑観察表



第 88 图 土坑实测图 (3)

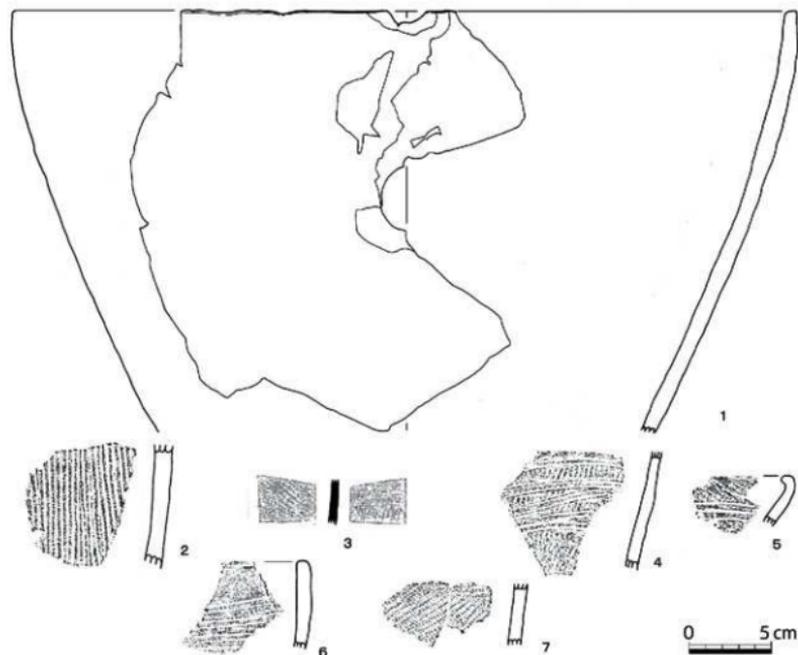
調査区内からはA区・B区合わせて60基の土坑が検出され、数量的には90%がA区に属する。多くは円形あるいは楕円形の平面プランを呈し、同様の遺構のようにも思えるが、形状や規模、覆土の状態などを目安に、幾つかのグループに分けることができる。

グループ1：直径90～150cmほどの円形プランが主で、断面形は底面から丸みを帯びて立ち上がり、上部はほぼ垂直な壁面となる。覆土は黒色土を主体に1層のみのものが多い。2Pdと重複する45 P・46 P、10Pdと重複する42 Pなどの例から、古代以降に構築されたと考えられる。一覧では「中世以降の土坑」と記載した。

グループ2：一般的な土坑で円形や楕円形の平面形を呈し、直径は60～160cm程度である。土層は、褐色土、黄褐色土、黒褐色土などが混在し、自然堆積や一度期に埋没した状況を示すなど様々である。断面形もグループ1と同様のもの（例：P1）、壁面がやや開き気味のもの（例：5 P）、壁面がほぼ垂直のもの（例：13 P）、オーバーハング（例：10 P）あるいは袋状（例：27 P）になるものなどがある。また底面に複数の小穴を伴う土坑（例：26 P）も存在する。これらの中には形態などから機能が推定されるものもあるが、ほとんどは機能を明らかにすることはできなかった。これらは検出状況や土層の比較などから縄文時代の所産と考えられる。

グループ3：やや規模が小さく、土層観察などからグループ1や2に分類しがたく、機能や構築時期が不明な土坑。規模が小さいのは上部が攪乱を受け、底面付近しか残されていないことが要因とも考えられる。

グループ4：直径46cmの円形プランで、ほぼ垂直に立ち上がる円筒形の土坑である。同様の



第89図 土坑出土土器実測図 (1 = 1 P、2～3 = 54 P、4 = 55 P、5～7 = 56 P)

土坑が複数存在すれば柱穴などの機能も想定されるが、34 Pのみ単独で確認され、構築時期や機能は不明である。

グループ5一掃りがなく乾燥すると灰褐色にみえる土層を覆土とし、四隅に丸みのある方形や長方形プランの穴および平面形が不整形で底面も不陸な穴。前者は農耕の過程で掘られたと考えられ、後者は動植物によると思われる人為的ではない穴である。

これらの土坑のうち、遺物が出土したのは6基だけである。

第89図1は1 Pから出土した縄文土器の口縁部破片である。1 P内からは19点の破片が出土したが、すべて同一個体とみられる。1はそのうちの7片が接合したもので、口径が48cmほどと推測される大形土器の口縁部破片である。口縁部の周囲は横方向、以下体部は縦方向のナデによる整形痕が認められるが、文様はまったくみられない。ほかは体部の破片であり、複数の接合がみられたが文様は皆無であり、無文の深鉢形土器と言えよう。時期については、縄文時代前期から後期にかけて類似した器形が存在するようだが、無文という要素を加えると時期を判定しかねる。ここでは縄文時代としておく。

2・3は54 Pから出土した。2は半截竹管の内側により断面がカマボコ形の並行沈線を縦方向に集合させている。縄文時代中期の土器片と考えられる。3は須恵器片で外面にタタキ目、内面に縦と横方向のナデの痕跡が認められる破片だが、確認面表層からの出土で、攪乱層中に混じり込んだものと思われる。

4は55 Pから出土した縄文土器片である。縄文を地文とし、その上から半截竹管による横方向の並行沈線が3段認められる。図中2段目と3段目の間に波状(?)の2本の並行沈線が施されており、縄文時代前期後葉ころに位置付けられよう。55 Pが陥し穴と考えられることから、住居址である7Pdや8Pdと近い位置に同時に存在していたとは考え難く、遺物は埋没過程の流れ込みである可能性が高い。

5・6・7は56 Pから出土した縄文土器片である。5は口唇部が内湾する口縁部破片で、地文の縄文が口唇部直下から施され、周囲に半截竹管の内側による2条の並行沈線が廻っている。6は半截竹管の内側による横方向の並行沈線が数条認められる口縁部破片である。7は地文として縄文が施された体部破片である。56 Pからはほかに10点の土器片が出土しており、いずれも細片であるが、縄文が地文のもの、半截竹管による並行沈線が認められるものなど、縄文時代前期中葉から後葉にかけての所産である。56 Pは陥し穴と考えられることから、55 Pと同様に遺物は流れ込みによるものと考えられる。

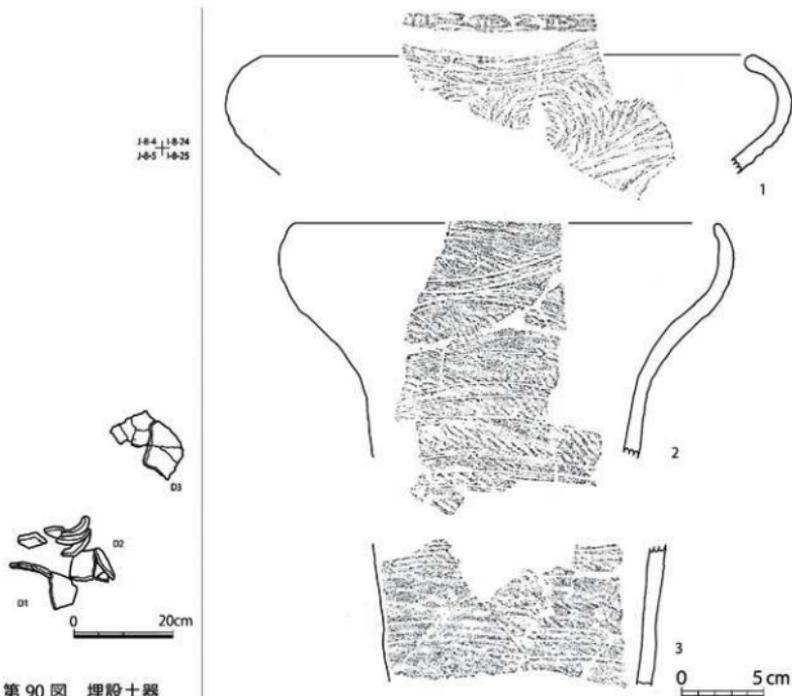
3) 遺構外の遺物

埋設土器

B区のJ-8グリッドに確認された。遺構確認作業中に土器の一部が現れ、周囲を清掃するうちに全体が明らかになったものである。埋設土器として取り扱ったが、検出の状況は平地に置かれた土器の上に土層が堆積したという状態で、土坑などに埋持っているという状態ではなかった。これについては、住居址の上部が攪乱を受け床面部分だけが残されたという可能性も否定できないが、遺物の撤去後に床面と認識できる状況は確認されなかった。

出土状況を詳細にみると、3カ所のブロックに分けられ、結果的にはD1は第91図1、D2は2、D3は3であった。どれも湾曲した部分が土圧で押し潰され、その場に展開図のように広がった状態であった。

1は口縁部が内湾し、体部に括れを有する深鉢形土器の口縁部破片である。縄文を地文とし、口唇部直下と体部の直径が縮まる途中の位置に横方向の浮線文が廻り、この上下の浮線文間には同心円文あるいは渦巻文が浮線文により描かれ、その左右の上下からは、やはり複数の浮線文が



第90図 埋設土器

出土状況平面図 第91図 遺構外出土埋設土器実測図

対角線上に施されている。下部の浮線文の下には弧線状の浮線文の一部がみられることから、体部にも同様のモチーフによる文様が施されているものと推測される。これら浮線文はすべて先端が細いへら状の施文具による連続した斜めの刻みが施されている。口唇部には細い粘土紐2本を互いに交差する波状に貼り付けることによってできる紡錘形のスペースの中に縦に3本の粘土紐を貼り付けた文様が廻る。

土器片は外面を上にして出土したが、周辺部や対面側の破片は検出されなかった。

2は縄文を地文とし、口縁部がやや内湾する深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部直下と体部の直径が縮小する途中の位置に半載竹管による横方向の並行沈線が廻り、上下の並行沈線間には互いに交差する波状文が2段描かれている。それによって3段の紡錘形のスペースが生じるが、上段には並行沈線による蕨手文風のモチーフが認められる。2段目は不明。3段目には縦方向の並行沈線2条が認められる。下部の並行沈線以下は間隔をおいて、2条さらに間隔を置いて3条の横方向の並行沈線が体部を廻っている。2は縦に突き刺さる状況の破片が多かった。

3は縄文を地文とし、上方にやや開く深鉢形土器の体部破片である。体部には半載竹管による並行沈線を数条一組として横方向に2段廻らしている。焼成の具合がやや悪く、2とは別個体のようにも思えるが、施文の構成や径の推定値が類似しており、同一個体である可能性が高い。

これらはいずれも縄文時代前期後葉の特徴を持ち合わせている。

遺構外出土遺物

遺構外からは 200 点を超える遺物が出土した。内容は縄文土器片、土師器片がほとんどで、石器のほか少量の剥片や陶器片であった。

第 92 図 1 から第 93 図 63 は縄文土器片である。

1・2 は限られた部分ではあるが無文の破片である。全体が無文であるか否かは不明である。1 は粗雑な整形痕が残る口縁部破片である。2 は底部付近の破片で、繊維を含んでいる。

3・4 は刺突文が施された口縁部破片である。3 は口唇部頂部から体部にかけて地文として縄文が施され、口唇部に角棒状施文具による縦の連続押圧列、その下部に同様の施文具による連続刺突列が施されている。4 は口唇部に大小のコブ状突起が交互に並ぶ口縁部である。コブの直下に横方向の細い沈線が廻り、その下に棒状施文具による刺突が列点状に廻る。

5 は口唇部の 2 cm ほど下に太くて厚い隆線が廻る口縁部である。胎土には多量の繊維を部組んでいた痕跡がみられる。

6 は斜方向の条痕を地文とし、右側に半截竹管による縦方向の並行沈線が認められる。消えかかっているが、上方にも横方向の並行沈線が施されている。断面には繊維痕が著しい。

7・8 は斜行する結節沈線が施された破片である。7 は、波状口縁の波頂部から沈線が垂下し、その沈線に向かって両側から斜方向の結節沈線を施し、下向きの矢羽根状モチーフを表出している。下部の粘土帯のつなぎ目で割れており、ここを変換点とし下部はやや括れた器形であると推察される。8 は体部破片で、斜方向の結節沈線が、垂下する 2 本の沈線間で交差していることから、結節沈線による格子状モチーフが描かれていると思われる。下部でやや径を増して屈折し、以下径を減じる器形で、屈折部以下は無文である。

9～24 は縄文のみが施された破片である。観察範囲内に縄文以外の要素がみられないという意味である。

9～11 の断面には繊維痕が認められる。9・10 は口縁部で、9 の口縁は波状を呈すると思われる。

12 の縄文の施文は粗雑である。13 は頸部付近と思われる。

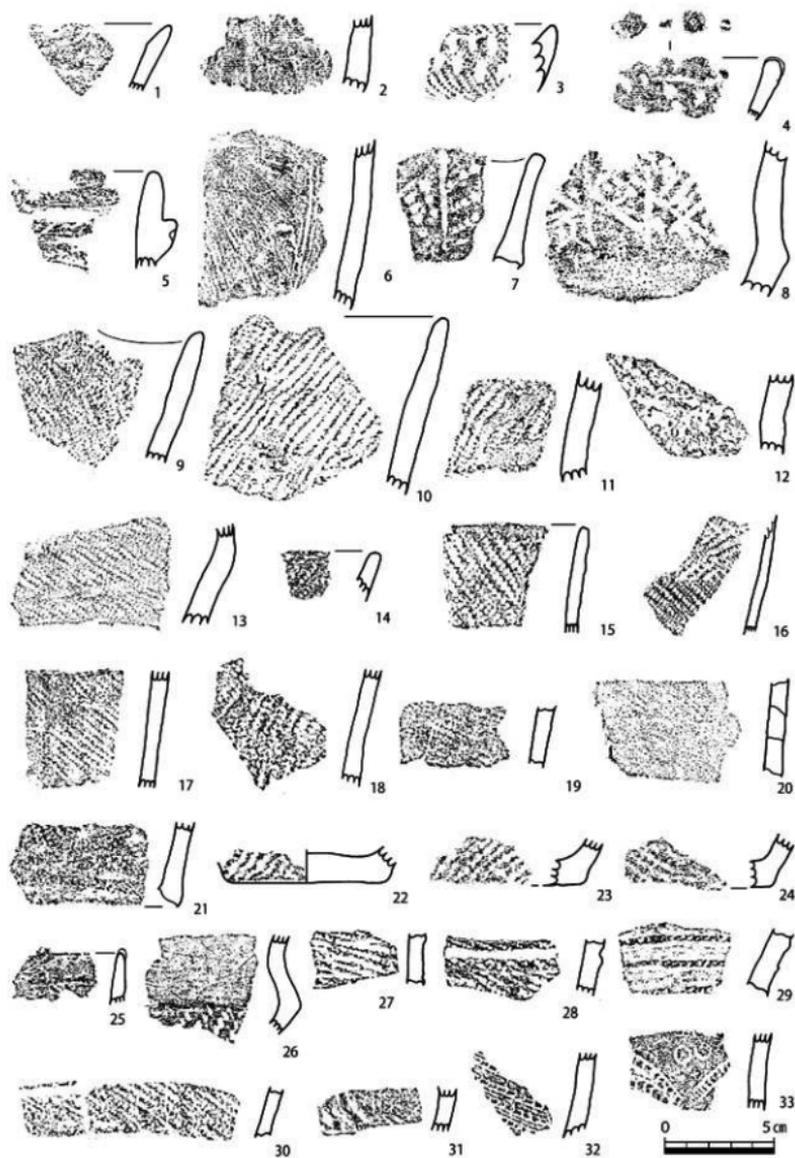
14～19 は比較的器壁が薄い破片である。10・11 は口縁部であり、10 の施文は非常に浅い。16 は最も器壁が薄く、最薄部で 3.5mm である。結節羽状縄文が施文されている。19・20 は成形時に粘土の乾燥が進行した時点での施文とみられ、縄文の押圧が非常に浅い。20 は表面の輪積み痕を残したまま縄文が施文されている。

21～24 は底部付近および底部の破片である。21 は底部接地部付近まで縄文が認められるが、施文が浅くて分かりづらい。体部最下部で底部との接合部で剥がれるように割れた破片である。22～24 は接地面まで縄文が施されている。

25・26 は無文帯の下部に縄文が施文されている。25 は口縁部で平縁だが 1 か所に小豆大の粘土を貼り付けた突起がある。

27～31 は地文の縄文と浮線文が施された土器片である。27 は破片の上下に横方向の低い浮線が貼られ、その上から縄文が施文されている。28 は破片上部にやや幅広の 2 列の横方向の浮線文が貼られ、その上から縄文が施されている。29 は頸部に 3 本の浮線文が張付けられ、浮線文上に縄文が施されている。30 は輪積み部分で割れた破片で、上方の一部に浮線文があり、その上から縄文が施文されている。27・28 と異なり粘土紐の両側はナデが施されていない。31 の左側には少なくとも 2 本の浮線文による曲線的なモチーフの一部が認められる。浮線文上にはへら状施文具による連続した斜方向の刻みが施されている。

32・33 は地文がなく、半截竹管による並行沈線と並行沈線間に半截竹管の端部による爪型文が施される破片である。33 には円形の竹管文が 2 つ施文されている。



第92图 遺構外出土遺物実測図(1)

第93図34・35は条痕文が施された破片で、胎土中には纖維痕が認められる。両者は同一個体である可能性もある。34は底部付近の破片で、最下部には条痕文はみられない。

36～44は地文が縄文で半截竹管による並行沈線の施文が認められる破片である。

36はやや幅の広い並行沈線が横方向に雑に施されており、少量の纖維痕が認められる。縄文は並行沈線の施文時にはみ出した粘土により、ほぼ消えかかっている。37は波状口縁で波頂部には突起が表出されている。口唇部の内側には丸棒状施文具の押圧による刻みが施されている。表面は口唇部に沿って直線的な方向と波頂部から下方斜めの方向に幾何学的な並行沈線が施文されている。地文の縄文の施文は浅く部分的に認められる。38の地文はゆるく然られた単節縄文と思われる。口縁部周囲に3条の並行沈線を廻らし、それ以下には並行沈線による波状文と渦巻あるいは蕨手のモチーフが描かれている。40は破片の上下に横方向の並行沈線があり、その間に3条の並行沈線による半弧状モチーフが上下交互に描かれている。41は浅い縄文が施文された体部破片で、斜方向の直線と、それに接するような曲線が半截竹管による並行沈線で描かれている。42～44は複数本の並行沈線が横方向に施文され体部を廻る。42は器形の屈曲部、43・44は破片内に上下2段の並行沈線が認められる。

45・46は口唇部が内側に鋭角に屈曲する器形の口縁部破片で、同一個体と思われる。体部は無文で、屈曲部の上を向いた部分に沈線で三日月状モチーフが描かれている。三日月の弧が内側向きと外側向きのものが交互に描かれ、モチーフ内は縄文で充填されている。厳密には縄文施文後にモチーフを描き、周囲の縄文を磨り消している。また45の左側モチーフの左端には焼成前に穿孔が施されているが、これ以外に穿孔はみられず規則性は認められない。

47～56は無文の体部に半截竹管による並行沈線や集合沈線が施されている破片である。

47は口唇部に沿って2条の並行沈線が廻り、その下部に斜方向の並行沈線の一部が認められる口縁部破片である。48は4分の1ほどに割いた竹管状施文具による並行沈線で、竹管の内側の曲面がカマボコ状に盛り上がっている。47は斜方向に無造作に施文された並行沈線による集合沈線である。50は1条、51は複数の縦方向の並行沈線が施されている。52・53は横方向の集合並行沈線で区画がされた体部破片である。52は直線による幾何学的なモチーフ、53は曲線による紡錘状のモチーフの一部が確認できる。54・55も複数の横方向の並行沈線により体部の文様帯を区画し、斜行する数条の並行沈線で幾何学的なモチーフが描かれている。56は口唇部外面側に半截竹管の連続刺突によるキザミが施されている。以下体部は半截竹管による鋸歯状の集合沈線で充填されている。口唇部下1.5cmほどに2個1対のボタン状貼付文が施されている。

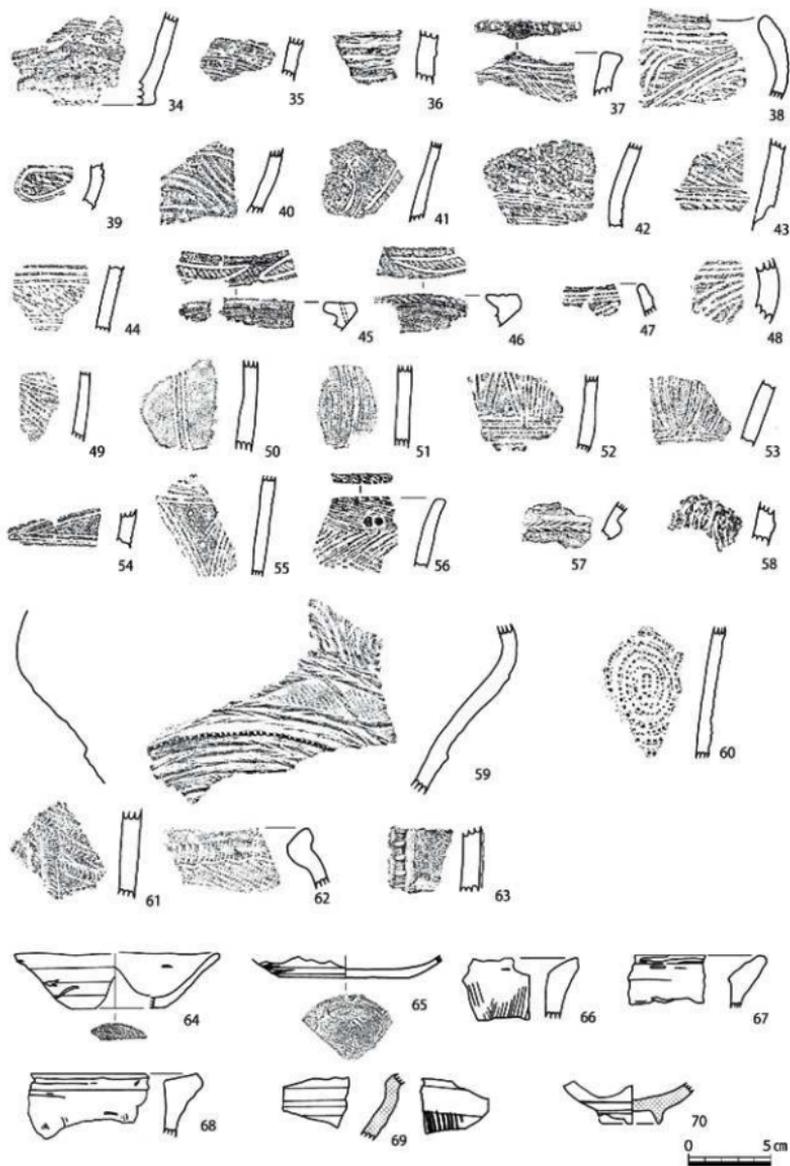
57～60は結節浮線文が認められる破片である。

57は浮線文というより頸部に貼り付けられた隆線状の突帯であるが、へら状施文具による斜方向のキザミが左右対称となるように2列に施されている。58は口縁部付近の破片で、4本の結節浮線文が認められ、で同心円状のモチーフを表出していると思われる。59は口縁部付近から頸部にかけての破片で、縄文を地文とし、頸部にキザミを施した隆線が廻る。その上に3本、下方に4本の横方向の浮線が体部を廻る。上方の3本の浮線の上位には波状や同心円状の浮線が施され、これらの浮線の上には細いへら状施文具による斜方向のキザミが施されている。キザミは必ずしも浮線上ではなく浮線から外れた箇所にも施されている場合もある。60は結節浮線文による渦巻状モチーフが描かれている。

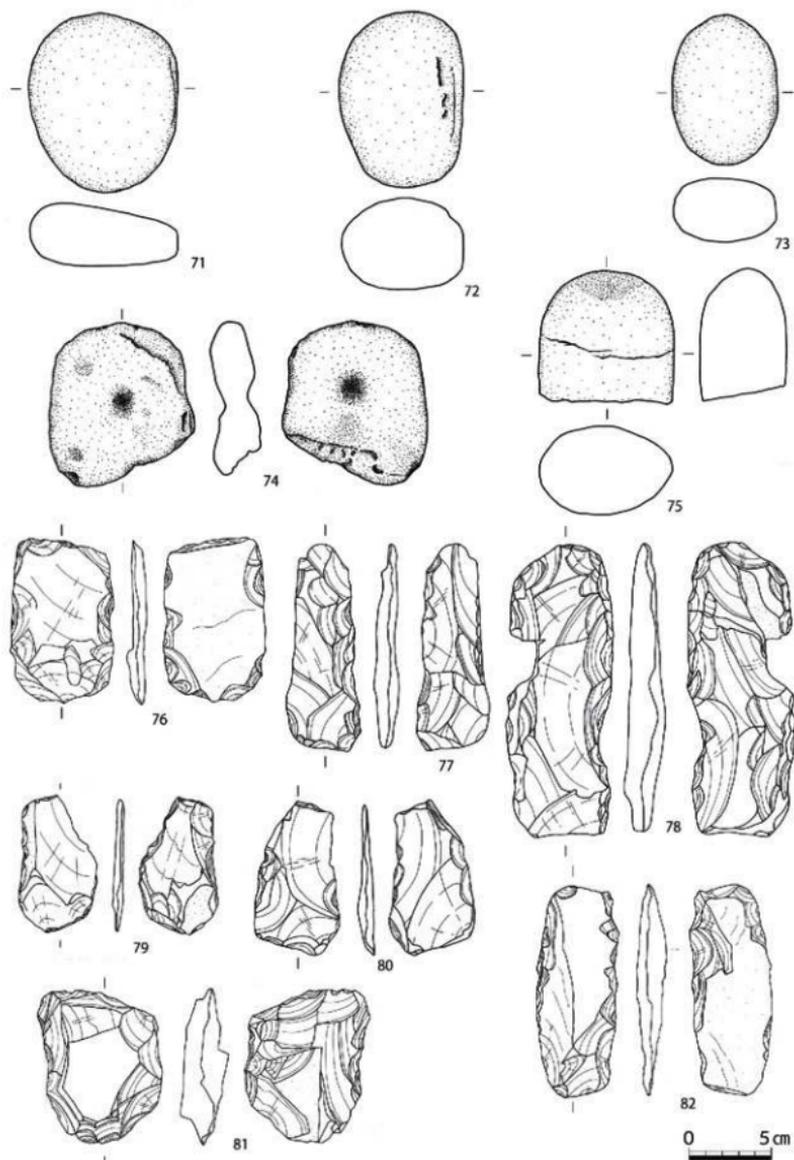
61は縦方向の隆線と隆線に沿った幅広の並行沈線による幾何学的モチーフが施されている。並行沈線内は竹管状施文具によるキャタピラ文で充填されている。

62は内湾する口縁部の口唇部のみが外反する破片で、口唇部下に1条の波状沈線を廻らし、口唇端部と波状沈線間はキャタピラ文で充填されている。以下は地文の縄文が施文されている。

63は断面が台形状に成形され、やや斜方向のキザミが施された隆線が貼り付けられている。



第 93 图 遺構外出土遺物実測図 (2)



第 94 図 遺構外出土遺物実測図 (3)

64～68は土師器片である。

64・65は坏である。底部に糸切りの痕跡が残り、体部はロクロ成形のままである。64の口唇部は肥厚し丸みを帯びている。

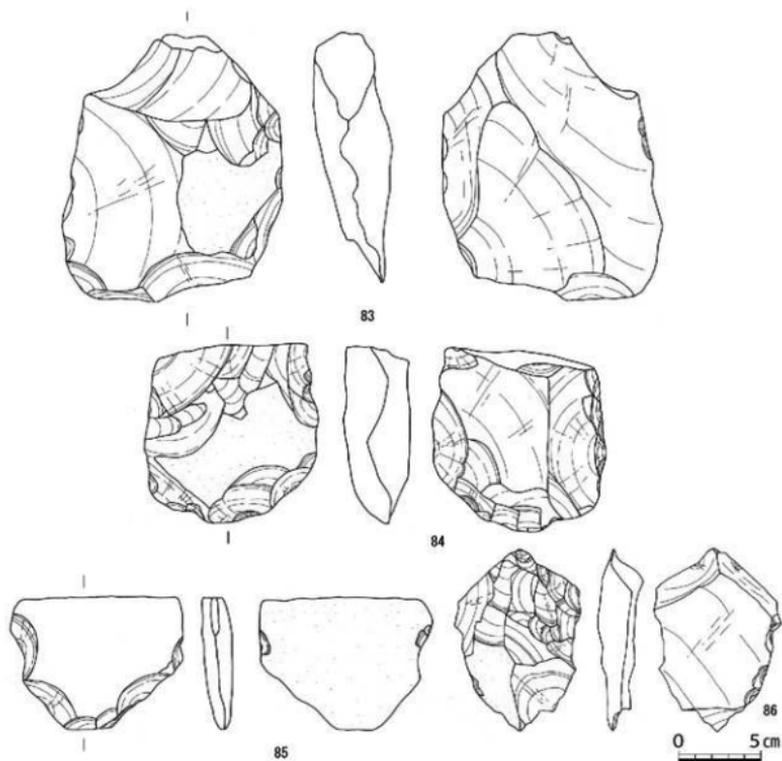
66～68は甕の口縁部破片である。3点ともに体部に比べ口縁部に厚みがある。

66の外門口縁部は横ナデ、体部は縦方向のハケ調整、内面は口縁部、体部ともに横方向のハケ調整で整形されている。67・68の外門口縁部は横ナデ、体部は縦のヘラケズリ後のナデ、内面は口縁部、体部ともに横方向のナデが施されている。

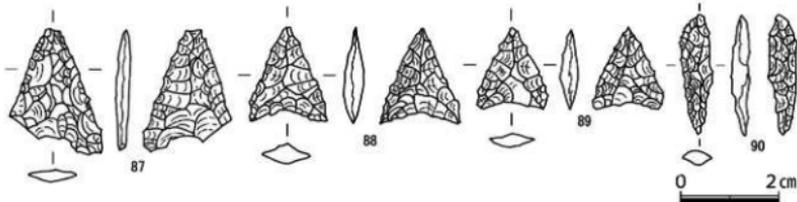
69・70は陶器片である。69は外面にロクロ成形痕が残る。内面の2～2.5mm間隔の条線は卸目とみられることから、すり鉢の破片と考えられる。70は内外面とも軸葉のかかった碗で、外面には軸葉で覆われていない部分が散見する。

第94図71から第96図90は石器である。

71～73は磨り石である。71は扁平な自然石を用い、使用に伴い表裏とも平滑面となっている。左右で厚さが異なり、厚い方は自然面のままであるが、薄い方は敲打によって表面が潰れ平らな



第95図 遺構外出土遺物実測図(4)



第96図 遺構外出土遺物実測図(5)

面がつくりだされている。72は正面の形がやや長い楕円形、断面は楕円形の自然石で、裏面(断面図の下側)と右側面に平滑面がつくりだされている。73の正面形は整った楕円形を呈し、全体的に磨りによる曲面的な滑面となっている。左右側面は本来曲面だった部分が平面的に削ぎ落とされている。これについては、形を整えるためにそうしたのか、石器を使用した結果そうだったのかは不明である。

74は扁平な自然石の表裏ともほぼ中央に窪みがある凹石である。表裏の窪みの位置はややずれており、深さも異なる。

75は切断された楕円礫であるが、切断面に敲打によって潰れた部分が認められることからスタンピング形石器と考えられる。

76～82は打製石斧である。76・77・79・80は頁岩系の石を石材としたものであるが、いずれも劈開面で剥離している。剥離したのが製作過程なのか石斧としての使用によるものかは不明であるが、76は剥離後の再加工の痕跡が認められる。78は粘板岩製の短冊形石斧であるが、複数に割れ、一部欠損している。81は火成岩製で中程で折れた後に折れ口周辺を加工している。

82は頁岩系の石材であり、刃部や剥離面の摩耗が著しい。裏面は劈開面で剥離している。

第98図83～86は礫から剥された剥片を加工した片刃の石器である。

83は比較的大きな剥片で、裏面には形を整えるためか2カ所の大きな剥離がある。表面側は数カ所の大小の剥離があり、刃部がつくりだされている。一部に礫の自然面が残る。84の表面には整形のための剥離が施され、裏面も右側からの打撃による大きな剥離が認められる。裏面のみ左側から下部にかけて小さな剥離が施され、刃部をつくりだしている。表面には礫の自然面が残る。85は角が直角に近い自然礫から剥ぎとった剥片で、薄さが均一で表面側全面に自然面が残る。裏面には小さな剥離により刃部がつくりだされている。86は裏面の右側のみに剥離が施され、左側には自然面が残る。

第96図87～89は石礫である。87は珪岩製、88・89は黒曜石製である。

90は黒曜石製の石錐である。

以上、遺構外出土の遺物であるが、細片や図示し難い遺物が多く、全容を表示するには至らなかったが、主な遺物は紹介できたと思う。

遺構外からは縄文時代早期後葉から中期中葉、平安時代前期から中期および中世以降の遺物も出土しており、検出された遺構の比定時期より古い遺物も出土している。本遺跡の遺構の検出状況は、農耕による攪乱により上部が消滅している例が多く、掘り込みが浅い遺構が消滅している可能性も考えあわせると、遺跡が機能していた期間は検出された遺構から推定される時期より前後に幅があると言える。



図版 K-1 1号住居址確認



図版 K-2 1号住居址土層断面



図版 K-3 1号住居址カマド確認



図版 K-4 1号住居址カマド確認アップ



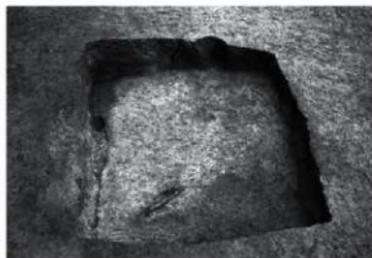
図版 K-5 1号住居址カマド土層断面



図版 K-6 1号住居址カマド完掘



図版 K-7 1号住居址カマド完掘アップ



図版 K-8 1号住居址完掘



図版 K-9 2号住居址確認



図版 K-10 2号住居址土層断面



図版 K-11 2号住居址カマド確認



図版 K-12 2号住居址完掘



図版 K-13 3号住居址確認



図版 K-14 3号住居址土層断面



図版 K-15 3号住居址カマド確認



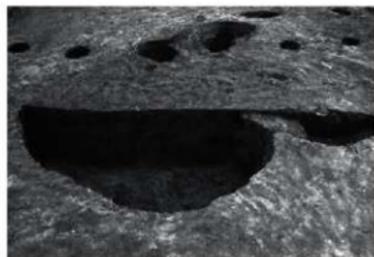
図版 K-16 3号住居址完掘



図版 K-17 4号住居址確認



図版 K-18 4号住居址土層断面



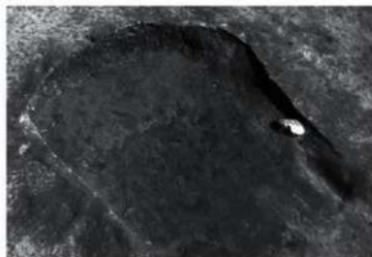
図版 K-19 4号住居址内ピット断面



図版 K-20 4号住居址完掘



図版 K-21 5号住居址確認



図版 K-22 5号住居址完掘



図版 K-23 6号住居址確認



図版 K-24 6号住居址完掘



図版 K-25 7号住居址確認



図版 K-26 7号住居址土層断面



図版 K-27 7号住居址完掘



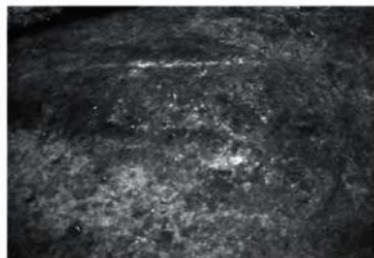
図版 K-28 8号住居址確認



図版 K-29 8号住居址遺物出土状態



図版 K-30 8号住居址完掘



図版 K-31 9号住居址確認



図版 K-32 9号住居址完掘



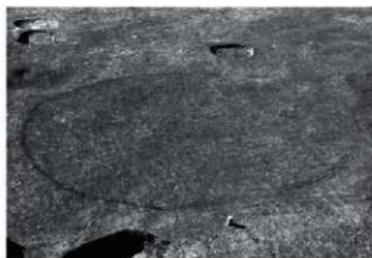
図版 K-33 10号住居址確認



図版 K-34 10号住居址カマド確認



図版 K-35 10号住居址完掘



図版 K-36 11号住居址確認



図版 K-37 11号住居址土層断面



図版 K-38 11号住居址完掘



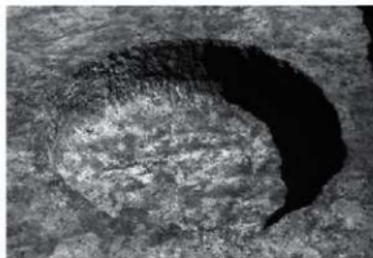
図版 K-39 1号土坑確認



図版 K-40 1号土坑土層断面



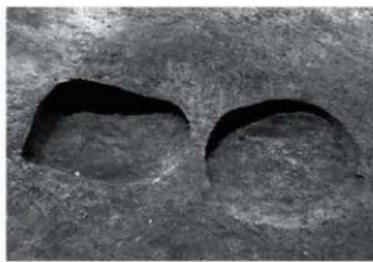
图版 K-41 1号土坑遗物出土状态



图版 K-42 1号土坑完掘



图版 K-43 2号土坑完掘



图版 K-44 3号·4号土坑完掘



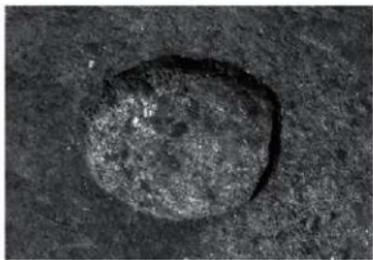
图版 K-45 5号土坑土层断面



图版 K-46 5号土坑完掘



图版 K-47 6号土坑完掘



图版 K-48 7号土坑完掘



图版 K-49 8号土坑完掘



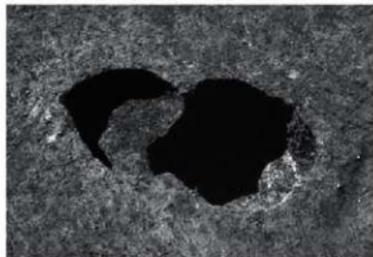
图版 K-50 9号土坑完掘



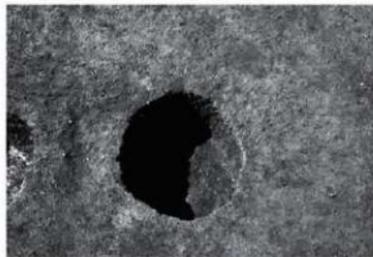
图版 K-51 10号土坑完掘



图版 K-52 11号土坑遗物出土状态



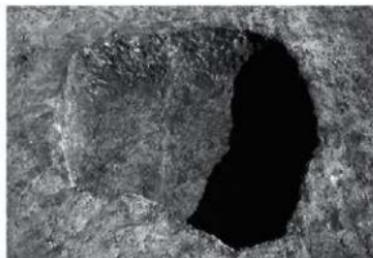
图版 K-53 12号土坑完掘



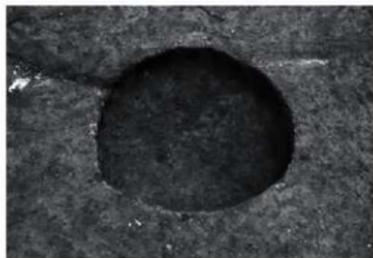
图版 K-54 13号土坑完掘



图版 K-55 14号土坑完掘



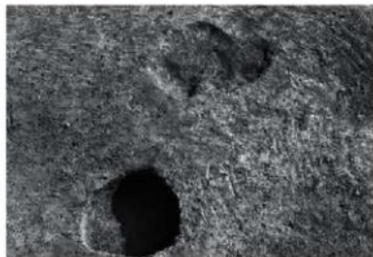
图版 K-56 15号土坑完掘



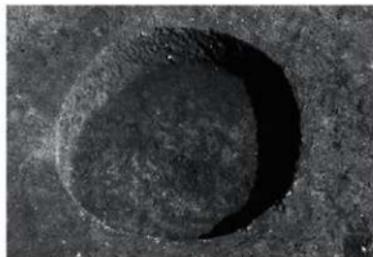
图版 K-57 16号土坑完掘



图版 K-58 17号土坑完掘



图版 K-59 18号·19号土坑完掘



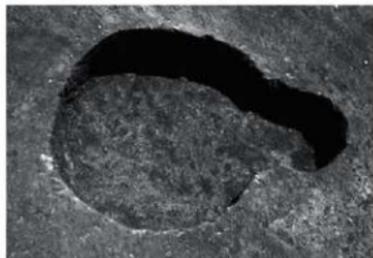
图版 K-60 20号土坑完掘



图版 K-61 21号土坑完掘



图版 K-62 22号土坑完掘



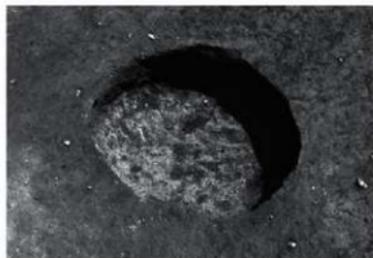
图版 K-63 23号土坑完掘



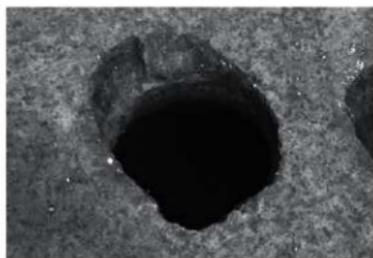
图版 K-64 24号土坑完掘



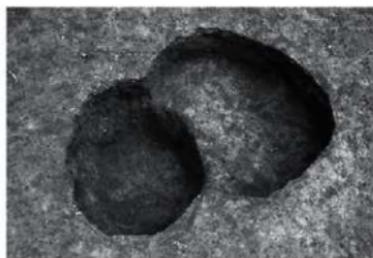
图版 K - 65 25 号土坑完掘



图版 K - 66 26 号土坑完掘



图版 K - 67 27 号土坑完掘



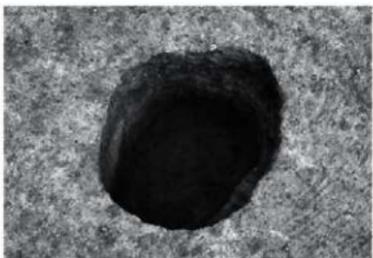
图版 K - 68 28 号土坑完掘



图版 K - 69 29 号·30 号土坑完掘



图版 K - 70 31 号土坑完掘



图版 K - 71 32 号土坑完掘



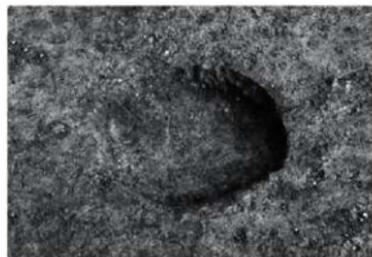
图版 K - 72 33 号土坑土层断面



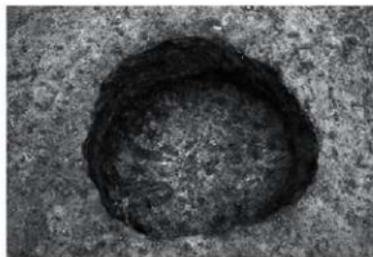
图版 K-73 34号土坑土层断面



图版 K-74 35号土坑确认



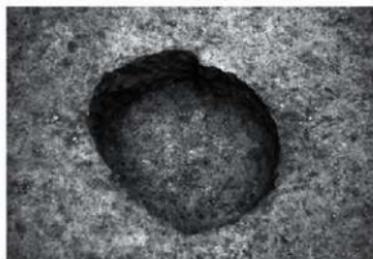
图版 K-75 36号土坑完掘



图版 K-76 37号土坑完掘



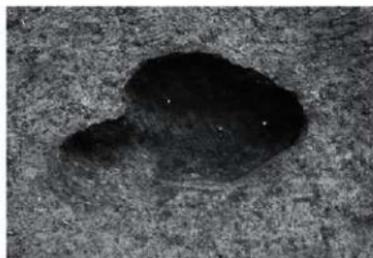
图版 K-77 38号土坑土层断面



图版 K-78 39号土坑完掘



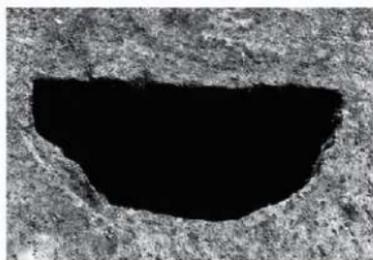
图版 K-79 40号土坑完掘



图版 K-80 41号土坑完掘



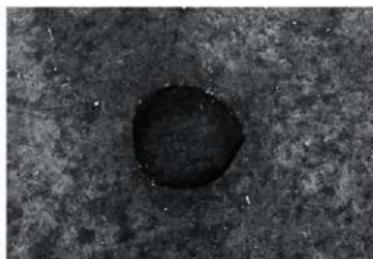
图版 K-81 42号土坑完掘



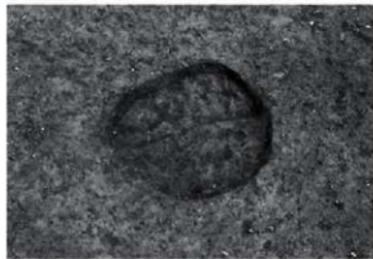
图版 K-82 43号土坑土层断面



图版 K-83 44号土坑完掘



图版 K-84 45号土坑完掘



图版 K-85 46号土坑完掘



图版 K-86 47号土坑完掘



图版 K-87 48号土坑完掘



图版 K-88 49号土坑完掘



图版 K-89 50 号土坑完掘



图版 K-90 51 号土坑完掘



图版 K-91 52 号土坑完掘



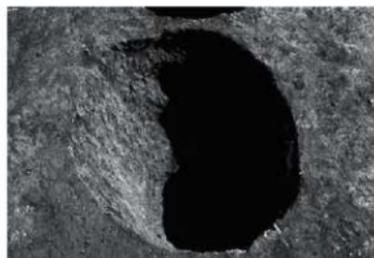
图版 K-92 53 号土坑完掘



图版 K-93 54 号土坑完掘



图版 K-94 55 号土坑完掘



图版 K-95 56 号土坑完掘



图版 K-96 57 号土坑完掘



図版 K - 97 58号土坑完掘



図版 K - 98 59号土坑完掘



図版 K - 99 60号土坑完掘



図版 K - 100 遺構外埋設土器出土状態



図版 K - 101 調査着手



図版 K - 102 作業風景



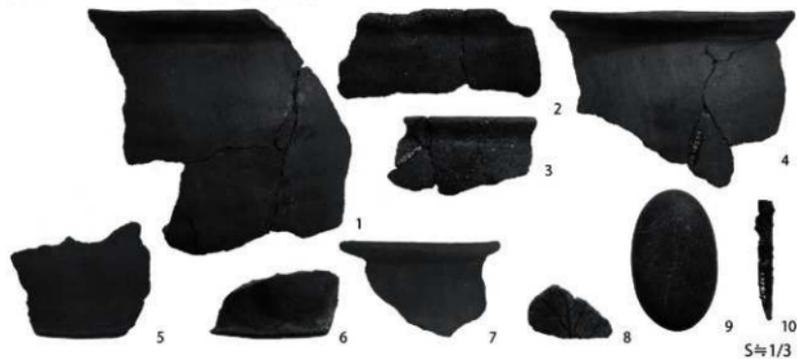
図版 K - 103 作業風景



図版 K - 104 孝道遺跡全景（東から）



图版 K - 105 1号住居址出土遗物



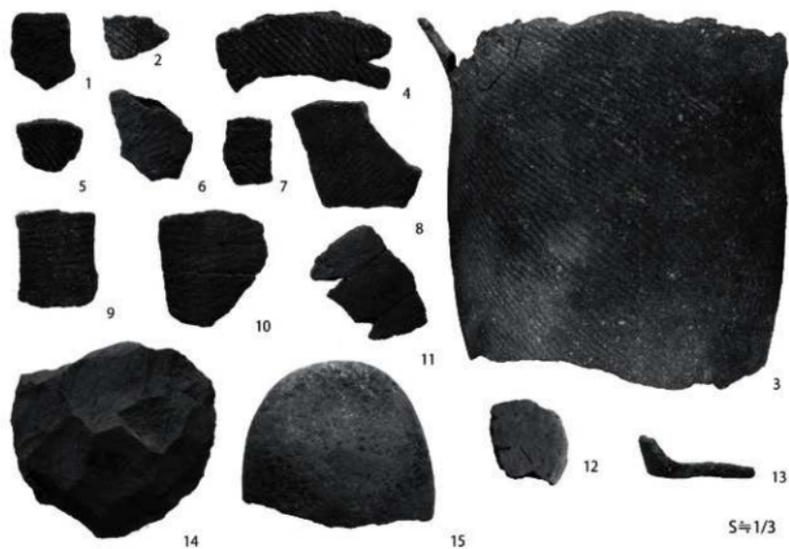
图版 K - 106 2号住居址出土遗物



图版 K - 107 3号住居址出土遗物



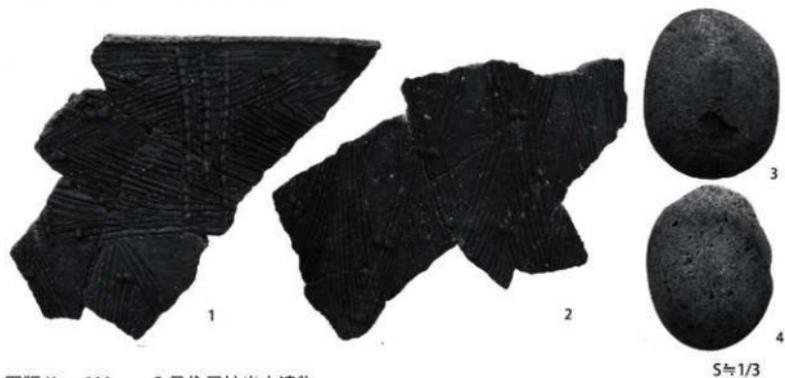
图版 K - 108 4号住居址出土遗物



图版 K - 109 6号住居址出土遗物



图版 K - 110 7号住居址出土遗物



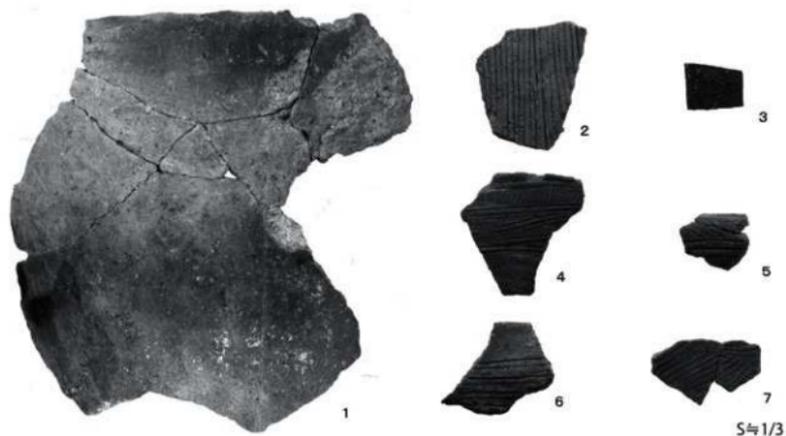
图版 K - 111 8号住居址出土遗物



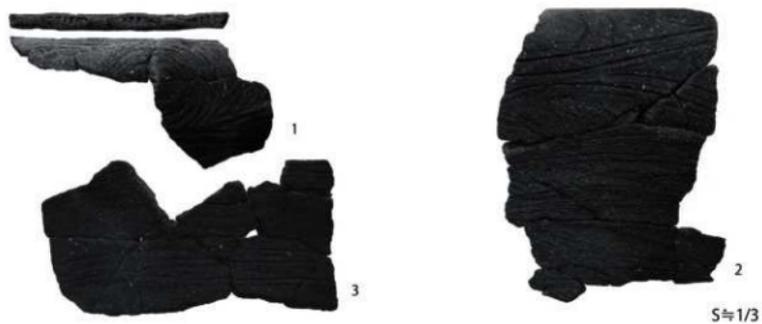
図版 K - 112 9号住居址出土遺物



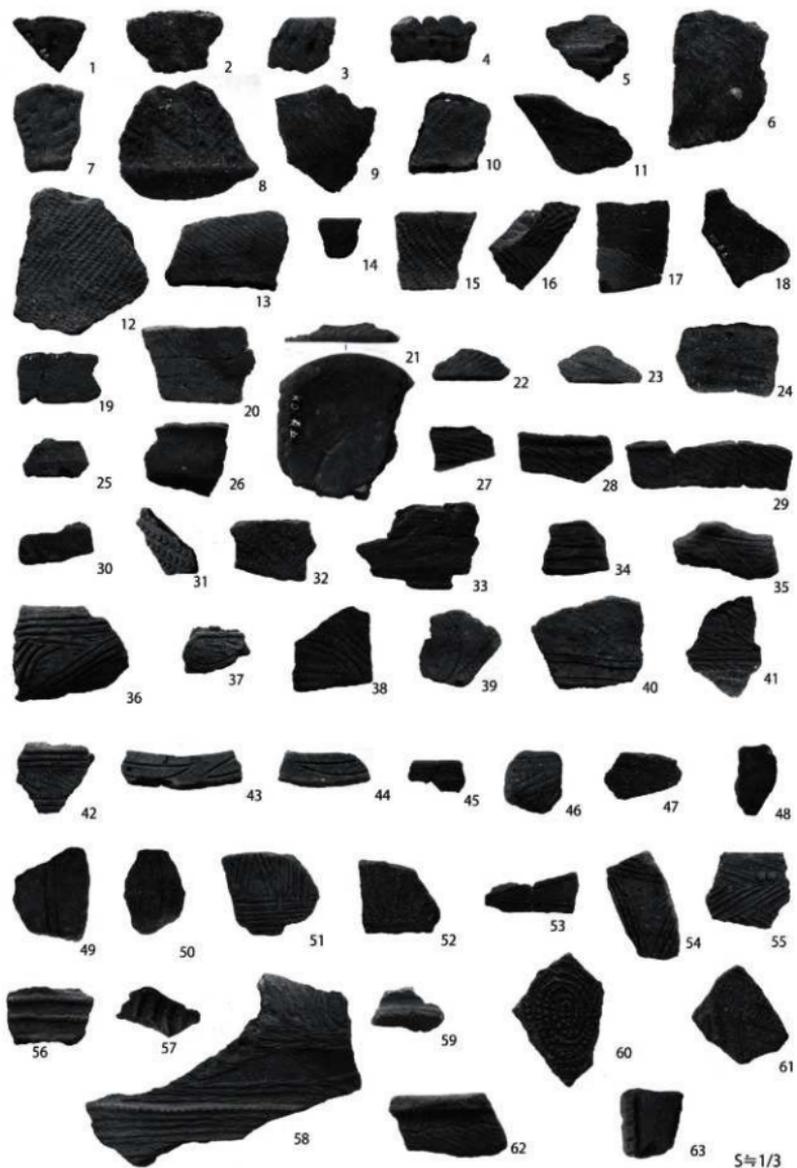
図版 K - 113 10号住居址出土遺物



図版 K - 114 土坑出土遺物 (1 = 1 P、2 ~ 3 = 54 P、4 = 55 P、5 ~ 7 = 56 P)

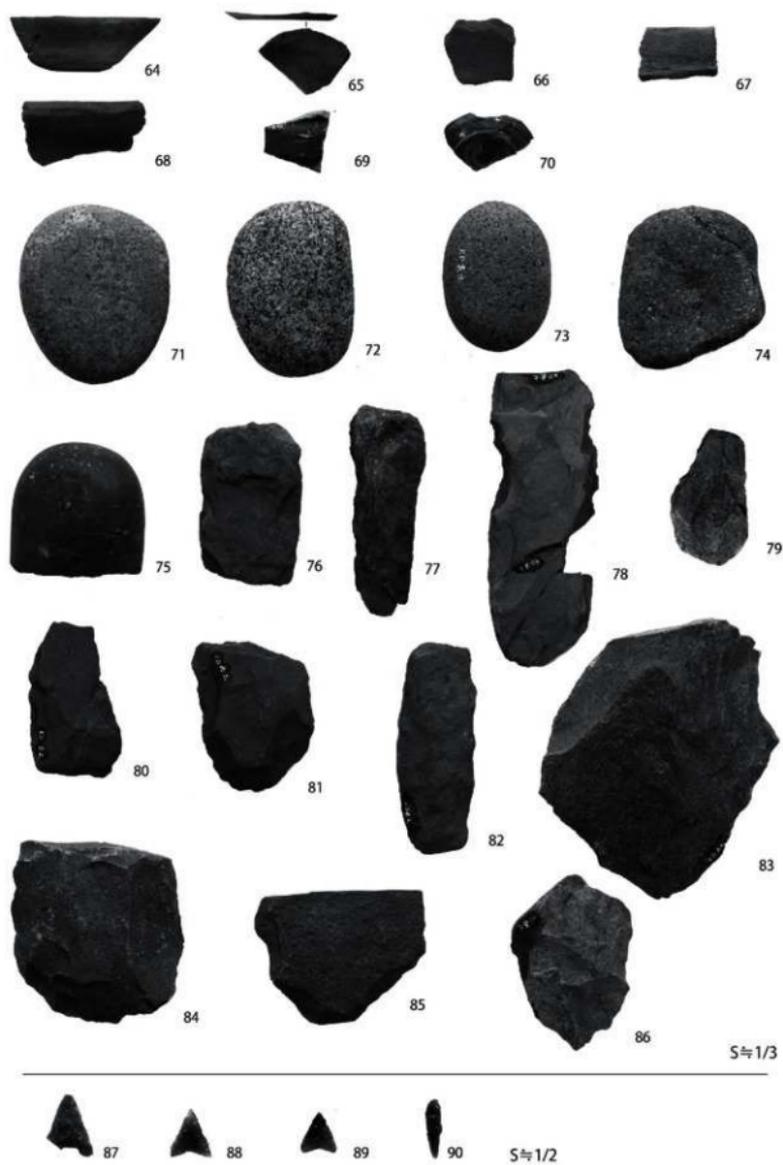


図版 K - 115 遺構外出土埋設土器



S与1/3

図版 K - 116 遺構外出土遺物 (1)



図版 K - 117 遺構外出土遺物 (2)

第IV章 総括

現在までに市内で実施された発掘調査は、河岸段丘上や山裾の緩傾斜地に立地する遺跡が対称で、今回ように尾根や谷が入り組み起伏に富んだ山間地形内での発掘調査は大月市では初めてのことであった。

調査対象地のうち後林遺跡、孝道遺跡は、昭和40年代に表面採集による分布図によって埋蔵文化財包蔵地として登録された場所で、山中であっても耕地として利用されていたことが発見につながったと言えよう。逆説的に言うと、耕作が行われていない状況では表面採集という手法の対象にはなっていないと考えられる。

さらに、地形の起伏を活かしつつ広範な用地を要する用途がなければ、このような開発計画はあり得ず、上平遺跡、柴草遺跡の発見もなかったものと考えられ、幾つかの偶然や必然によって実施された調査であった。ここでは発掘調査の成果や問題点について総括する。

後林遺跡

調査対象となった4カ所の埋蔵文化財包蔵地のうち、最も勾配のある地形であった。調査の結果60カ所の掘り込みが確認され、その内訳は、陥し穴10基、土坑9基、農耕による穴38カ所、風倒木痕2カ所、攪乱1カ所であった。

陥し穴については、4Pは平面形が長楕円で底面が狭まるタイプ、24P・50Pは底面に1カ所の穴を伴うタイプ、31P・33P・53P・56P・57P・58P・60Pは底面に多数の小穴を伴うタイプで、この小穴は逆茂木を接地した痕跡とみられている。分布の状況を見ると4Pは調査区最南部に位置するが1例のみの検出なので分布の傾向は読み取れない。多数の小穴を伴うタイプは調査区北東側に偏在している。土坑とした6P・9P・12P・28P・32P・34P・40P・44P・55Pは平面形が円形または楕円形の掘り込みである。6P・32Pは陥し穴とは形態が異なり別の機能を有していると考えられるが、それを明らかにすることができず、単に土坑とした。ほかの土坑は規模的には陥し穴と大差がなく、底面の小穴の有無によって分類したものである。小穴については、調査中に底面に不規則な小穴が存在しているかのように見える例があるが、同時に掘り込みの外側（遺構外）にも同様の痕跡が認められるケースがある。これは干割れや植物の根などでできた空間に上層が流れ込んだものと考えられるが、陥し穴の小穴との識別は困難である。今回の調査では遺構の外周にも小穴のような痕跡が認められた場合には底部の小穴を掘らないこととしたが、土坑としたこれらの中に本来は陥し穴であった遺構が含まれている可能性がある。

遺物はわずかに9点の出土であった。陥し穴も含め、これら土坑の構築時期については、唯一4Pから出土した土器片(第15図-2)が縄文時代早期後葉～前期前葉に比定されることから、4Pに限っては伴出土器に近い時期の所産と言えそうだが、全体の出土遺物が少なく、ほかの土坑の構築時期は不明である。

上平遺跡

平安時代の住居址2基と縄文時代の土坑3基が検出された。住居址については1Pdより2Pdの方が後出の要素があり、2軒は同時期に存在していなかった可能性が高い。それぞれの住居は単独で存在していたことになる。

土坑についても、タイプの異なる3基が確認されたが、周囲からは類似例のみならず、掘り込みの痕跡さえ検出されなかった。

ほかにも遺構があったのではないかという前提で考えると二つの可能性が考えられる。

一つは調査対象範囲の選定の方法である。範囲確認調査時点で、今回の調査範囲の東側および南側は地形的に1～2mほど低く、表土を除去した時点で一般的なローム層の表層より深い部分の層が露出し、遺物も出土しなかったことにより本調査範囲から除外したが、この部分に遺構が存在していた可能性。

二つ目は耕地化することによって風雨で表土が流出し、次期の耕作時には流出した分深く耕すという循環を繰り返すことにより、地下の遺構が攪乱され消滅するという可能性である。これに起因すると考えられる現象は本遺跡以外の3遺跡でもみられ、住居地の床面や土坑の底面の一部が消滅している例が多数確認されている。この場合、遺構の掘り込みが浅ければ遺構全体が消滅してしまうこともあり得ることになる。

本遺跡の場合、A～G-1～4グリッドにおいて、表土の直下にローム層が直に露出するという状況があり、この範囲においては本来存在していた遺構が消滅している可能性がある。ただし、遺構は消滅しても遺物は残るので、住居などの遺構が存在していたとすれば、それなりの遺物が出土するはずであるが、そのような状況も認められなかった。

調査対象範囲については、もう少し広い範囲を対象としていれば、遺構分布の広がりの有無が明確になる可能性があった。

柴草遺跡

今回の4カ所の調査区の中で、唯一尾根上に立地する遺跡である。

縄文時代の住居1基、小竪穴ともいべき方形の土坑5カ所、深い竪穴の下部に地下室を伴う地下式坑6カ所、一定範囲に大小の土坑が密集するピット群1カ所が確認された。

地形的に北西～南東方向に傾斜しており、遺構は等高線に沿った方向に広がりを持つ傾向があり、特にピット群においてはその傾向が顕著である。

調査区内は2段の造成面が存在する。上段は1Pdより北西側が削平されており、削平部に遺構は存在していない。1Pdの南東部から2Pの南東部までは急角度に削られ斜面となっており、続いて土坑群やピット群の存在している2段目が造成されている。5Pより南東部は再び急角度の斜面となりその下部が削平されている。本遺跡の遺構の集中部は2段目に存在しており、通常ならこの部分は上段のように遺構の空白部となるはずである。このことからピット群構築前に2段目の造成が行われていると推察される。

1Pdは本遺跡内で唯一の縄文時代の遺構である。1Pd-aと1Pd-bの2軒の住居が重複しており、実質的には2軒の住居が検出されたことになるが、重複していることから確実に同時には存在していない。これらが集落を構成せず、単独で存在していたか否かについては、上段や2段目の造成により幾つかの遺構が消滅している可能性があるため、明確にはできない。

1P～5Pは隅丸方形あるいは長方形プランの竪穴遺構である。規模で比較すると長軸で最大450cm、最小で230cmであり、形態の上でも壁面に沿ったピットの有無など個々の違いはあるが、構築の場所が2段目の南半部に限られており、少なくとも柱穴を有する1P・2P・4Pは同様の目的のために構築された遺構と推測される。中でも規模が大きく柱穴が整然と並んでいる2Pは、良好な検出の状態や伴出遺物を伴うなど、これらの遺構を代表する存在と考える。

まず年代であるが、出土した貨幣の鋳造年代は998年(咸平元寶)～1423年(朝鮮通宝)であり、当時は鋳造年代に関係なく古い貨幣も通用していたことから、古い貨幣が混じっていることには問題はない。通常と考えれば遺構の構築時期は1423年以降と推定される。次に遺構の機能であるが、この遺構が住居など生活の拠点と想定するには出土遺物の中に食器類が乏しい。特に貨幣が出土していることから倉庫や貯蔵的な機能も考え難く、死者を祀る霊屋的な機能や祈願・礼拝

などの宗教的な機能を想定することによって、貨幣の出土も冥銭や寶銭として整合する。

6P～10Pは地下式坑で、これらは従来、貯蔵施設あるいは葬送施設とする説があるが定まらず、その機能は明確ではない。

10Pの地下室は一つであるが、竪穴は2ヵ所から掘られ重複している。このため遺跡内には6基の地下式坑が存在することになる。これらの竪穴と地下室の位置関係は、方位や地形に対する規則性は認められないものの、竪穴だけを比較すると等間隔に弧線状に並んでいる。さらに1P～5Pを取り囲むように南西側に配置し、地下室は1P～5Pから遠ざかる方向に掘られているという共通性から、1P～5Pとの何らかの関連性を想起させる。この想定が正しければ6P～10Pの構築年代は1P～5Pと近似し、時期的には中世中葉から江戸時代初頭ころにかけて、機能的には霊屋と葬送施設という組み合わせも考えられ、調査区内2段目の造成もこれらを目的に行われたことも想定できる。しかし現段階ではそこまで明確に機能を特定できる資料はない。

ピット群として一括してとらえた大小の土坑群の中には、様々な機能や様々な構築時期のものが含まれている。調査区内2段目の造成面にあることから、中世以降に構築されたものが多く、それ以前の浅い遺構は消滅している可能性が高い。以後の農耕による耕作痕や攪乱などが多数含まれているほか、掘立柱建物の柱穴痕などもあり得るが、指摘するに至らなかった。

孝道遺跡

平安時代の住居址群が主体のA区と縄文時代前期の住居址群を主体としたB区の2つの調査区からなる。調査前は周知の埋蔵文化財包蔵地として、孝道1、孝道2遺跡が登録されていたが、範囲確認調査を行ったところ、深部まで攪乱が到達していることもあり、登録箇所からは遺構の存在は確認されず、新たにA区、B区に密度の濃い包蔵地が存在することが分かった。A区は北、東、南の三方を尾根に囲まれ、西側に開けた谷戸地形で、B区はその延長上にあり谷から押し出した堆積物から成る地形と推測される。B区の北側はA区の北側から西に延びる尾根と同等の高さの緩傾斜地である。

A区からは奈良時代末期から平安時代にかけての住居址4基、縄文時代の住居址1基、縄文時代から近世以降にかけての土坑54ヵ所が確認された。また、B区からは縄文時代前期および時期不明の住居址6基、縄文時代の土坑5ヵ所、時期不明の土坑1ヵ所が確認された。

A区とB区の間には遺構の空白地帯が存在したことは当初の予想通りであり、両地区は時代により利用の方法が異なっていたことが分かった。

しかし、気になるのはA区の南西部に位置する3Pdや11Pdが壁面の一部だけが残され、南西部を攪乱で失っていることである。A区の中でも農耕による攪乱の影響が認められるが、それは谷頭部分には少なく、裾部にかけて徐々に深い部分まで攪乱されている傾向が認められる。特にグリッドのD列以西は急に角度を増し、床面を失うほどの深さまで攪乱の影響を受けている。この傾向がさらに西側に及ぶとすると、A区・B区間の遺構の空白は攪乱により遺構が消滅したという可能性も否定できない。

耕作による攪乱はB区でも同様である。B区からは6ヵ所の土坑が検出されているが、A区で多数検出されている農耕による穴や中世以降の土坑としたものが見当たらない。これについてはB区がA区以上に深いレベルまで攪乱されていたためだと推測される。また、B区最北部の8Pdや9Pdなど北側ほど遺構の残存率が低い傾向があり、調査区から除外したB区の北側部分は、遺構が存在していたが消滅してしまった部分と捉えた方がよさそうである。

以上のように、遺構の上部が消滅しているという可能性を踏まえると、埋設土器として第90図・第91図に図示した土器については、出土地点の周辺に床面や柱穴などが確認できなかったこと

から埋設土器としたものである。しかし、攪乱が深くまで達している地点であることを勘案すると、遺構内からの出土と考えた方が出土状況に整合する。したがって出土地点は遺構の中であり、土坑や住居の壁面が消滅した結果と考えられる。

検出した土坑のうち縄文時代に帰属すると考えられるのは26カ所で、そのうち機能が推定されるのは貯蔵穴2カ所、陥し穴7カ所の9カ所である。単に土坑としたものも含め、構築時期が明確なものはない。ただし陥し穴が存在することによって、そこが狩猟の場であると特定されることから、陥し穴の近隣に貯蔵穴や住居などが同時に存在することは想定しがたく、異なる時期に異なった土地利用をした結果と考えられる。

縄文時代の「土坑」と「陥し穴」は、規模や形態、土層堆積状態などにおいて大差はなく、逆茂木の痕跡とされる小穴の有無によって分類したものである。土坑については、逆茂木がなくても陥し穴として使用された可能性も否定できないが、墓塚や貯蔵などほかの機能も考えられる。

また、土坑は多くの類例を検出しながら、構築時期を絞り込むことができなかった。55 P・56 Pから土器片が出土しているが、陥し穴という性格や周囲に住居が存在している状況から伴出というより流れ込みの可能性が高い。しかしながら土坑の埋没過程で土器片が流れ込んだとすると土坑の構築時期は住居より新しいと考えられるので、少数例ではあるが構築時期判断の一つの手がかりとなる。ただし、ほかの陥し穴が55 Pや56 Pと同時期の構築であるとは言えない。

調査全般について

前記のとおり、大月市では初めての山間の発掘調査であり、完新世以降の浸食作用により、地形の変化が著しく、場所により土層堆積状態も一様ではない中での調査は容易ではなかった。

耕作地の表土の流失についてはこれまでもそれと思われる状況を見てきたが、今回のように遺跡全体の土層が消滅している状況は初めてであった。表土流失の主な原因は雨と風と思われるが、通常は堆積する土層の方が多く、市内の遺跡は60cm～80cmほどの土層に覆われている。農耕の有無は絶対条件とは言いきれないが、樹木や草の少ない耕作地では、堆積よりも流失量が多くなる可能性が高く、尾根地形や斜面ではこの傾向が強まると考えられる。ちなみに計算上は年間に2mmの流出を想定すると、300年で60cmの厚さが失われることになる。

今回調査した全遺跡で、通常遺物包含層として存在する黒色土や暗褐色土がほとんど認められず、ローム面が直に出現するという状況であった。また、プラン確認時点で一部欠損が明瞭な例も多数あり、場所によっては遺構全体が消滅している可能性も考えられた。

これに対応するには、表土除去段階から手作業で行い、攪乱層中の遺物分布を確認するという方法が考えられるが、遺物を伴わない遺構の存在を証明することはできない。

人里から離れた山の中の調査であることから良好な遺存状態が期待されたが、傾斜地や耕作地では予想外の外力が地下の遺構に影響をおよぼすことがある。

大月市内では、縄文時代早期～前期に属する遺跡は、岩殿倉遺跡、原平遺跡の2例の発掘調査が行われているだけで、この時期の遺跡数も調査例も少ない。今回調査した4カ所のうち3カ所から、この期の生活の痕跡が確認されたことは、類例が増えたことだけでなく、生活の適地として選んだ環境を知れるという意義が大きい。また、平安時代の集落遺跡については大月遺跡や原平遺跡などで河岸段丘や山裾の緩傾斜地での存在が知られていたが、やや奥まった起伏のある地形の中にも住居が営まれていたことが明らかになった。

参考文献

- 大月市教育委員会 1974 山梨県大月市岩殿中倉遺跡発掘調査報告
山梨県教育委員会 1874 『大月遺跡(1) 県立都留高等学校校舎改築に伴う第一次調査報告書』
大月市市史編纂委員会・大月市 1976 『大月市史』資料編
大月市市史編纂委員会・大月市 1978 『大月市史』通史編
都留市教育委員会ほか 1981 『中谷・宮脇遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告第8集
山梨県教育委員会 1987 『釈迦堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第21集
山梨県教育委員会 1987 『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集
山梨県教育委員会 1892 『大月遺跡(Ⅱ)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第57集
山梨県教育委員会 1996 『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集
山梨県教育委員会 1998 『大月市御所遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第154集
山梨県 1998 『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古(遺跡)
山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古(遺物・遺構)
山梨県教育委員会 1999 『原平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第160集
山梨県教育委員会 2000 『大月遺跡第7・8次調査』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第159集

報告書抄録

ふりがな	うしろばやし・わだいら・しばくさ・こうどういせき			
書名	後林・上平・柴草・孝道遺跡			
副題	花咲カントリー倶楽部建設予定地内における発掘調査報告書			
編著者名	杉本正文			
編集機関	大月市遺跡調査会			
所在地・電話番号	山梨県大月市大月二丁目6番20号			
発行者	大月市遺跡調査会			
印刷所				
印刷日・発行日	2018年8月21日			
1/25,000地図名	大月	調査原因	ゴルフ場建設	
所収遺跡				
後林遺跡	所在地	山梨県大月市大月町花咲後林 2483、2484、2485		
	位置	北緯 35° 36' 22.71"	東経 138° 55' 10.71"	
	調査期間	平成 2 年 6 月 10 日～24 日、同 11 月 10 日～23 日		
	調査面積	1,400㎡		
	種別	土坑群	主な時代	縄文時代
上平遺跡	主な遺構	土坑	主な遺物	縄文土器、石器
	所在地	山梨県大月市大月町花咲字上平 2620～2629 ほか		
	位置	北緯 35° 36' 29.56"	東経 138° 55' 12.64"	
	調査期間	平成 2 年 6 月 25 日～7 月 5 日、同 11 月 24 日～12 月 4 日		
	調査面積	2,600㎡		
柴草遺跡	種別	集落	主な時代	平安時代
	主な遺構	住居址	主な遺物	土師器
	所在地	山梨県大月市大月町花咲字柴草 2748、2750、2751、2752		
	位置	北緯 35° 36' 38.45"	東経 138° 55' 9.86"	
	調査期間	平成 2 年 7 月 16 日～22 日、同 12 月 5 日～25 日		
孝道遺跡	調査面積	1,200㎡		
	種別	集落、地下式坑群	主な時代	縄文時代、中世以降
	主な遺構	住居址、地下式坑	主な遺物	縄文土器、石臼、古銭
	所在地	山梨県大月市大月町花咲字孝道 3007、3009～3016 ほか		
	位置	北緯 35° 36' 42.09"	東経 138° 55' 31.68"	
調査期間	平成 2 年 7 月 24 日～同 11 月 9 日			
調査面積	3,400㎡			
種別	集落、土坑群	主な時代	縄文時代、平安時代	
主な遺構	住居址、土坑	主な遺物	縄文土器、土師器	

大月市埋蔵文化財報告書

2018年8月21日発行

後林・上平・柴草・孝道遺跡

編集 大月市遺跡調査会

大月市大月2-6-20

TEL 0554-22-2111

発行 大月市教育委員会・大月市遺跡調査会

印刷 株式会社 誠実堂

